
暁の星とともに

karon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁の星とともに

【Nコード】

N1538X

【作者名】

karon

【あらすじ】

サフラン商工会付属特殊部隊小隊長ミリエルは、ある日唐突に隣国の姫君だという宣告を受ける。

特殊部隊を不名誉除隊した彼女は連れ戻された隣国で政略結婚を命じられる。

そしてその政略結婚はまさしく死んでこいと言いたくない内容で、過酷な運命に立ち向かう。ミリエルの冒険が始まる。

ミリエルの友暁の星とともに異国へと旅立つ。

第一章、サン・シモン編は番外編というか。本編じゃない感じがし

ます。もちろん本編に至る伏線はいっぱい張ってありますが設定ど
うりのお話なら第二章、リンツァー編、第三章サヴォワ編からお読
みください。

特殊部隊入団（前書き）

以前も投稿させていただきましたが、あれは事前に書いたものを
順次投稿していました。これはリアルタイムで書いておりますので
ご容赦ください

もしかしたら別作品で出た名前があるかもしれませんが別人です。

特殊部隊入団

森の中 深い深い森の中、獣道に近いその場所に、唐突にその子供は立っていた。

髪を肩までに伸ばし後ろでくくっている。

着ているものは薄汚れたシャツと上着、そしてズボン。もう少し小奇麗ならば、平均的な家の子供の普段着だ。

髪も顔も全体的に薄汚れていて、容姿の美醜も見分けがたい。その中で目だけが綺麗な緑色をしていた。

深い森の中で、出会うはずのないその存在の足元に、巨大な死骸が横たわっていた。

大猪。それもめつたにいない大物の雄猪だった。

首の辺りに鋭利な刃物を使われたような傷がある。

そして、明らかに、子供の薄汚れた衣服の上からもわかる返り血の後。

「お前がしとめたのか」

子供はこくりと頷く。

「どうしよう」

か細い声で訴えた。

「こんな大物、食べきれないよ、でも処分しないと狼が来るし」

そう泣きそうな顔で訴えられて、彼は対応に困った。

彼は、軍事教練の一端で森に分け入った軍人で、何でこんなところに民間人の子供がいるのか困惑している途中で、そして、自分は軍人であって猟師でも肉屋でもないのに、猪は捌いたことがなかった。

確かに、猪を処分することが子供一人では難しいかもしれないが、大人が一人いれば解決するかわれれば否と答えざるを得ない。初対面の子供と、仲良く困惑していると、大勢の足音が聞こえてきた。

全員街の住民で、どこかで見たような顔も混じっている、総勢十五人ほど。

その全員が満面の笑みを浮かべている。

「よくがんばったな、これで最終試験は合格だ」

真ん中の男がニコニコと笑いながら告げた。

ようやく彼は、今何を見ているのか気付いた。

「もしかして、特殊部隊の入団試験か？」

サフラン商工会付属機動隊、ならびに特殊部隊は、精鋭ぞろいとな名高い。

その入団試験の一部に、野外訓練があり、丸一週間武器だけを持ち込み深い森や山の中で生き延びると言う試験があると聞いたことがある。

「史上、最年少記録を更新だ」

禿げ上がった。その場で一番年長の男が断言する。

唐突に子供が口を開いた。

「あの、最終試験は終わってないでしょう、果し合いの相手は誰」

全員の笑みが深くなる。しかしその笑みはどこか硬直した、笑みの形に固まっているような印象を受ける。

「その猪を倒した段階でその必要はないと判断された」

全員がその言葉に頷く。そして彼は、血祭りに上げられた猪を見る。

なるほど、誰でも命は惜しいよなと納得した。

特殊部隊入団（後書き）

ここまでではカテゴリーのうち何も出てきませんね、軍隊ぐらいか

特殊部隊入団 2

彼は、そのままサフラン商会特殊部隊に同行した。

どの道新人研修の下見だったし時間に余裕もあった。

猪は、そのまま男達が縄でくくって運ぶことになった。

しばらく行くと、拓けた場所に出てそこには小さな小屋と、男女取り混ぜた二十人ほどの人間が待っていた。

小屋の中は最低限の生活設備が整っているように見えた。

猪は、女達が裏の、水場に引きずっていく。

「そつえば、おめでとう、お嬢ちゃん」

彼はそう呼んでみた。

未熟な少年をからかった言葉だが、子供は無表情にそれを受け流した。

今まで何人もの若手の新任兵士にこれをやったが、これを受け流したものは誰もいない。それをこんな子供が少々の不機嫌になる程度とは。

思わず彼は息を呑んだ。

水場に向かった女達とは別の女が子供の手を引く。

「いつまでそんな格好してるの、着替えな」

そのまま小屋の中に子供を引きずっていく。

猪は、一部はそのまま料理され、本日の祝いのメインディッシュになるらしい。炙り肉を作る芳ばしい匂いがしてきた。

そして、食欲をそそる串焼きが彼の目の前に来たとき、再び子供が彼の前に現れた。

肩までの髪は頭の両脇に大きなリボンでツインテールに結ばれて着ているものは、エメラルドグリーンのワンピース。

綺麗に泥を落とした顔は、以外に繊細で、愛くるしかった。

それはお嬢ちゃんといわれる生き物だった。

先ほどの呼びかけに無反応だったのも当然だ。お嬢ちゃんをお嬢

ちゃんと呼んでリアクションが得られるわけではない。

ちよつと不満げだったのはお嬢ちゃんではなくお嬢さんと呼んでほしかったからだろう。

「それでは、本日、特殊部隊入団規定を史上最年少で終了したミリエルの歓迎式を行う」

どうやらお嬢ちゃんはミリエルというらしい。

平民としては、おそらく最高に着飾っているらしい、鮮やかな染物のワンピースは木綿でもそれなりに値が張る。

おそらくミリエルが持っている中でもおとつときのやつだろう。

髪は柔らかな銀に近い金髪で、クリーム色にも見える。肌もミルクのように白い。

黙って立っていれば人形のように愛らしい少女なのだが、その手は、大猪に惨劇をもたらす凶器だ。

サン・シモンの大祭（前書き）

ここからようやくミリエルが動きます。

サン・シモンの大祭

サフラン商工会、それが今現在ミリエルが所属している組織の名前、しかし、かつては別の名前で呼ばれていた。

黒獅子傭兵師団。

元々ミリエルの母国サン・シモンは近隣諸国に名高い軍事国家だった。そこに頭角を現したのが傭兵王と呼ばれた黒獅子アルカンジエル。

国内にいたほとんどの傭兵を支配下に置き近隣諸国を相手に巨額の取引をした伝説の英雄。

その跡目をついだ傭兵師団団長は黒獅子を名乗る習わしになっていた。

しかし、ここ数十年、軍縮を叫ばれ、黒獅子傭兵師団も存続の危機に、そんな時立ち上がったのが、第5代黒獅子サージエント。

彼は叫んだ。

「剣を捨てろ、包丁を持て、兜を捨てろ、鍋を作れ、戦いがあるうとなかろうと、人は飯を食わねばなんのだ」

その言葉をもとに、黒獅子傭兵師団は軍事から商業へと転換を図った。

それに国も賛同した。軍事経験者の一団がいつせいに失業者になればどうなるか、脳味噌に皺が一本でもあれば容易に想像がつく。

軍務を離れる彼らのために商業や工業の職業訓練を実施、かくしていつか黒獅子傭兵師団は消滅し、サフラン商工会が誕生した。

しかし、かつての生業の記憶は早々消えはせず、子供達はやっぱり軍事教練を遊びとして叩き込まれ、闇で、隠し武器が販売され、そして、かつての特殊武器の取り扱いが、伝統技能として今も脈々と継承されていたりする。

人は言う。悪人達にとってモーストデンジャラスゾーンと。

店に強盗に入ろうものなら、その場で骨を抜かれる。引ったくり

をやろうものなら通りすがりのおじさんのとび蹴りが炸裂。

いかにもおとなしそうな青年を路地裏に拉致し、金銭を奪おうなどとすれば血反吐を吐くのはその強盗のほうだ。

そんな平和な街にミリエルは育った。

実家の雑貨屋に朝から半日店番をするのが日課の日々。

そして午後からは、サン・シモン最大のお祭りのためにお祭りの前座にサフラン商工会の十二歳から十五歳までの少女が、集団舞踊を披露するためその練習に向かう。

ミリエルは去年は負傷で参加できなかったので、今年が最初の参加だ。

年頃の少女らしくうきうきと。商品にハタキをかけていた。

衣装がかわいらしいピンクなのだ。

ここから遠い東の大陸から伝わった舞踊で、大陸の物産や、技術とともに、この国で広まった。

何でも、その国の食品の製法を学ぶために、二十年その国にいた人たちが伝えたと言う。それは、健康体操として、サフラン商会の人すべてが早朝に一踊りするくらい広まっている。

踊りによって上級中級下級と序列が決まっている。ミリエルは中級を完全マスターし、今上級を練習中だ。

鼻歌交じりに箒を取り出す。

「おはよう」

その声に。ミリエルは振り返った。

「おはようございます、いらっしやいませ」

元々かわいらしい少女なので、全開の笑顔になると、それがより際立つ。

「ミリエルちゃん、お爺ちゃんはいる」

「ごめんなさい、今日は朝から、本部に詰めているの」

「ああ、お祭の準備か」

顔見知りのおばさんが、箒を手には立っている。

「修理、頼める？」

ミリエルは、篩を受け取ると、仔細にそれを観察した。

「今回はできると思いますが、でも箍が大分傷んでますよ、次はお買い替えをお勧めします」

おばさんはくすくすと笑う。

「おじいちゃんの真似も、大分板についてきたね」

ミリエルは、膨れながらも、篩に、名前のついたカードを差し込んでおく。

「真似じゃないもの」

拗ねてしまった少女に、おばさんは、前金として半額を渡す。

小銭をカウンスターの集金箱に納め。それでもミリエルは笑顔で、有難うございましたと送り出す。

「将来を真剣に考えている女の子にそんな言い方ないんじゃない」
そう言ってまた改めて膨れた。

サン・シモンの大祭 2

ミリエルのモットーは堅実、地に足がついた生活。年頃の少女としては少々夢がないが、それは家族が口をすっぱくして物心ついた時からミリエルに言い聞かせてきたことだ。

そんな彼女は、まわりの少女が、いつか王子様が、とか、将来玉の輿になどと目を輝かせるのを横目に、真面目に堅実な将来を考えていた。

とりあえずは、今の雑貨屋を継いで、真面目そつなお嬢さんを迎えて。

ミリエルは母親が堅実と何度も言うのは、自分の経験からだろうと見透かしていた。

ミリエルの母親は、一度嫁いだが、赤ん坊のミリエルを抱えて出戻ってきたと言う。

何でも難しいお家だったと祖父が一度だけ話してくれた。

母はどうやら玉の輿に乗り損ねたらしい。

だからミリエルは玉の輿を夢見ない。その夢が現実になったとき、結構ろくでもない人生が待っているらしいと五歳にして悟ってしまった。

そして舞踊の練習の合間、自分より年かさの少女達が、これから王宮に女官奉公が決まったと嬉々として語るのを冷めた目で見ていた。

女官奉公は確かに玉の輿最短距離といわれているが、女官奉公して玉の輿に乗ったと言われるのは、ミリエルの母親世代に一人いるきり、その前となると祖母くらいの年のはずだ。

つまり、今から玉の輿に乗ったつもりでいる少女達もいずれ現実を知ることになる。

ふっとミリエルは皮肉に笑う。

ミリエルの堅実一番をよく知っている少女達はいつものことだと流した。

休憩が終わり、再び、一糸乱れぬ動きで、手を上げたり、片足立ちをしたり、舞踊の型を決めていく。

ゆったりとした動きだが、ゆつくりと腕を振るのは意外に筋力を使う。

終わる頃にはしつとりと汗ばんで、髪もぺったりと頭皮に張り付いている。

「今年はね、外国の来賓も来るんだって」

きやいきやいと語られる言葉に、外国の高貴な身分の方が、華麗に舞う私に一目ぼれ、などと獲らぬ狸の皮算用に忙しいのがわかる。ミリエルは興味がないので、そのまま帰ろうとした。

「そういえば、あんたの父さん、外国の人なんでしょう」

唐突に言われて、ミリエルは戸惑った。

以前祖父から難しいお家としか聞いていなかったが、外国だとは思わなかった。

母が出戻ってきた理由がなんとなくわかった。身分と文化が違えば、それを乗り越えることは確かに難しい。

「ごめんね、詳しい話は聞いたことないの」

苦笑してそう答えると、相手もそれ以上追及してこなかった。

自分は外国で生まれたのか。思わないところから出た情報にしばらくミリエルは考え込んだが、結局それ以上考えるのを止めてしまった。

そして大祭当日。ミリエルは開催前座の舞踊に参加していた。

ピンクの衣装は、たつぷりとした袖のついた上着と、たつぷりと見ごろを取ったズボンだった。東大陸の民族衣装らしい。

髪型も丸いお団子に結い上げて、衣装と友布のリボンでまとめられている。

鏡で確認してみたが、われながら可愛いとミリエルはご機嫌だっ

た。

商工会の楽団の演奏にあわせて、踊る少女達は、その愛くるしさから周囲の評判も上場だった。

そう、ここまではよかった。ここまでは。

女性専用控え室に、乱入してきた不届き者が現れるまでは。

サン・シモンの大祭 3

女性用控え室と言うものは基本男子禁制だ。なのに何故ここにこの男はいるんだろう。

それがミリエルの感想だった。

王室騎士団の制服を着た若い男だった。騎士団のトレードマークの刈り込んだ黒い髪をしている。

黙って立ってさえいれば、なかなか精悍な青年だったが、いかんせん、黙って立っていたとしても、不屈き者としか言いようがない。何故ならここは女子更衣室もかねていたからだ。

幸い服を脱いでいた女性はいなかったが。しかし唐突に彼は、たまたま近くにいた少女の衣服に手をかけた。

布の破れる音が静まり返った中響いて聞こえた。

胸元をむき出しにされて、少女は甲高い悲鳴を上げる。

「なんてことを、エチエンヌ」

とつさに汗をぬぐうために用意された手ぬぐいを蹲ってしまった少女に渡そうとしたもう一人の少女が今度は拘束され身体を撫で回される。

「イボンヌを放しなさいこの不屈き者」

別の少女が部屋の隅に立てかけてあった簾を手に男を威嚇する。

「やってみろよ、そうしたら困る羽目になるのはお前らだぞ」

男は歪んだ笑みを浮かべる。

「俺に指一本でも触れてみる、お前らが卑怯な手段で、襲撃をかけたと上に掛け合ってやるよ」

男は歪んだ笑みを浮かべる。

「ああ、期待してなかったんだが、結構綺麗どころがそろってるじゃないか」

そう言っただけで身体を押さえ込んだ少女の顎をつかんでその容姿を検

分する。

「お姉ちゃんに酷いことしないでよ」

思わずミリエルは叫んでいた。

「何だ、お前が相手してくれるのか、ああこういう毛色の変わったのも面白い」

そう言っただけ少女を放しミリエルに手を伸ばそうとする。

扉が叩き開けられ、中の様子を仰天した顔でミリエルの母親が飛び込んで来た。

「あんた、うちの子に何してくれるのよ」

そのまま一直線にミリエルに駆け寄り懷に抱え込む。

「あれ、あんたも年増のわりに綺麗じゃないか」

そう言っただけミリエルの母親に手を伸ばそうとする。

「何をしているんだ」

今度は野太い男の声が聞こえた。

「黒獅子」

現商工会長が扉の前に佇んでいた。

その後ろにピンクの衣装が見える。男が乱入してきた時、その場から逃げた少女の一人が、助けを呼んできたらしい。

「叩きだせ」

抑えた声で告げられた言葉に、商工会長の後ろから出てきた機動隊の強面が二人、両脇から男の身体を押さえつけて女子控え室から引きずり出す。

「適当なところに捨ててこい」

そのまま服を裂かれた少女を痛ましそうに見やる。

「エチエンヌ」

再び入って来たものがある。それはミリエルの顔見知りだ。服を裂かれた少女、エチエンヌの兄だった。

「あいつがやったのか」

問いかけの形の確認。ミリエルや他の少女はこくりと頷いた。
「そうか、わかった」

そのまま彼はにっこりと笑った。笑ったまま宣言する。

「殺してやる」

笑顔だった。全開で笑っている。なのに目が笑っていない、どこか鈍い刃物のような光を放っていた。

これは厄介なことになる。ミリエルはそう確信していた。

サン・シモンの大祭 4

本祭がとりおこなわれようとしている本部を前に、これから起こる惨劇に、ミリエルは小さな胸を痛めていた。

「お嬢ちゃん、何してるんだ」

そう声をかけてきたのは見覚えのある騎士だった。特殊部隊入団祝いに、なんとなく混じっていた男だ。

「おじさん、久しぶり」

その言葉に、思わず近くの木に張り付いて震えていたが、何とか気を取り直したようだった。

「できればお兄さんと呼んでほしいが、何があった」

ミリエルは、先ほどの女子控え室であったことを自分のわかる限り詳しく説明した。

男は再び近くの木にかじりついて落ち込んでしまった。木の皮に両手で爪を立てている。

「すまん、たぶん俺の部隊の奴じゃないが、本当にすまん」

木の皮から身体を離すと、そのまま地面に張り付いて謝った。

「おじさんが、謝ることじゃないよ、おじさんそこにいなかったし」「できれば、この立場で言うことじゃないが、お兄ちゃんでお願ひしたかったんだが、とにかく謝らせてくれ、それと、なんかお願いがあるか？」

「一つだけ教えて。エチエンヌのお兄ちゃん、マルセルって言うんだけど、殺しても事故扱いになる？」

「この場合無理だ。そんなことがあって、その後偶然行きあって死んじゃったで通るなら、この国に司法など存在しない」

「あたしもそんな気がしたの」

ミリエルは溜息をついた。

そしてその時妙案を思いつく。ミリエルは地面に張り付いている後頭部に手をかけ強引に顔を上げさせた。

「あのね、順番を操作できる、おじさん」

「順番ね、第一なら可能だ」

「たぶん自分の部隊じゃないって言ったね、そういうことやりそう
な人知ってるの？」

「心当たりはある、と言うか、そこまでやる奴と言ったらあいつぐ
らいだってほとんどの連中が言うだろう」

なるほど、とミリエルは思う。どうやら仲間の騎士たちの間でも
有名な鼻つまみ者らしい。無理もない。あんなのが仲間だったらこ
の世は闇だ。

「じゃ、耳貸してね」

そう言ってミリエルは作戦をこっそり囁いた。

サン・シモン最大の祭典。無差別大武道大会は、華やかに開催さ
れた。

棒術や徒手空拳の試合そしてようやくその中でも目玉と言われる。
殺傷可能武器使用試合がとり行われた。

騎士団は大概剣か槍だが、特殊部隊員は多彩な凶器を繰り出すの
で、大変見ごたえがあるといわれている。

第一試合、一番手、先ほどの乱入男、対するは愛用の武器を携え
たミリエル。

ミリエルの愛用の武器、それは、赤ん坊の頭ほどもある鉄球二つ
が、長い、ミリエルの背丈よりも長い鎖でつながれている。

本来は、鋭利なとげが一面に植えられているのだが、か弱い乙女
が使用するため、つるりと丸い仕上がりになっている。

鎖が長いのも、か弱い乙女の腕力でも遠心力で十分な殺傷力を得
られるように作られているためだ。

モーニングスター。それがミリエルの愛器の名前だ。

サン・シモンの大祭 4（後書き）

タイトルの暁の星、これた確か田中芳樹の架空ヨーロッパを舞台にした小説の一説。暁の星という優雅な名を持つ無骨な武器から来ています。

それがモーニングスターだと言うことに気付いたのは数年後。遅い。

サン・シモンの大祭 5（前書き）

いつになったら本題に入るのかじれていらっしやいますか。もう一つ、ミリエルが小隊長に任命される話が終われば本題です。もうしばらくお待ちください。

サン・シモンの大祭 5

闘技場に、背の高い騎士と、小柄な少女が相對する。

拡声器を握った解説員が力強く叫んだ。

『王室直属第一騎士団所属・ジェフリー・モーガン！！ 対するは
サフラン商会特殊部隊、期待の新人水の天使！！』

場内からどよめきが走り、物騒な歓声が上がる。

『殺せ！！殺せ！！』

水の天使と言う紹介は、ミリエルが平民だからだ。平民対貴族階級ともなると。いろいろと軋轢が生じかねない。そのため本名を名乗らないのが習慣となっていて、そして特殊部隊や、機動隊員となつたものは、隊名と呼ばれるコードネームを与えられる。ミリエルは水の天使。神殿で水の天使の肖像といえは首なしの竜の胴体を踏みにじり、竜の生首を持ち上げたポーズで描かれるのがほとんどだ。かつて川の怪物を天から舞い降りた天子が怪物を八つ裂きにして民衆を救つたと言われる伝説から来ている。

「隊長殿、このカードは隊長殿が独断で決めたと言うのは本当ですか」

彼は自分を非難する目で見ながらそう言った。

「また奴の横槍ですか。確実に第一回戦を勝てる相手をよこせと、だからといってあんな少女を」

騎士団員は基本的に、貴族出身だが、第一騎士団は、特に親が要職についているのだ、領地が豊かなのだ、珍しい産物があるのだ、娘が王族に嫁いだのだ、いろいろと潤っている連中が多い。と言うよりそういう連中だけで構成されていると言ってもいい。

その中でもジェフリー・モーガンは特に思い上がっているとみなされている。

騎士団の仲でも彼に不愉快な思いをさせられたものは多い。

だから彼が小柄な少女と戦うことになったのも、そのさいの汚い

手の一環と誰もが思った。

彼はその勘違いを正してやる。

「頼まれて仕組んだのは本当だ、ただし、あのお嬢ちゃんにな」

そう言つて女子控え室で鼻つまみ騎士が行つた痴漢騒動の顛末を話してやる。

「俺は思わず土下座した」

「そうでしょうね」

空気が思わず鎮痛になる。

「あのお嬢ちゃんは手ずから奴を血祭りに上げてやりたいんだと」
若い騎士は思わず息を呑んだ。

「何を考えているんですあの少女は、勝てるわけないでしょう」

「そつちこそ聞いてなかったのか、あのお嬢ちゃんは特殊部隊だ。
騎士団の誰もが突破したことのない最終関門通過者だ」

特殊部隊入隊試験はサン・シモン一苛刻だといわれている。

騎士団の何人かが腕試しに受けたが、合格者は皆無。その苛刻な試験をあつての若さで通過したのだ。

「あのお嬢ちゃんはな、大猪を一撃でしとめたこともあるんだ」

「冗談でしょう」

「間違いない、ご馳走してもらつたからな」

「何してんですかあんたは」

その時試合開始の合図がなされた。

自分に向かつてくる相手に無造作にミリエルは鉄球を投げた。

それは正確に相手の爪先に落ちた。

「\$\$\$%& a m p ; # -」

どうやって発声するのか不可解な悲鳴を上げてその場に転がる。

「あれは痛いな」

「痛いですね」

そして少女の軽やかな笑い声が響いた。

「何、これ、弱すぎ」

ごろごろと闘技場を転げる相手を思いつきり嘲る。

「手加減してあげたのよ。弱そうだったから、なのに一瞬で決まるのね」

少女は親指を立てて拳を作りそれを下に向けた。

「雑魚があたしの視界を汚すんじゃないねえ」

最後にどすの聞いた叫びに、観客は沸いた。

『水の天子、強い。一瞬です、一瞬ですべてが決まりました』

「情け容赦ないな」

「あいつ、向こう一年は、ちっちゃな女の子に瞬殺されたって後ろ指差されて笑われますね」

いっそ死んだほうがましな生き恥だと彼らは思った。

サン・シモンの大祭 5（後書き）

サン・シモンの大祭偏は次で終わりです。でも、これ伏線になっています。

サン・シモンの大祭 6

そして、ミリエルは、初出場にして、準決勝の手前まで勝ち進んだ。

女性の、そして最年少記録を二重に更新した。

そして、最後の試合で鎖骨を折りながら団体戦に出場。こちらは見事に優勝した。

十人对十人。特殊部隊組みは男女混合で、半分は女性だったが、この試合を見る限り、女は確実に残酷だと言ったことが理解できた。その女性達こそミリエルとともに痴漢被害にあった女性達だった。だから対戦相手は、ジェフリー・モーガンを呪う立派な資格があった。

最年少の彼女が団体の司令塔を務めていた。

この日、特殊部隊の水の天使は、知らぬものはないほどの有名人になった。

「まあ、ちっちゃな女の子っただけで、いろいろ目立つが」

かわいらしい少女が、大の男を手玉に取る、ある意味では痛快な見世物だった。

「それで、残念ながら拾える人材はいないと言うことになるね」

目の前の將軍は、テーブルにひじを着き、溜息をつく。

大祭の無事終了を祝う祝賀会。彼もワイングラスを手にしていた。「まことに残念だよ。ステイブ・ウォルバーグ。唯一光っていたのはあの少女のみとは」

サフラン商工会は、完全に軍事と縁を切ったわけではなかった。こうした武術大会で逸材とみなされれば、奨学金つきで、士官学校に入学もよくあることだった。

しかし、サン・シモンの騎士団は男子のみ、いかに有望でも少女は問題外だった。

「あの残念な逸材、もし男子ならば私は喜んで養子縁組を申し込ん

だんだが」

向こうで断るだろう。そう思ったが彼は黙って頷いた。さすがにこの場にミリエルはいない。お子様な彼女は親に連れられて、家に戻った。

「残念な逸材か、確かに」

そう背後で呟く誰かがいた。振り返ったとき、すでに複数の貴族達に混じってそれが誰か特定できなかった。

ミリエルは、自宅のベッドで鎖骨骨折の療養中だった。

最後に戦った相手は、思った以上にすばしかった。大振りしたその隙を突いて、懐に入り込まれた。もみ合いになればミリエルが不利、しかしそれでも倒れるとき、相手の足を払い道連れにしてやった。その上、相手が倒れる下敷きになった際、肘を突き出して鳩尾をえぐってやった。

相手の重量で鎖骨を折ったが、ミリエル的には相打ちのつもりだった。

女子控え室に戻ると、まだ扉の前に誰かが立っていた。まさかまたと思ったが、健闘を称えてと言って箆を渡された。

箆には焼き菓子が入っている。

つまみ食いをした友達も、普通に食べていた。

正真正銘の贈り物らしい。

そのお菓子は今枕元にある。

「まあ、いい日だったかな」

ミリエルは目だけで微笑んだ。

サン・シモンの大祭 6（後書き）

ここからまた数年後に飛びます。

首都グランデの作戦（前書き）

新章突入です。ミリエルも少し成長しました。
あまり出なかったおじいちゃんとお母さんも出てきます。

首都グランデの作戦

枯葉散る秋、ミリエルは豎琴の前で、物思いに沈んでいた。それは最近、この界隈が物騒になったと皆が嘆いていること。

サン・シモンの首都、グランデ、ここは有数の商業都市だ。西大陸すべてに商業ルートが張り巡らされ、旅人も多い。

そのため、本部のあるグランデの治安は最も安全であるべきとサフラン商工会はそのための努力を惜しなかった。

不審者はサフラン商工会が全力で撃破。不埒者は殲滅。その強硬姿勢はけしてゆるがせないと誰もが思い続けていた。

しかし、最近富裕層を狙った強盗団が出没しているのだ。狙われるのは大きな商売をしている大店の家。それも大きな取引を成功させたその後に関わって襲われている。

サフラン商工会としてもこんな不始末は許されないと、全商店街が、殺気だっている。

ミリエルの家は、細々とした雑貨屋なので、そんなことは人事と言えは人事なのだが、そうも言ってられない事情がある。

何故なら、ミリエルの祖父は、特殊部隊総司令官だからだ。それどころか、母のアマンダは、機動隊分隊長だ。つまり、サフラン商工会の治安を任されていると言ってもいい。ミリエルのように平の特殊部隊員とはわけが違うのだ。

特殊部隊の一員となつてから一年が過ぎ、祖父と母の重責をひしひしと感ずるようになっていた。

「ミリエル、もうすぐ鎮魂祭ですよ、何をよそ見しているんです」女神官様が怖い顔をしてミリエルを睨む。

慌ててミリエルは楽譜を広げた。

そう、もうすぐ鎮魂慰霊祭だ。かつて戦乱の時代、犠牲となったものたちの鎮魂のため音楽を捧げる。その昔は、建国の時代の犠牲者だったらしいが、新しいものに切り替わったらしい。

様々な階級のサン・シモンのうら若き独身男女が、それぞれに楽曲を演奏し、合唱する。

そのための練習の時間に、よそごとを考えるのは非礼と女神官の叱責がとんだのだ。

ミリエルは、豎琴の前に坐ると、最初の一音をかき鳴らした。

元々ミリエルの弾けるのはリユートだった。しかし、リユートは弾ける少女が多いので、やむなく豎琴に変更させられた。

初歩の初歩から練習させられているので、ミリエルは居残りも珍しくなかった。

もちろん練習は嫌いではないのだが、座りっ放しで弦をはじくだけというのは体力が有り余っているミリエルには少々辛い。そのためついほかの事を考えてしまうのだ。

作曲家の先生も、かなり厳しいので、気の弱い子など萎縮して泣き出してしまうことも多い。

何故ならば、楽曲のでき次第で、その作曲家の実力が問われるからだ。勢い指導も厳しくなる。

ミリエルの習っている先生はその辺のぎらぎらしたところが少ないのでまだいいが、ミリエルにとって耐え難い悪癖があった。

彼は幽霊が見えると主張する人だったのだ。

休憩時間の合間に、自分が体験した様々な怪奇現象の話を嬉々として語るので、その手の話が大っ嫌いなミリエルにとって、もはや練習時間は拷問としか言いようがない。

それがますます他の考え事に走る要因となっている。

その上、今回彼が提供したオリジナル曲というのが、かつて彼が目撃した幽霊譚を下敷きにしたものだとか聴かされて、ますますやる気が萎える。

それでも責任感だけで、ミリエルは練習に励んでいた。

それでも手元がおろそかになり、叱られそうになったときとつさに窓の外に誰かいると叫んでしまった。

自分でもしまったと思ったが、一度口にしたことは変えられない。
女神官が窓を見ると。本当に若い男が窓の向こうにいた。
くるくるした巻き毛のやや細身の男だった。
言ったミリエルが驚いた。何故ならここは二階の部屋だ。
変態が出たと大騒ぎになった。

首都グランデの作戦 2

家に戻ると。祖父と母が難しい顔をして、考え込んでいる。

「おじいちゃん、いつそのことデマを飛ばすのはどう」

ミリエルは思いついたことを言ってみた。

「あのね、必ず大きな商売をした後に、襲われているでしょう。だから、でっ上げの大きな商売を作って、おびき出すの」

ミリエルの提案に、祖父のダニーロと母のアマンダは顔を見合わせた。

「確かに、この商工会内に何らかの情報網を持っていることは間違いないだろう。しかし、偽情報だと、そっちに流れたらどうするんだ」

「だから、その教われる人と、その関係者、偽情報だと知っている人は絞り込むの、その上で、適度なデマを流す。その辺は軍人達にはできない、あたし達サフラン商工会の構成員にしかね」

実際軍が動いてはいるがその働きははかばかしくない。

なまじ大概の犯罪はサフラン商工会の中で解決され、軍人達はずでに取り押さえられた犯人を引き取りに来るしかないという現場不足もそれを助長しているらしい。

最近では街で軍人を見かけると、税金泥棒と冷たい視線を向ける人間も少なくないという。

「そうだな、しかしだ、そう考えればだ、誰かが情報を流していると言うことになる」

「おじいちゃん、そんなの今更でしょう。大体サフラン商工会に不届き者が一人もいないなんて能天気なこと考えてる人なんていないわ。だから定期的に販売物の品質チェックや、仕入先の原価チェックなんかがあるでしょう。誰かが不法なばる儲けをしないために」

ミリエルの言葉に、ダニーロも頷く。

「お前の言うとおりで。誰も彼も聖人なんて組織はこの世に存在し

ない」

「そりやそうだけど、それなら誰が怪しいか、最低限の絞込みが必要なんじゃないの」

アマンダもそう言っつてミリエルを見る。

「その辺には、母さんのおばさん情報網を利用すべきね、不自然な金の使い方をしている人間を探すにはそれが一番だもん。大体買い物客の相手をするのはおばちゃんだし。明らかに人間と物の釣り合っっていない連中を探り出すのにつけてもんじゃない」

アマンダは口元に手を当てて考え込む。

「だけど、そのおばちゃん情報網に、その裏切り者がいないとも限らない」

「それならすぐわかるでしょう。おばちゃんがちよつと浮いた連中を見逃すわけがない」

アマンダとダニーロはしばらく考え込んでいたがダニーロが壁にかけてあった上着を取りに行った。

「ちよつとアルマンのところに言ってくる。留守番を頼むぞ二人とも」

アルマンは商工会長黒獅子の本名だった。

幼少期から親しい親友同士。ダニーロがミリエルの提案を検討してみる気になつたらしい。

「行つてらっしゃいおじいちゃん」

ミリエルは微笑んで見送った。

「そつえば練習はどうなっているの」

秋のお祭りの話になつてミリエルはきまづい思いをする。
慣れない豎琴の練習は少々行き詰まりぎみだ。

「練習あつちで居残りになるかも」

どんよりとミリエルが答えた。

「豎琴じゃねえ」

豎琴のような大型の楽器はミリエルの家に置くスペースがない。

リユートならば家でいくらでも練習できるのだが、あいにくミリエルより年かさの少女達がパートを確保してしまった。

「合唱はまだいいんだけどね」

オリジナル曲が、子供の頃に出合った幽霊の話でなければ。

ミリエルは幽霊が大嫌いだ。何故なら殴れないから。殴って追いつけないものはみんな嫌いだった。

首都グランデの作戦 3 (前書き)

改稿いたしました。今まで読んでくれた方ごめんなさい

首都グランデの作戦 3

ダニーロが入っていったのはサすすけた、何の変哲もない建物の中だ。

商業区域である、第六地区と宗教関係者の住まう第七地区の間に建っている。

地区ごとに神殿はあるが、主だった神官等宗教関係者は、ほぼ第七地区から第八地区に住んでいる。第九地区は役人の住む場所だ。そこを通り越すと、今度は貴族関係御用達の商人の住む十区以上になるのだ。

つまり宗教施設は街の中心に集中していることになる。

元々は、この街の商人達の寄り合い場所であったが、サフラン商工会成立。その後、元軍人という機動力を生かしてサフラン商工会が次第に版図を広げていくにつれ、元祖グランデ商工会はそのまま飲み込まれた。

今では元々商人や工芸関係の仕事をしていたものと、元軍人のサフラン商工会のメンバーが渾然一体となってサフラン商工会を運営していた。

かつては黒獅子十将も今では將軍ではなく、例えばダニーロの主な仕事は本来は内部監査だった。

会計や、新規商品の開発など、サフラン商工会の発展に役立つ仕事をしているほうが多い。

当たり前だがサフラン商工会はほとんど商業組織なのだから。

この建物の中で巨万の富といってもいい金額の商取引が頻繁に行われるなどと、建物を見ただけでは誰も想像できないだろう。

サフラン商工会本部では、当代黒獅子アルマンが、薄汚れた机に向かって資料を読んでいた。

入った入り口から一番奥に、正面を見据えるようにアルマンの机

がある。

縮れた黒髪は前髪が後退し、血色のよいぱつぱつの肌に目じりの小じわが目立つ。

体格は、丸い。縦横すべてが大きく壁のように見える。

顔も体型もすべてが丸いアルマンだが、灰色の目はどこか冷たい色をして、性格まで丸くないと主張していた。

「どうした。ダニーロ」

本来来る日ではないのに、本部に顔を出したダニーロに、怪訝そうな顔をする。

「家の孫が言い出したことなんだがね」

そう言ってダニーロはミリエルの提案を並べて見せた。

「確かに、それしかないかもしれんが」

資料片手に、アルマンはダニーロを見やる。

「もうすぐ鎮魂慰霊祭だ。事を起こす場合、その前と後、どちらがいいかね」

「難しい問題だな」

ダニーロは暦の印を見ながら呟く。

「事を起こすならいつそ当日という可能性もあるからな」

グランデの街のほとんどが協会に集まる当日なら、その家の警備も手薄なはずだ。盗賊が狙うにはうってつけの日だ。

「それにだ、偽の情報を流す前に、本物のほうも確認すべきだろうな。例えばだ、今狙われやすい立場にいるのは誰だ？」

二人は地図と、契約関係の写しの目録を片手に討論を始めた。

「いつそ、狙われる確立のある奴を圏にするのはどうだ」

「そのほうがでっち上げることが少なくてすむな、九割九分九厘真実で、最後の一厘が嘘。そんなもんが一番見破られにくいもんだ」

二人はそのまま作戦を煮詰め始めた。

「それはそれとしてだ。今日おかしいことがあったそうじゃないか」
不意に話を変えられダニーロは戸惑った顔を見せた。

「第三地区の練習場に覗きが出たとか」

それに関してはさして気にも留めてなかった。

「おかしいと思わないか？　これが踊りの練習なら、俺もそう驚かなかった。しかしだ、楽器の演奏や歌を歌うお嬢ちゃん達を覗くために壁をよじ登って、二階の窓から顔を出したってちよつとありえないと思わないか」

「若い娘の集団という情報だけがあつて色っぽいことはないと知らなかったとか」

「この国にいて鎮魂慰霊祭を知らない？」

ありそうもなかった。

「あの中にミリエルもいたよな」

その言葉に含まれているものに、ダニールは眉をしかめる。

「関係ない」

「本当にそう思うか？」

アルマンは重ねて聞いた。

首都グランデの作戦 4（前書き）

話が進みません。ごめんなさい。

首都グランデの作戦 4

翌日も憂鬱な顔でミリエルは練習に行く。

昨日やつと初心者向けのやさしい練習曲を弾けるようになったばかりだ。これで本番までに引けるようになるんだろうか。激しく不安だった。

「こんなときはやっぱりお友達と遊びたいな」

ミリエルはしょんぼりと道を歩く。

こんなときに限って窃盗もひったくりも出くわさない。せめて痴漢でもいい。誰か現れてほしい。

そして、私のお友達の銀色に輝くその姿をを鮮血で染め抜いてくれれば。

そんな切なる願いも虚しく街は平和だった。

無表情にどす黒いオーラを撒き散らしながら、ミリエルは練習に場向かう。

目の前に、心からお友達を叩きつけたくなる存在がいた。

ミリエルのけして友達ではなくこれから友達になる予定のない男が。

雀斑だらけの顔にやぶにらみの目。

薄い金髪を刈り上げて尖らせている。

ミリエルの所属は第三地区そして相手の所属は第四地区隣あわせの地区で、互いに争い何度血反吐を吐かせたかわからない相手だ。

地区ごとに子供達は定められた頭目のもと団結し、周囲の地区と戦う。

ミリエルは史上最年少で頭目に選ばれた。そしてその史上最年少記録はいまだ破られていない。

ミリエルの指揮する作戦は精緻で巧妙。そして大胆。ミリエルを指揮官として、第三地区は破竹の勢いで勝ち進んだ。

第四地区の頭目であった目の前の男は年下の少女率いる。第三地

区に惨敗したのがどうしても認められなかった。何度も再戦を繰り返し。そのたびにこてんぱんにされ続けた。

そしてとうとう頭目の地位を追われてしまった。

負け続けただけなら、そんなこともなかったが。彼は敗北の責任を、自分の部下に押し付け、処罰という名目で暴力を振るったのだとか。

己の無能を認められない小物とミリエルは軽蔑していた。

そしてそれはミリエルが特殊部隊入隊と、それに伴う第三地区頭目引退で終わったはずなのだが。

今もミリエルの行くところについて歩き不愉快極まりない嫌がらせなどをしてくるのだ。

脳みそはみ出すくらい殴りたいなあ。

スカートの下に仕込んだお友達を撫でてみる。

硬い鎖の感触を確かめる。ミリエルの心が誘惑に負けそうになる。

「何してんのよ、行くよ」

ヴァイオリン担当の同年代の友人がミリエルの腕をつかんだ。

「大丈夫、ミリエル意外に覚えるの早いって言ってたから、期限までに引けるようになるよ」

そう言っただけでミリエルの腕をつかんだまま足早にその場を立ち去る。

目の前の相手が何か言おうとするのも無視して。

「ミリエルまた絡まれそうになったの？ 安心して、ここの皆はミリエルの味方だから」

そう言っただけでミリエルの肩を叩く。

「絶対あいつを近づけさせないから」

しかしミリエルの心は晴れない。やっとストレス解消の糸口を見つけたかもって思ったのに。

お友達を使わないまでも。せめて素手ではこぼにしたかった。

「だめだよ、ミリエル、今手を怪我するようなことをしちゃ。皆で守るからもうニングスターも家においておいてね」

見抜かれた気持ちにミリエルはやさぐれた。

首都グランデの作戦 5（前書き）

体調を崩し更新が送れたことをお詫びします。
言い訳になりませんが少し改稿しました。

首都グランデの作戦 5

今まで豎琴を引いていた女の子はお嫁に行ってしまった。

ミリエルは簡単な童謡を弾きながら、その言葉を反芻する。

リユートを希望するミリエルに、豎琴を薦める音楽家の先生の言葉だ。

大体この街では女の子は十八くらいまでに縁談がまとまる。ミリエルはもうすぐ十五だ。早い子ならばそろそろそういう話を持ち込まれてもおかしくない。

もちろん父親不在の母子家庭は少々問題があるが、後二三年内にミリエルの縁談が決まる可能性が高い。

結婚は夢見るものでなく、将来を見据えて現実的に。

堅実で、婿可能ならとりあえず検討だな。

ミリエルの信念は揺るがない。少女達が絵物語の王子とお姫様の物語に夢中になっていたときも、ミリエルはそれを横目に、商売の心得を叩き込まれた堅実な人と結ばれると断言していた。

その堅実な人がなかなか現れないのが、悩みの種だ。

周りの少女達は、それぞれでんばらばらに楽器をかき鳴らしながら噂話に興じている。

最初は、この楽団を出てお嫁に行った少女達のことだったがしだいに街を騒がす強盗団のことに話は移っていった。

この街では平民の暮らす区画は十二に分けられ、基本的に地区ごとに収入は結構違う。ミリエルのいる第三地区は、さほど裕福な地域ではない。

大きな商売をして収入の多いものは街の奥第十地区から第十二地区に集中している。

更に、街の奥。山を背にした立地には貴族や王族の居住区がある。彼らは見晴らしのよい高台に住んでいるのだ。

そして街の周辺をぐるりと囲むように軍人の居住区がある。

国家成立により街ができた頃からの変わらない住み分けだ。

だから少女達の噂話は完全に他人事だ。

件の強盗段が自分の家に来るはずがないと確信しているため、襲われた被害者に対しても笑い飛ばすのみ。

しかし、ミリエルには笑い事ではなかった。黒獅子に使える十将の一人商工会幹部を祖父に持つミリエルにとつて、サフラン商工会の安全を脅かされたということは生活基盤の一部を脅かされたということになる。

次に襲われるのはどこだろうと少女達は野次馬根性むき出しで話し続ける。

そして、ある名前を耳にしたとき、ミリエルの唇がすりあがった。それは祖父が、教えてくれた、選り抜いた囃の名前だった。

大きな商売をしている家で、なおかつこの時期大きな取引が始まる。その上、親戚な黒獅子十将の一人なのだ。

どうやら計画は順調のようだ。うつすらと微笑む。

もちろん、他にも計画はある。確実に罠に追い込むため、他の狙われそうな家に秘密裏に警備を付ける手はずも完了。

そしてまとまったお宝があるのはその一日だけと言う情報も捏造済みだ。

もちろん他言無用と言われて祖父から説明してもらったことだ。

これから、特殊部隊と機動隊から当日出撃要員が決められる。

ミリエルは特殊部隊枠で申請してあった。

首都グランデの作戦 5（後書き）

次の次くらいに鎮魂慰霊祭が始まります。

首都グランデの作戦 6（前書き）

書き足しを大幅にいたしました。時間がなかったとはいえ不本意なものを上げて申し訳ありません。

首都グランデの作戦 6

家に帰るとすぐに、祖父から本部へ向かうが一緒に来るかと誘われた。

ミリエルに否やがあるはずもなかった。

アマンダは、まだ出番ではないと、留守番をすることになった。

ミリエルにとってそこはなじんだ場所だった。物心付く前からダニーロに抱かれて出入りしてきた、だからミリエルの顔はここに付めている人間はすべて知っていた。

しかし誰もミリエルを見ない。それぞれ互いに話し合ったり書類に向かったり。

この人たちはいつも忙しそうに駆けずり回っている。

それがミリエルの感想だ。

書類を片手にかなり大きな金額を口々に叫びながら、飛び交う人々。その金額はミリエルにとって現実味はない。ミリエルにとってお金とは普段買い物に使う千の桁のみだ。

いつもどおり、アルマンは本部に詰めていた。黒獅子以外の十将は他の商売を持っているため、日替わりか、用事のあるときにしか来ない。

ダニーロが来たのは、計画をつめるためだ。

アルマンの傍らには、機動隊総司令官も来ていた。

恰幅のいい赤毛の初老の男だ。いかにもにこやかな愛想のいい定食屋の亭主といった風貌だが、そのとおりの人物だった。

二人が街の地図をはさんで逃走経路などを想定していると。ミリエルはとつさに、街の警備兵にも情報を流したらと提案して見せた。

「街の警備兵？」

「そう、囿にする人以外には、街の警備兵に行ってもらうの」

ミリエルの提案はこうだった。おそらく強盗団は、この国の正規

軍にも情報網を持っているに違いない。だったら、警備兵に情報を流して、確実に囷に追い込むべきだと。

「一理あるな」

アルマンが手を打つ。

「また、警備兵に恨まれそうだ」

アルマンは苦笑した。ここでは、大概の犯罪者は、サフラン商工会の機動隊の餌食になってしまったため警備兵は手柄を立てる機会がほとんどない。

そのため、首都でありながら、グランデに配備されるのを忌避する兵士達が多い。

そしてこの強盗団捕縛が百年に一度のチャンスになるかもしれない。それに対してス力を引かせる様画策するとは。

さすがダニールは孫娘だとアルマンは感心した。

「まだ特殊部隊が動くとは相手も思っていないだろう。それと、明日はアマンダもつれてきてくれ」

そう言うと、再び、地図に書き込みをいれていく。

「あのね、あたし特殊部隊として出撃を希望しているの」

ミリエルが上目遣いにおねだりをする。

「もちろんだ、決行日のために他の特殊部隊のメンバーと打ち合わせは、明日だ。悪いがダニール、明日は店を閉めてきてくれ」

やれやれとダニールは孫娘を見下ろした。

「それじゃ、青狼、熊、こころで反撃の狼煙をあがるぞ」

青狼ダニール、熊クライスは特殊部隊の敬礼を挙げた。

首都グランデの作戦 7（前書き）

前の話を改稿しました。

それと今回やや長くなっております

首都グランデの作戦 7

鎮魂慰霊祭当日、ミリエルはいささか緊張気味で、練習室で舞台用の服に着替えた。

この日のためにアマンダが用意してくれたのは綺麗なラベンダー色のドレスだ。

絹はとても買えないが、木綿地としてもきめが細かくとても上等だ。

鎮魂慰霊祭のために新しい衣類をあつらえる家はミリエルのところだけではない。

楽団メンバーのほとんどが新しいおろしたての晴れ着を着て誇らしげに笑っている。

秋は布地問屋や仕立て屋の書き入れ時といわれている。周りでは大型の楽器を運び出している大人たちがいる。

これから第七地区の大神殿に向かう。そこで、十二の地区ごとに選ばれた楽団が楽曲や歌唱を奉納する。

地区の若い順番から奉納が始まるので、ミリエルの出番はすぐだ。緊張の面持ちで少女達は街を歩く。

その背後からは別の場所で練習をしていた少年達もいつもよりもぱりつとした礼装姿で付いて歩いていた。

同じように歩いてくる色鮮やかな集団に、ミリエルは目を細めた。神殿の前には馬車が横付けされ、二桁台の地区番号の楽団をおろしていた。

さすがに稼いでいるだけあって向こうの少女達は絹のドレスを来ていた。

周囲の少女達は羨望の溜息をつく。

「ミリエルも器量では負けてないのにね」

そんなことを言う友人にミリエルは苦笑した。

「絹なんて着付けていないものを着たって似合わないと思うから」

家の収入を思えばこんな晴れ着があること事態が贅沢だ。ミリエルはそう言つて先を急ぐ。少年少達はそれぞれ、あてがわれた控え室に通された。舞台の脇の部屋で、小窓から演奏している姿が覗けるようになってる。

第一地区の演奏が始まった。

演奏曲は定番のものは一から十二にそれぞれ振り分けられている。最初は、建国の初一端を歌った曲だといつも決まっている。滅びた土地を捨て去り、新しい土地を目指し放浪の旅に出かける曲。

第三地区はこの国に建国する前においてきた故郷の神を慰める曲。物悲しい寂しい曲だ。

国の歴史の節目を歌った曲をまず歌い。作曲家のオリジナルに入る。

それがいつもの手順だ。

第二地区の演奏がそろそろ終わりそうだ。そう思ったミリエルたちは、自分達の楽器を取り出し始めた。

豎琴の梱包を解いて、車輪つきの台にくくりつけられたそれを開く。背後に気配をかんじ振り向いたとき、いきなりそれは来た。

綺麗なラベンダー色のドレスに茶色い泥汚れ。それが正面に立つ相手が投げた泥の塊だとすぐに気付いた。

周囲の少女達が押し殺した悲鳴を上げる。

目の前には第四地区の大っ嫌いな男。そして眼下には泥に汚されだめになったドレス。

ミリエルは忙しく思考を走らせた。

特殊部隊に入隊祝いに作ってくれた晴れ着はもう小さくなつて着られない。もし着れたとしても演奏開始時間はもうすぐだ。家に戻つて着替えてくる暇はない。

ミリエルは腹をくくつた。

「このまま出るよ」

無表情にそう言つと少女達、第三地区のみならず、他の地区の少女達からも嗚咽のような声がこぼれた。

「せめて豎琴じゃなくてリユートにすればドレスの染みは隠れるんじゃない」

「いや、あの曲はリユートじゃ練習していない。迷惑になるから」
ミリエルは努力して笑みを浮かべた。母がどれだけ覚悟を決めてこのドレスを用意してくれたのかわかっているだけに、笑うのは努力を要したのだ。

仲間の少女達はかすかに涙を浮かべたけれど。ミリエルは泣かなかった。

あんな奴に泣かされたなんて思われなくなかったからだ。

第三地区の演奏開始を知らせる合図が聞こえた。

ミリエルは、泥汚れの付いたドレスのまま演奏をやりきった。合唱のときは汚れたドレスが見えないように、後ろに立つように周りの少女達が誘導した。

とにかく演奏は終わったのだ。
ミリエルのドレスに少々場がざわめいたが、演奏を強行してそれを抑えた。

万雷の拍手で退場すると。第四地区の少年達が、出を待っていた。
「ずいぶん汚いまねするものね」

少女の一人が彼らを詰る。

「誤解すんなよ。あいつ一人でやったことだぜ、大体頭目を追われた段階で、あいつの味方なんて一人もないよ」

そう抗弁する相手にミリエルはその当事者の姿が見えないことに気付いた。

「どこに行ったの」

「ああ、先生に演奏する資格なしって叩き出された、その辺にいるんじゃないか」

そういわれて、ミリエルは神殿の外に出た。案の定相手はふてくされてその場にたたずんでいる。

ミリエルは無言で相手に近づき、顔面の真ん中に拳を叩き込んだ。

「ちょっと、川に投げ込んでくるね」

満面の笑顔でそう言う。ぼこぼこに殴られて気絶した相手の襟首をつかんでずるずると引きずっていく。

こいつを川に投げ込んだら、いよいよメインディッシュだ。特殊部隊初出撃だ。

ミリエルの表情は期待に輝いていた。

首都グランデの作戦 8

ひそかに、荷物にまぎれてミリエルは、邸内に入った。

そこで用意された衣服に着替える。

白い袖が膨らんだブラウス。紺色のボディス付きスカート。白いボンネットはスカートと同じ紺色のリボンでまとめられていた。

そこに白い胸まであるエプロンをつければ、この家の女中さんのできあがりだった。

大きな家では、家ごとに女中の制服がある。どこの女中かすぐにわかるようにだ。

ここの制服はまあ可愛いとミリエルは思った。

「ミリエル、このドレスは酷いな」

着替えたミリエルにいかにもおとなしそうな青年が声をかける。まっすぐな黒髪に、細面のひよる長い体型をした彼は、いかにも印象の薄い。気弱そうな顔をしていた。

「ひどいでしょ、この泥汚れ」

「違う。袖の血の跡だ。泥は水ですすげば落ちるが血痕はしみになるんだぞ」

馬鹿をばこぼこにしたさい飛んだ鼻血が染み付いていたらしい。

「これはこちらで洗っておく」

ひたすら恥じ入るミリエルだった。

「それでは、手はずはわかってるな」

言われて頷く。まず侵入した相手が、獲物の場所に急行するはずだが、そこで待ち構えているのは、目の前の青年を含む特殊部隊の精鋭。

そしてそこから逃れて来た連中を叩くのがミリエルの役目だ。

いかにも特徴のない気弱そうな優男の顔に騙されて血反吐を吐いた者はもうすぐ三桁になるらしいと噂される青年は。初仕事に硬く

なる少女の肩を叩いた。

「大丈夫、できる実力がなければ、抜擢なんかされないから」
穏やかな笑みを浮かべる青年に、ミリエルも微笑返した。

「ウォーレスこそ、気をつけてね、貴方は武器を使わないんだから」
ウォーレスは常に徒手空拳で戦う。たとえ相手が剣を持っていたように槍を持っていたようがお構いなしで。それでいて負けたことはない。

限りなく最強に近い男と呼ばれている。

ミリエルも、親友のモーニングスターや、それ以外の武器を使ってもおそらく彼には勝てないだろうと感じている。

次元が違う気がするのだ。

かつて特殊部隊入隊試験で、熊を素手で倒したという伝説の男。所詮暗器を使って猪どまりの私のかなう相手ではない。そういう問題ではないことをミリエルは気付いていなかった。

この屋敷の金蔵に特殊部隊の精鋭は潜んでいた。

前方にはウォーレスが立っていた。武器を使わないので余計な音が立たないがゆえの配置だった。

かすかな囁き声でウォーレスが呟く。

「ミリエルは少し緊張していたみたいだけど。大丈夫そうだったよ」
その言葉にぴくりと反応したものがいる。

「その名前を言うな」

「ミリエルは、お前のためにああしたんだよマルセル」

かつて妹に猥褻行為を働こうとした相手を血祭りに上げるのを妨害されたことを彼は今も少し根に持っていた。

「確かに、あれが最善であったことは認める。生き地獄に落としてくれたのも感謝している。だがやっぱり俺の手で血祭りに上げたかった。それだけだ」

陰鬱な告白に、周囲の空気も凍る。

「まあ、これからやってくる誰かさん達と、存分に楽しもう」

扉は、わざと軋るように細工がしてあった。その軋る音が聞こえた。

ウォーレスの背後で、仲間達が武器を構えた。

首都グランデの作戦 8（後書き）

後一話で、首都グランデ編は終了予定です。

そしてミリエル特殊部隊編も終了する予定です。

次はミリエルお姫様編です。

首都グランデの作戦 9（前書き）

すいません 長くなったので最後の二话といいましたが二話に分けます。

首都グランデの作戦 9

闇になれた視界の中にひよろりとした人影が映る。たまたま居合わせた使用人かと彼は刃物を抜いた。

刃物をつかんだ手を振りかぶった瞬間、人影が大きく揺らいだ。いつの間にか横にいた若い男に、腕を思いっきりひねられる。

嫌な音がして肩が外れた。

「危ないな、声をかける前に刃物を振りかぶったよ」

肩を抜かれる激痛の中それでも悲鳴を殺す相手に、ウォーレスは頭に踵を叩き込み気絶させた。

「カティン邸へようこそ」

まるで高級食堂のウェイターのようにウォーレスは一礼する。そしてその背後では金蔵の扉が開き、それぞれの得物を片手に屈強な男達が現れる。

「そして、わが特殊部隊の罠にようこそ」

今までは貴族御用達の高級品販売の商人達を相手にしていたが、カティン、庶民相手に薄利多売戦略で、販路を広げる彼に目をつけたのは裏を書いたつもりだった。

彼が商うのは、調味料。基本の塩から、諸外国果てははるか遠い別大陸からも製法を学んだ珍味まで幅広い。

だから、ごくたまにはあるが、超高級品が彼の商いに引つかかることがあるのだ。

希少な珍味という代物が。

外国から製法を学んだ珍味ではなく。極めて希少な動物を使った真正正銘の珍品をさる王族が所望という噂。そして、それは、鎮魂慰霊祭の夜に引き渡された額の礼金があるという噂。それがサフラン商工会が流したブービートラップであることを今ようやく気付いた。

鎮魂慰霊祭ではいろいろと人が少なくなるので、他の貴族御用達店では警備兵が駐在しているのに、ここは少し外れた場所にあるので巡回ルートから外れていたのも。すべて。

押し入って来た人数は十数人。大して相手は四人、本来ならば相手にならないはずだった。

しかし、彼らは特殊部隊の名を知っていた。

一騎当千徒歩大げさでも、その精鋭ならば一騎当十くらいはありうるということを。

逃げようとしたその後頭部に、鎖付きの分銅が襲う。

女性の腕ほどもあるごく太い鎖に、握り拳ほどの分銅が付けられていた。

「心配しなくても、殺しはしないよ」

傘をかけられ、照らしたいものだけを選択的に照らす蜀台に照らされた凡庸な若い男の顔。それが意識を失う寸前に見たものだつた。倒れた仲間を見下ろし、しばし茫然としていた、しかし、最初の男が音もなく忍び寄り、骨の碎ける鈍い音とともに、もう一人倒れる。

蜀台の明かりのもと鈍く光る刃が見えた。

「逃げるぞ」

後ろにいた者達が、泡を食ってその場から離れる。

背後で、肉を撃つ音、そして金属の軋る音が響いた。

そして何か液体のこぼれる音も。

泡を食って走り出した目の前に、この家の女中の姿をした少女が立ちすくんでいた。

首都グランデの作戦 9（後書き）

今度こそ、本当に最後です。サン・シモン編は

首都グランデの作戦 10（前書き）

これで本当に最後です。次回からは新章に入ります。

華奢な身体つき。可憐で清楚な美貌。少々若すぎる感もないではないが、大変な美少女に見えた。

ボンネットのはしからこぼれる淡い金髪。薄闇の中に引き立つ白い肌。

その場で心は決まった。この少女を人質にしてこの場を脱出。そして唯一の戦利品であるこの少女を売り飛ばす。

これだけの器量良しなら十分元は取れる。

そこまで考えたところで少女が動いた。眉間に硬いものが当たる。指先だけの力で放たれた鉄礫と気付いたときには少女はすばやく後ろに下がる。

そして、再び鎖の音が聞こえた。

それは先ほどの男が持っていたのとはまた違う武器だった。

鎖は細いが、先端に付いた鉄球は一回り以上大きい。

横殴りに、鉄球になぎ倒されて、初めて、少女が敵だと理解した。子供の頭ほどある鉄球に叩きつけられたのだ。腕の骨が折れていた。

「手足の骨ですんでいるうちに降参してくれる？」

少女が微笑む。残酷に。

「それとも頭蓋骨を割られる？」

その笑顔はなまじ美しいからこそ一層怖ろしい。

それでも、相手が小柄な少女だと、向かって行った仲間が今度はまともに胸を打たれる。血反吐を吐いて倒れた。

再び向かって行った相手もなすすべもなく倒されるのを見て再び逃走を図る。

ミリエルはそれを黙って見送っていた。最後の一人が窓の向こうに消えるのを確認して別の小石大のものを壁に叩きつけた。
パンパンパン

乾いた破裂音が響く。火薬を丸くまとめて火打石の粉をまぶしたものだ。

ミリエルが倒した数人は、しばらく動けそうにない。

合図の音を聞きつけたウォーレスとマルセルが駆けつけて来た。

「そちらは制圧したの」

「もちろん」

二人とも服に点々と細かい血痕が飛んでいる。マルセルは、両手に鉤爪の付いた手甲を嵌めていた。

それから点々と血の雫が垂れている。

「三人逃亡を図ったわ」

ミリエルの言葉に、二人はくすくすと笑う。

「洗濯が大変ね」

血痕を指差して言う二人はまた笑う。

「大丈夫、慣れてるから」

命からがら飛び出した三人はいつの間にか野次馬があたりをたむろし始めたのを見て狼狽した。

「どうする」

「こうなったら奴らの中に紛れよう」

そう言っただけで、徐々に集まりつつある野次馬の中に入ろうとした。

しかし、不意に取り囲まれて、その全員から殴打を受けた。

地面に倒れながら仲間のほうを見ればその仲間も同様の目にあっている。

野次馬達は手際よく縄を掛け彼らを拘束していく。

「隊長殿、拘束完了いたしました」

職人風の、前掛け姿の青年がやってきた女に、代わった敬礼をして見せた。

野次馬達は無秩序なようでそれでも一本と追った秩序を感じさせる動きで、拘束した男達をひとまとめにする。

「特殊部隊を振り切った割に他愛がなかったわね」

女が呟く。

「全部しとめたらこちらに悪いと残しておいてくれたんじゃないですか」

傍らに立つ若い男が言った。

「まあ、我々機動隊としても無駄足にならなくてよかったわ」

アマンダはそう言って傍らの男に命じる。

「ちょっとひとつ走りして警備兵を呼んできて」

カティン邸で血祭りに上げた男達、ならびに、特殊部隊の手を振り切って結局機動隊に拘束された男達は、そのまま警備兵に引き渡された。

後日報獎金が出たが、情報処理から動員された機動隊ならびに特殊部隊全員で分けた結果、一人当たり小銭しか入らないことがわかった。

それから一月後、ミリエルは、特殊部隊第一隊小隊長に任命された。

特殊部隊入隊から新記録のスピード出世だった。

首都グランデの作戦 10（後書き）

これでサン・シモン編は終了です。

鎮魂慰霊祭は、庶民がやるお祭りというか儀式です。

貴族は王宮で神官の指揮のもと別の儀式をしているという設定です。

地区番号が若い順に待ちの外側に位置しているのは、元々軍人だったけど今は商人な人が住んでいるからです。

戦乱の時代は、軍人で周りを覆う壁が今より厚かったということです。

旅路（前書き）

ここからようやく本編になります。
特殊部隊不名誉除隊。ならびに強制帰国の章です。

旅路

鉄格子の向こうに青い空が見える。

ミリエルは窓の外を覗き込んだ。景色がゆっくりと流れていく。今は森と森を繋ぐ平原を馬車は進んでいるようだ。

車輪が石でも踏んだのか時折大きく揺れる。

硬い木の床にお情けで置かれた灰色の薄汚れた毛布。それを敷いてミリエルは坐っていた。

両足に鎖の付いた足枷がはまっている。

歩くには支障がないが、走るのは少々難しい長さだ。

ミリエルの家を出て、この馬車に乗せられて、もう三日が過ぎた。馬車の隅に、木箱があり、その中に陶製の壺が置かれていた。

用足しはここでしょうと言われた。

三日間閉じ込められていれば、どうしても使用せざるを得ない。こもった臭気がミリエルの鼻を突く。蓋があるのが幸いだ。

それに入浴もさせてもらえない。

食事は一日二回、水とパンとチーズと果物が差し入れられる。

こんな生活を三日間続けてミリエルは自分がどういう扱いを受けているのか確信した。

護送車で連行される囚人。

馬車に乗せられる直前に見た。御者が坐る台座に、巨大な金具でくくりつけられた。窓の付いた箱のような乗り場所。

今は気候もいいので、鉄格子の付いた窓を閉じることが出来なくとも寒くはないが、自分の部屋より狭い中に三日間閉じ込められっぱなしという状況が快いはずもなく。

できることは、何故こんなことになったのかそれを考えるだけ。

普段どおりの日常だったはずだ。三日前までは。

その日、早朝に店の前の道を掃き掃除していたミリエルには見知

らぬ男達に取り囲まれた。

そろいの、おそらく制服だろう。身のこなしから軍人ではないだろうかと判断する。

しかし、サン・シモンの軍人ではない。制服が違ふし、髪をやや長めに伸ばしている。

サン・シモンの軍人は極端な短髪なので、制服を着ていなくとも軍人だと判断が付く。

どこの国の軍人だろう。

ミリエルは、大武道会で、他国の賓客の警護をしている軍人を見たことはあったが、具体的にどこの国の人間かを考えたことはなかった。

戸惑うミリエルに、その中の一人が一枚の書類を渡した。

斜め読みしたその内容は、ミリエルをサフラン商会特殊部隊から不名誉除隊に処すと書かれていた。

「すでにサフラン商工会から、手続きは終わっております」
そう慇懃に言われて、ミリエルはしばらく硬直していた。

不名誉除隊。それはサフラン商工会からの永遠の縁切りとみなされている。

特殊部隊や機動隊での活動は愚か、商店主としてサフラン商工会に参加することも許されない。

首都グランデではサフラン商工会に所属していない商人など、存在しないと言ってもいいので、この宣告は首都グランデ追放と同意義だ。武器を突きつけられて、母と祖父も引き出されて来た。

ミリエルはそのまま今いる護送車に、枷を掛けられて詰め込まれた。

家族二人がどうしているのか、それは今のところわからない。

あのまま家にいるのか、それとも他の馬車で連れてこられたのかさえ。

旅路（後書き）

次くらいに本国に入ると思われます。

旅路 2

夜の闇の中ミリエルは毛布に包まって壁にもたれていた。

夜のくるのを数えるだけが時間を計る唯一の手段だった。夜のうちも進んでいるのか、それとも止まって御者も休んでいるのか、ミリエルには定かではない。

ただ坐っている意外でできないのだが、それでも身体は疲労を覚え、うとうとと眠りに付こうとしたとき、唐突に扉が開いた。

闇に慣れつつあった目が蜀台の明かりに焼かれ、思わず顔を覆う。今度はミリエルを取り囲んだのは若い女ばかりだった。

その背後に、年嵩の女が立っている。

「大丈夫ですか」

静々とそんな擬音の立ちそうな足取りで、その年嵩の女はミリエルに近づいて、その声をかけた。

ミリエルは無言で顔だけを上げた。

扉の向こうにいる男達にミリエルの足枷をはずせと命じたが男達はそれを拒否した。

「危険は冒せない。どうあってもその人を送り届けねばならないのですから」

その言葉にミリエルは首をかしげる。

ミリエルは明らかに犯罪者用の馬車に乗せられてきたが、犯罪を犯した記憶はない。

それにこの連中はミリエルを裁くためではなく、どこかに送り届けたいようだ。

とにかく誰かが情報をくれるのを期待してミリエルは耳を澄ませた。

「さすがに、もう逃げてても無駄だと悟っているのではないですか。もうサン・シモンの国境を越えました」

国境を越えた、その言葉にミリエルは狼狽する。最初に現れた男

達が明らかに異国の軍人だったので予想できる結果ではあるが、それでも物心付いて始めて国境を越えたときかされて落ち着いていられるはずもなかった。

「歩けますか」

そう言われて、両脇から女達がミリエルを無理矢理立たせる。

ミリエルの腕をつかんでいる女が不快そうに顔をしかめるのが見えた。

ああ、やっぱり匂うのか。ミリエルは憂鬱になった。

護送車から降ろされたすぐ目の前にグランデでは、十番街くらいにしかなさそうな豪勢なお屋敷が建っていた。

その入り口に、アマンダとダニーロの姿もあった。

「ミリエル」

泣きそうな顔で、アマンダがミリエルを抱きしめる。

「何もあんなもんに閉じ込めなくても」

ミリエルを抱きしめたままアマンダは忌々しそうに護送車を睨む。

「万全を期す必要性がありました」

軍服を着た男が堂々と言い放つ。

「どんな万全だ」

ダニーロの口調も苦い。

「おじいちゃん、ここどこ」

ミリエルが掠れた声で訊ねた。

「リンツァーのおそらくベルディ地方じゃな」

サン・シモンと隣国リンツァー王国の国境近くにある土地の名前をダニーロが呟く。

ミリエルはわけがわからないままその屋敷に入った。

入浴を勧められたが、その浴室と更衣室に女達を入れることをアマンダが拒んだ

「この子は人にそういうことをされるのが慣れてないんだ。最低下着までつけたところで入ってきてくれる」

そう言つて、扉の前に仁王立ちして断固通すつもりはないことを宣言した。

その間にミリエルは衣服を脱ぎ捨て浴室に入った。

その浴槽は、綺麗な模様の入った石で作られていた。貴族や、豪商の家に女中奉公している友達に聞いた贅沢なお風呂という奴だ。

さっきまでの護送車の暮らしと雲泥の差の扱いの変化にミリエルの混乱はいっそう強まった。

石鹸も、豚の油を固めたものではなく。肌にいい香草を練りこんだ。これだけで一財産といつてもいい高級品だ。

そして浴室を出て用意された下着類は、すべて上質なりネンに絹糸で刺繍がされた高級品ばかりだった。

しかし、その下着に、あるものが縫いこまれているのに気が付いた。

ミリエルが入浴している間にアマンドが細工をした、暗器を仕込むための紐が縫い付けられていた。

旅路 2（後書き）

平民は豚の脂の石鹼 貴族はオリーブオイルなどの植物油の石鹼と
使い分けられています。

旅路 3 (前書き)

旅路 3

下着を身につけてしまうとミリエルはアマンドを呼んだ。

しかし、入って来たのはアマンドではなく。さつきアマンドが締め出した女達だった。

薄い茶色のコルセットを身につけさせられ、ミリエルは肋骨の軋む音を聞いた。

三人がかりで、薄紅色の絹でできた襟と肘から下が羽毛のような純白のレースになっているシンプルなドレスに着替えさせられる。

ドレスを着終えると、鏡の前に坐らされて、きちきちに淡い金髪を結い上げられ、頭頂部にまとめた髪に、金と銀に、赤い宝石の付いた髪飾りを挿される。

耳飾りや首飾りも付けさせられ、薄化粧も施された。

鏡に映ったミリエルは、おそらく、近所の人が見てもミリエルだと気付かないのではないかと思うくらい変貌していた。

ぱちぱちと目を瞬かせる。

さつき目の周りに塗られた顔料のせいで少し痒かったが、指先をそこに持っていこうとすれば身の危険を真剣に感じたので、断念した。

か髪の前で茫然としているミリエルを女達は強引に立たせた。

再び誰かが入って来た。

「お初にお目にかかります。ミリエル様」

枯れ木のようにやせこけた女だった。年はアマンドよりおそらく十以上上だ。

釣りあがった目に、つりあがった形の眼鏡を掛け、まっすぐな黒髪をかつちりと結い上げていた。

「私、ミリエル様の教育係を勤めさせていただきますベアトリーチエと申します。これより一週間の旅路、首都ライヒに到着いたしますまで、ミリエル様に淑女教育を受けていただきます。十五と申せ

ば、もうデビュタントも間近、少々詰め込みになりますが、御寛恕なさいますよう」

言われたことの半分もミリエルの頭に入っていなかった。

「何で私淑女教育を受けなきゃならないんでしょう」

とりあえず、何とか拾えた単語だけいつてみる。

「ああ、あらぬ望みを抱かぬようにと、何も教えられていないのですね」

ベアトリーチェはそう言うてにたりと笑う。

「ミリエル様、貴方様のお父上は高貴な身分ながら、異国の下々の女を愛でられました。愛妾とするならば挿して影響もなかったのですが、お父上のお望みは貴賤結婚でした。そのため王位継承権を失われました。その婚姻は三年続きましたが、所詮下々の女。己が身の程知らずを悟り、ミリエル様をお連れして、母国へと戻られました」

言葉の端々でアマンダをコケにしながら、ミリエルが産まれる前後の話をしてくれた。

アマンダは平民ゆえ、王宮や、儀式に参加できずその冷遇に耐えかねてミリエルをつれて実家に帰ったようなことを行っていたがそれはミリエルにとって疑問だ。

むしろ、それに参加しろと強制されたほうが逃亡の理由になる。

あちこちに引つかかる言葉を聞いた気がしたが、どうやら、ミリエルの父親あたりが噛んでいそうだと当たりをつける。

「それで私はどうすれば」

「立派な淑女になっていただきます。それが貴方のような方をお拾いになった、かの方のお望みです」

かの方が父なのだろうか、しかし、父だとすれば拾うという言い方はおかしいのでは。普通は引き取るだろう。

「それでは、お召し替えもすんだようですし、晚餐のお時間でございます。テーブルマナーを覚えてくださいます」

この格好で飯を食えたと。ミリエルは胸のうちに呻いた。肘から

垂れ下がるたつぷりと襷を取った純白のレースを忌々しげに見下ろす。

「誰か嘘だと言ってくれ」

その呟きに応える者は誰もいなかった。

翌日、明らかに昨日の護送車の床面積と同じくらいの巨大な寝台の上で目覚めると。ミリエルは、再び着替えさせられ、馬車に詰め込まれた、

今度の馬車は、内部が布張りで、たつぷりと綿を詰めた椅子が付いており、床は爪先が隠れるほど毛足の長い絨毯が敷き詰められていた。

今日は大きな髪飾りを付けさせられているので、首が少々痛む。

「それではミリエル様、本日は馬車の中でできる授業でございます」横に坐ったベアトリーチェが重々しく宣言した。

「本日の授業は、扇を扱う作法でございます。扇の扱いは、まず基本が十六、更に、応用編が三十ほどございます。間違った扱いをなされますと、仮にも姫と呼ばれる方がと笑いますので、まずは基本の持ち方から」

畳み掛けるようなベアトリーチェの言葉の奔流に、ミリエルは目の前が真っ暗になっていくのを覚えた。

「誰か、私を護送車に返して」

魂の叫びに応えるものはいない。

旅路 3（後書き）

ミリエルは、これからみっちり淑女教育でしごかれて、首都ライヒに付くでしょう。

扇の作法は十八世紀に本当にありました。

扇を広げて顔を隠せばあんた嫌いとか扇をたたんで唇に寄せれば、お誘いとか。売約済みと非売約済みで扇の持ちかたが違うとか。

二つの街（前書き）

サン・シモンとリンツァーの差は、軍事色の差と地形の差です。
グランデは典型的な要塞都市の設定です。

二つの街

それから一週間。それはずいぶんゆつくりした旅のようだった。早朝馬車に乗せられ、それから若干の休憩時間をはさんで夕方にはどこか知らないお屋敷に入り夜を過ごす。

そしてミリエルは、馬車の中と、屋敷に着いた二時間、地獄の詰め込み授業を強制させられる。どこかのお屋敷に入るとき、近隣の農民らしい人々が、どこのお姫様だと噂する。まさかミリエルが雑貨屋の娘などと夢にも思わないだろう。

ミリエルの両足首には今も足枷がはまったままだ。

貴婦人たるもの、大股で歩くなどありえないというのがベアトリ―チエの主張だ。貴婦人らしい歩幅を覚えるまで足枷をつけて生活しろと命じられた。

その足枷がはずされるのは、詰め込み授業が終わった後、入浴と就寝までのわずかな自由時間の間だけだ。

そのわずかな時間を利用して、ミリエルは腕立て伏せに励んでいた。

「ふ、ふふふ。かの方とやら、絶対殴る。誠心誠意、心を込めてぶん殴ってやる」

そのために、腕力が衰えないようにと、ミリエルはほとんど日課となった腕立て伏せに励んでいた。

筋力が衰えないようにやるのはそれだけではない。ミリエルが小さい頃からやっている舞踊の練習も怠らない。コルセットをはずされているので、身体をほぐせるのが少しうれしいということもあったが。

食事も綺麗ではあったが腹は膨れなかった。大皿にほんのちよっぴり、肉や野菜、魚介類が盛られている。そしてその周囲に、綺麗に色とりどりのソースで模様が描かれている。それは食べても食べても腹が減るような気がする。

一週間が一年にも感じられた。

最初の晩以来、アマンダとダニー口の姿は見えない。ミリエルは、ベアトリーチェではなく、アマンダから、しっかりと事の次第を聞いておきたかったのだが。

肋骨の軋むコルセットにも、ぎちぎちに結い上げられた髪にも、砂埃の立つ道を歩くことなどまったく考慮されていない裾を引きずるドレスにも少しは慣れて着たが、それでも身体が楽ということではない。

ベアトリーチェの教育を聞き流していたミリエルはふと気付く。田園と森が連なっているその光景が少しずつ。街の光景に切り替わる。

「どこも、街道沿いに店があるのね」

巨大な石造りの門をくぐると、露天が立ち並んでいるのが見えた。空いた馬車の窓から肉を炙る香ばしい匂いが飛び込んできて思わずミリエルは胃を抑えた。

久しく味わっていない実質的な食べ物匂いだ。

思わず馬車を飛び降りて、買い求めたくなつたが。ベアトリーチェが鬼の形相でそんなミリエルを睨んでいる。

「ええと、ここはなんて街なの？」

とつさにミリエルはその場をごまかそうと訊ねた。

「ここが首都、ライヒにございます」

ミリエルは目を瞬かせた。それならばここが旅の終着点というところか。

「これより、王宮にて、陛下に謁見願います」

ミリエルのこめかみに一筋の汗が伝った。

「ミリエル様がお過ごしになるお部屋も王宮にご用意されておりますので、そちらで他の家庭教師の方々とも引き合わされるでしょう」
言われたことがほとんど耳に入ってこなかった。

「陛下ってどういうことよ」

「ミリエル様、ミリエル様は正式に陛下の養女と成られることが決定いたしております」

「陛下つて、まさかこの国の王様？」

「他に陛下はいらっしゃいません。それと、実のお父様に当たられます、パーシモン王弟殿下も臨席なさるそうですので、貴方の御生母は、パーシモン王弟殿下の邸宅にて預かられるそうですわ」

ミリエルは与えら得た情報を必死に整理した。実のお父さんが王弟で、王様が父の兄ということは伯父さんで、母親のアマンダは別の屋敷に連れて行かれた。

「そういえば、姫君つて戯言をほざいていたっけ」

小さく呟く。そしてそのまま馬車の窓枠に突っ伏した。

二つの街（後書き）

次は王宮に突撃だ。
突撃したら突撃だ。

ミリエルの受難は続きます。

王宮にて（前書き）

なかなか佳境に入りません。ごめんなさい。

王宮にて

馬車が進んでいく。ミリエルが育った。グランデの街では、住み分けは割りときっちりしていた。しかし、ライヒの街は、住宅街と商店街が点在し、雑然とした印象を受ける。

またグランデの街はあまり大きな道がない。中程度の道が、曲がりくねって、初めて来た人間は確実に迷子になるというややこしさがあったが、ライヒでは、広大といってもいい巨大な道を、ミリエルの乗った馬車が延々と進んでいく。

「ずっと、まっすぐですね」

思わずミリエルは言ってしまった。

「この道は、王宮と、直結しております」

その言葉にミリエルは目を剥いた。

グランデの街は、網目のように入り組んでいるので、どこかに直通の道というものが存在しない。

だんだん、石造りの豪邸が増えて来た。

どうやら、王宮の周りに貴族や、豪商といった面々が軒を連ねるのは、グランデと同じらしい。

しかし、いっこうに、道が傾斜してこない。

「上に行くんじゃないの？」

「ライヒは完全に平地にあります。サン・シモンのように起伏の激しい土地ではないのですよ」

そう説明されて、ミリエルは首をかしげた。今まで一度もサン・シモンを出たことがないので実感が湧かないのだ。

不意に、馬車が止まる。ベアトリーチェが馬車を出ると、ミリエルは巨大な門の前に着いたことに気が付いた。

門番らしい男とベアトリーチェが話し合っている。そして、今もこっそり着いているらしい、軍服を着た男達が、立ち並んだ。

「ミリエル様、御入城でございます」

ベアトリーチェの重々しい宣言が響いた。

再びベアトリーチェが馬車に戻り、馬車が進み始めた。

窓の向こうでは、軍人達が一様に敬礼の姿勢をとっている。

門を抜けても、広大な庭園が王宮の前にある。

ミリエルはサン・シモンの王宮を見たことがなかった。しかし、

山岳地帯の中腹に作られた王宮に広大な庭園があるとは今まで一度も聞いたことがなかった。

様々な形に刈り込まれたトピアリーで囲まれた場所を通り過ぎて、ようやく扉が見えてきた。

「こちらで、降りてください、ここは裏門に当たります」

ベアトリーチェの先導でミリエルは馬車を降りる。

三人の軍人が、その場に立っていた。

ミリエルに敬礼すると。ミリエルの後ろに立つ。

ベアトリーチェ、ミリエル。そして軍人たちという順番で扉をくぐる。

そこに待っていた女官たちがミリエルに入浴と着替えをするよう指図した。

いつもより更にキンキラキンに飾り立てられ、ミリエルは、今度は軍人たちに囲まれて、延々白亜の廊下を歩かされた。

謁見はあつけないほど簡単に終わった。ミリエルは、王宮の一部、裏の離宮に住まうこと、後はベアトリーチェのいったとおりのことそれ以外はまったく言われなかった。

そして、早急に、ミリエルはその離宮に向かい、王家の姫としての教育を受けることのみだ。

実の父であるパーシモンは、その有様を何か物言いたげに見ているだけだった。

玉座の間を辞したミリエルは、そつとパーシモンを見る。

薄い、プラチナと間違えうほど淡い金髪はこの父から似たのかと、感慨深く思う。

若くはないが、端正な面持ち。しかし、決定的に影が薄い。

パーシモンは何か言いたそうで、それでいて口を開くきっかけがつかめなくておろおろしていると聞いた風で、ミリエルを見ている。

この人お母さんと結婚したんだよね。

ミリエルの気持ちに大きな疑問が湧いた。しかしパーシモンには聞かなくてはならないことがある。アマンダとダニーロはパーシモンのところにいるとベアトリーチェは言った。

安否を確かめると、面会のセッティングを頼まねばならない。

「お父さん？」

とりあえずそう言ってみた。

パーシモンは覚悟を決めたように、ミリエルに近づいた。

友との再会（前書き）

ミリエルの友達といえば、ここまで読み進んだ人ならわかりますよね。

友との再会

パーシモンは硬い表情で、ミリエルに話しかけた。

「アマンダとお義父さんは無事だ」

この場合お義父さんというのがダニーロのことだろう。

「面会は難しい。以前、彼女と一緒に暮らしていたときも、アマンダは王宮に入ることを許されなかった」

ミリエルは、歩きながら話そうとパーシモンを促した。

「たぶん、手紙や、何か物くらいなら、私が言付かってそちらに持つていけるだろう。私がじかに渡せば検閲も免れると思う」

ミリエルはコクコクと頷いた。

王宮はかなり広い。そして、人も多い。こつそりと抜け出すことは難しいだろう。

そう考えるとこの父が自分の命綱になりそうだ。

「明日、パーシヴァルが君に会いに行くそうだ」

「パーシヴァルって誰」

「ミリエル。アマンダは君に何も教えなかったのか。パーシヴァルは君の兄だよ」

沈痛な面持ちでパーシモンはそう教えてくれた。

ミリエルは、そのまま離宮の自分の部屋とやらに通された。

はつきり言つてそれは部屋じゃなかった。寝室と書斎。応接間が付いた、今までミリエルが住んでいた家がすっぽりと入る空間。

その一つ一つが目が回るほど広い。

「冬は大変だ」

こんな広い部屋を暖めるのにどれほど燃料が必要になるか。それを考えて頭痛を覚えた。

そして今までミリエルが使っていた部屋ほどもあるクローゼット。その部屋にはみっしりという感じでドレスが詰め込まれていた。

他に靴や宝石、帽子などの保管場所もあるらしい。

「あたし、ここにベッド持ち込んで寝ていたいな」

もう乾いた笑いしか出てこない。

この離宮に今はミリエルしか住んでいないそうだ。

そして、ミリエルに仕える侍女たち、大体顔を見ただけで、十人以上いたことは確かだ。そしてこういう場所では、お仕える高貴な方に顔を見せない汚れ仕事専門のお脾役がいるものと、女中奉公している友人に聞いたことがある。

自分ひとりに何人使っていることになるのか。

真剣に頭痛を覚える。

結局。ミリエルはその日食事を取って入浴して寝た。

翌日、午前中のみのも面会だと念を押され、パーシモンとパーシヴアルがやってきた。

二人ともそっくりな親子だとミリエルは思った。パーシモンを少し若返ったらそのままパーシヴアルになる。

パーシヴアルはお母さんから箱をミリエルに渡した。

持ってみるとずっしりと重い。そして、別の箱をミリエルに渡した。

「これは僕からだよ、暇なとき読んでね」

箱から出てきたのは、いかにもなタイトルの、王子様とお姫様の恋物語。少女が好みそうなものと考えて持ってきてくれたのだろうか。

初めて会ったけれど、そんな兄の気遣いに、ミリエルは久しぶりに、気持ちが明るくなった。

そして、二人が帰った後に、アマンダから贈られたという箱を開けると、ミリエルの親友。モーニングスターが入っていた。

そして他にも各種暗器が入っている。そしてアマンダからの手紙には、「できるだけ身近に、決して放すな」とだけ書かれていた。

ミリエルは手紙を胸に抱いて。アマンダの言葉を心身に染みこませようとした。

真相の一部。(前書き)

もつすぐ王子の登場でしょうか。

真相の一部。

ミリエルは、そのまま離宮で教師達の教育を受けることになった。それはいろいろと多岐にわたった。礼法は真つ先に叩き込まれ、次いでダンスや音楽。これは元々ミリエルがリユートや豎琴を弾けたので途中で免除になった。

淑女のたしなみとして刺繍や絵画。

歴史や政治、法律など、王族の娘が諳んじていなければならないことすべて。

そして息抜きになるようにと、パーシヴァルは少女が好みそうなものをもって訪ねてくる。パーシヴァルはそれ以外にアマンダの手紙や手作りのお菓子も持ってきてくれる。

この兄の気遣いには感謝していた。

その日、新しい教科書がミリエルの前におかれた。

「先生、これはサヴォワの歴史書じゃないですか」

本のタイトルを見て、ミリエルはそう問いただす。

本当なら、今日は大陸史のはずだ。

「左様でございます。陛下におかれましてはいずれ嫁ぐ国でありますので、カリキュラムにはさむようにと」

言われた言葉が、脳に染み渡るのに、しばらく時間がかかった。

誰が嫁ぐって？

それから高速回転でサヴォワの情報を脳みそから検索する。

サフラン商工会幹部を祖父に持つミリエルは、近隣諸国の経済状態なら空で思い出すことができるのだ。

確か、サヴォワ王国は、内乱と真ん中。そのためサヴォワ特産品は天井知らずの高騰が続けているはず。

連想はすぐに動いた。

内乱で荒れ狂った国にか弱いお姫様を送り込むわけには行かないと判断したわけだ、それで私、今までほったらかしておいたけど、一応王族だっけという私を選んだと。

手に持ったペンが細かく碎けていく。

「あたし、切れていいよね」

ミリエルは高らかに宣言した。

もちろんミリエルだってわかっている。か弱いお姫様に軍事演習を叩き込むよりもすでに傭兵として訓練を受けたミリエルにお姫様教育をしたほうが効率がいいということくらい。

しかし、感情が納得するかどうかの問題だった。

今まで受けてきた仕打ちが走馬灯のようにミリエルの脳裏をよぎる。

わけもわからず護送車に詰め込まれたあの日、そして、いきなりお姫様だからと、窮屈なお姫様教育に明け暮れている今日までの日々。

「うん、切れて悪いはずないわ」

ミリエルはそのまま椅子から立ち上がると勉強していた書斎から出て行く。

「どこに行かれるのですかミリエル様」

突然立ち上がったミリエルを教師が止めようとする。しかしミリエルはそれをするりとかわした。

「ええ、ちよつと陛下のもとで詳しいお話を聞きに」

ミリエルはにつこりと笑って続く言葉は飲み込んだ。

事の次第によっては頭蓋骨割るかもしれませんがと。

閑話 パーシヴァルの追憶（前書き）

番外編になりました。ついでに王子様登場。

閑話 パーシヴアルの追憶

パーシヴアルは王宮の庭園を散策していた。

離宮の方向を見る。そこで妹は今頃勉学に励んでいるだろうか。

ミリエルのことは、つい最近まで話にしか聞いたことがなかった。母とミリエルが出て行ったとき、パーシヴアル本人もまだ幼児だった。

つい最近までは、首都にある。帰属して専門の学院に寮生として入っていた。パーシヴアルは身分では高いほうだが、いかんせん影が薄い性格をしていた。L

端正な容姿もそれを返って助長していた。最初に、ミリエルの顔を見たのはもう二年も前、今まで口が重かった父が、ようやくアマンダの居所を教えてくれたのだ。

初めて外国に出たパーシヴアルにとって、サン・シモンのグランデはずいぶん異様に思えた。

それでも道行く人たちは親切で、第三地区までは割合スムーズに行くことができた。

それらしい雑貨屋を探しているとき、見覚えのある髪色が目に飛び込んできた。

少女が、なにやら鞆を持ってあたふたと駆け出していく。

翻る長い髪。そして、物凄い俊足だったので、追いかけることは不可能だった。

あつという間に遠ざかっていく。その小さな身体を呆然と見送っていた。

そして背後を振り返ると雑貨屋らしい店があり、その前で、濃い金色の髪で緑の目をした女性が立っていた。

女性はパーシヴアルを驚いたような目で見ている。

「母上」

そう呼んだ瞬間嫌そうな顔をした。

「止めとくれそんな仰々しい呼び方は、まあいい、来たんならお茶ぐらい淹れてあげるよ」

そう言って雑貨屋の中に入り、パーシヴァルを手招いた。

嫌な顔をされたので、歓迎されていないのかと勘違いしたが、お茶と手作りのお菓子でもてなしてくれた。

「さっきのが、ミリエルですか？」

「ああ、女の子だけの集まりがあるんだ。遅刻しそうだって慌てて走っていったんだね」

その集まりが舞踊の練習だと聞いてほえましさに頬が緩む

「よくあいつがあんたを国外に出したね」

アマンドはいかにも下町の女という風にぎつくばらんに核心を突く「ずっと申し込んでいたんですが、やっとお許しが出ました」

「時々パーシモンから手紙が来るよ、そちらも大変そうだね」

ダニールが果物の鉢を持ってやってくる。

席を立ったついでに何か用事をする。そんな習慣はパーシヴァルの周りにはなかった。

「ミリエルにはお前のことは話してないよ」

ダニールはそう言って目を伏せた。

「今は知らないほうがあの子も安全だ」

パーシヴァルはダニールの言葉に頷いた。ダニールとも手紙のやり取りをしている。ダニールが愚かな人間ではないことはパーシヴァルも理解していた。

「あの手紙のことですが」

パーシヴァルはダニールにだけ聞こえるように言う。そろそろこの家の周囲に探りが入っている。もうすぐ祖母が死ぬのだ。

リンツァー国王と、王弟パーシモンは異母兄弟だ。パーシモンの母は後妻だ。元々サン・シモン王室の縁者の娘だった。

かなり自己顕示欲が強く。息子も自分の野心を満足させる道具。そんな母親にスポイルされたのがパーシモンだ。

そのパーシモンの唯一の反抗が、平民のアマンドとの結婚だった。

そのため王位継承権を失ったが、それこそパーシモンの望みだった。あの母親から逃れるために。

王位継承権を失えば、自分はその母親から見捨ててもらえると。しかし彼女の復讐心はアマンダへの攻撃という形で現れた。

長男のパーシヴァルはともかく幼いミリエルを守るためには逃げるしかなかった。

その祖母が死ぬ。そして国王はミリエルに興味を示し始めたらしい。

「僕に食い止められればいいのですが」

どのような企みが進行しているのか、それを探り出すためにパーシヴァルは動くことにした。

冷たい風に頬をなぶられてパーシヴァルは過去の追憶から舞い戻った。

「何を考えていたんだ」

目の前にいたのは、彼の友人。今内乱真っ盛りのサヴォワから亡命してきた第一王子。

「レオナルドか、ちよつと昔のことを思い出してただけだよ」

この友人は悪い男ではない。だから妹の婿にと言われたときは悪い縁ではないと思った。

サヴォワが内乱中でなければ。

サヴォワの前王妃が、リンツァーの何でも父の従妹に当たる女性だったそうだ。

だから彼はまた従兄弟に当たる。

自分と違って精悍ないかにもりりしい顔を見て。パーシヴァルは溜息をついた。

「ええと、聞いているか？」

「ああ、次代の王妃に君の妹姫を娶れという話だろう。大丈夫だ、ほかならぬ君の妹だ」

すでに婚約が終わった気である。元々援助と引き換えに、政略結婚は織り込み済みの話だったので当然といえば当然なのだ。

「まあ、君は本当に妹のいい婿になりそうなんだが」
その前にひと悶着きつとある。パーシヴァルは確信していた。

真相究明（前書き）

初っ端からミリエルが使ったのはメリケンサックだと思ってくだ
さい。

真相究明

少女は楚々と王宮の廊下を歩いていった。最近王の養女になったミリエル姫の名を知らないものは今はいなかった。

銀髪にも見える淡い金髪。ぬけるような白い肌。丸い緑の瞳。可憐な美少女だと誰もが言う。

無論少女の出自に関して、侮蔑の目を向けるものも少なからずいるが。

平民の母親を持つ姫君と。しかし、実父が王弟である以上その血筋を面と向かってどうこういえる人間もいなかった。

「陛下は、謁見の間にいらして」

鈴を転がすような美声で少女が訪ねる。

しかし、侍従は少女を通すことを拒んだ。

「陛下は謁見の間にいらっしゃいます、しかし姫君、貴女とお会いする予定はない。陛下のご指示があるまで離宮にてお過ごしください」

少女はにつこりと笑った。

「痛い目見たくなけりや通しなさい」

言われたことが一瞬理解できなかった。

「貴方が私を通さないというなら、叩きのめして通らせてもらうわ」そしてその前を通ろうとする少女の腕をつかんだとき、鳩尾に拳がめり込んでいた。

馬鹿な、少女に殴られたぐらいで。

血の気が引いた状態で、彼はひざを付く。

ミリエルの右手には、掌びつたりにまかれた鋼鉄の輪が嵌っていた。

拳のちょうど正面にびつしりと鉄の出っ張りが植え込まれている。こんなものをつけた拳で殴られればひとたまりもない。

母の心遣いで、侍従を退けたミリエルはそのままずんずん進んでいく。

茫然と目の前の暴拳を見送っていた兵士がミリエルを抑えようとする。

次の瞬間肩の関節をはずされた。

祖父の教えだ。人体いたるところに関節あり、逆関節を決めればミリエルのような少女でも大の男を倒すことが可能だと。

相次いで二人の男を倒した少女に、たまたま居合わせた女官達が悲鳴を上げて逃げていく。

そのけたたましい悲鳴に、駐在兵士達も駆けつけてきた。

「血路を開く、か」

少女は不敵に笑う。

スカートをめくり上げて、下に仕込んでいたモーニングスターを取り出すと。行く手を遮る者達に静かに歩んでいた。

兵士達に戸惑いの色が浮かぶ。この少女はつい最近王の養女になったばかりだが、元々王族の血筋だ。

怪我をさせずに取り押さえねば。

しかし、相手はそんな躊躇を容赦なく踏み潰した。

手の届く場所に来る前に、鉄球が飛んでくる。鉄球の射程範囲がなかなか踏み込めない。

その頃、レオナルド王子と庭園で静かに語らっていたパーシヴァルのもとに、女官が泣きながら駆けつけてきた。

その様子にさっきまでの予感が当たったと確信する。

「すまないがちょっと行って来るよ」

パーシヴァルの言葉にレオナルドは俺も行こうかと尋ねたがパーシヴァルは、無言で首を横に振る。

「君は今、関わるべきじゃない」

そのままおそらく謁見の間だと見当をつけて、歩き出す。

途中で父親のパーシモンが駆けつけてきた。

「やっぱり、殴り込みをかけましたか」

問いかけの形の確認に、パーシモンは眉根を抑える。

「一度暴れさせて、ガス抜きをしなくちゃなりませんよ、あの子は」
「そんな問題か」

「だって仕方ないでしょう。あの子はそういう子ですし、一度暴れればしばらくはおとなしいですよ」

飄々と応える息子に。パーシモンは崩れ落ちそうになる。

「陛下もそういう子だっていうのはわかってると思うな」

パーシヴァルの言葉を猜疑に満ちた目でパーシモンは見つめた。

真相究明（後書き）

パーシヴァルは隠れ腹黒です。

真相究明 2 (前書き)

陛下、鬼畜です

真相究明 2

膠着状態だったそれが唐突に動いた。

それぞれ別方向から三人がかりでミリエルに飛び掛ったのだ。

うち二人は鉄球の洗礼を受ける羽目になっても一人が少女を取り押さえればいい。

誰が犠牲になっても恨みっこなしだ。

それぞれがそうアイコンタクトしながら飛びついていく。

前と右から襲い掛かったものが腕や肩をへし折られる。そして背後から襲い掛かり、その身体を捕らえたと思ったとき、その手は空を切った。

少女は、一気に身体を低くして瞬時に伸ばした脛で相手の足を払った。

倒れた相手を踏み越えて、きっちり肋骨を踏み折って、なお進む。

ためらいのない攻撃振りに兵士達の背筋に戦慄が走る。

なんとしてもこの少女を止めなければ、さもないければ主にもその容赦ない纖手を伸ばすだろう。

そして一度だけ少女の歩みが止まった。

パーシモンとパーシヴァルの二人が同時にミリエルにしがみついたのだ。

「だめ、気持ちわかるけどだめ」

泣きそうな顔でパーシモンがミリエルの肩を抱きしめる。

「そうだよ、ミリエル。ここにいる兵士の皆さんに何の罪もないんだ、むやみに傷つけちゃだめだよ」

そう言つてパーシヴァルもミリエルの腰にしがみついて押し留めようとした。

今の今まで、弱腰だの、軟弱だの言われていた親子がこのとき初めて尊敬の眼差しを送られた。

しかし、山岳訓練で鍛え上げられたミリエルの足腰は尋常ではなかった。

細いとはいえ成人と成人に近い男二人を引きずったままその歩みは止まらない。

そしてついに謁見の間に到達してしまった。

「あのね、ミリエルここで引いて」

「あたしはただ、死なない程度に頭蓋骨にひびを入れたいだけなんだけど」

「頭蓋骨が壊れたら死ぬでしょ」

「死なない、それくらいの技術はある」

ミリエルは断固として考えを変えそうにない。

「しかしだ、私としても頭蓋骨を割られるわけには行かない」
静かな声がした。

謁見の間から出てきた十数人の騎士達。そのすべてがミリエルを狙って弓を引き絞っていた。

「武器を捨てなさい。この人数で矢を射られて、それでも生き延びることができると思っかね」

国王の声だった。

親子三人は棒を飲んだように立ち尽くす。

「ミリエル。君が男の子なら話は単純だった」

国王は静かに話し続ける。

「もし男の子であれば、二年前、サン・シモンの武術祭りに出ていた君をそのまま本国に持ち帰り、そのまま士官学校に放り込めばよかった」

ミリエルが、特殊部隊に入隊して初めて出場した、武道会のことを言っていると気付く。

「だが女の子だった、それならばどんな利用法があるか、こちらも頭を悩ませたんだ」

「利用法？」

ミリエルの唇が歪む。

「そう、すべての王族が国家の内部でどのように活用できるか、それを考えるのも私の仕事だよ」

「つまりなに、あたしが男の子だったら、その場であそこで拉致られていたってこと」

「その通り。軍縮が今の流行だが、それでも有能な指揮官になりうる人材はぜひとも確保したいからね、ところが、我がリンツアー軍は男子のみ。あの時は本当に悔しかった」

身勝手な言い分、とミリエルは吐き捨てる。

「だが、唯一君を利用できそうなのが、サヴォワ王太子との縁談だ、それを撤回するつもりはない」

モーニングスターを掴むミリエルの手が震えていた、

「王様相手にこんなこと言うのは犯罪だろうけど、それでも言うわ、リンツアーの税金ほとんど使っていないのに、リンツアーのために犠牲になれってどんなずうずうしい言い分よ。たとえこれが罪でもあたしはふざけんなって叫んでやる」

「まあそうだね」

パーシヴァルの言葉は妙に響いた。

「たとえ神が相手でもあたしはあたしだ。ふざけんな」

ミリエルは武器を捨てた状態で、兵士達にそのまま連行されていく。

「あの兄上、あのままだと私も矢褌になりそうでしたが」

パーシモンが恐る恐るという風に聞いた。

「娘のことはお前も連帯責任だ」

その言葉にパーシモンはその場でうなだれた。

真相究明 2（後書き）

次回久しぶりにダニーロとアマンダが出ます。

最後の真相

薄暗い地下牢の中、ミリエルは唇を噛み締めて、蹲っていた。

どの道、利用は止めないといっていた。だとすれば、今地下牢に入れていても、いずれ出されてお嫁入りだ。

政略結婚なんて冗談じゃない。

こうなれば、罪のない花婿に拳の餌食になってもらおうか。

ミリエルがそんなことを考え始めたとき、聞きなれた声で名前を呼ばれた。

「ミリエルや」

そこにダニーロがいた。

「おじいちゃん、どうして王宮に」

パーシモンの話では、ダニーロもアマンダも王宮に入れないはずだ。

「お前を説得するためだよ」

愕然としてミリエルは、ダニーロを見る。しかしダニーロはいつもと変わらぬ飄々とした顔でミリエルに笑いかけた。

「お前は、初代黒獅子の名を知っているか？」

「知らないわけないでしょ、アルカンジェルよ」

「そのアルカンジェルがお前の先祖だ」

ミリエルは目を剥く。

「アルカンジェルは、かつて絶大な権力を握っていた。彼はいずれ王朝をのつとめるのではとさえ言われていた。結局そうはならなかった。だから今わしは雑貨屋をやっているんだ」

意外な先祖の過去にミリエルは鉄格子に向けて身を乗り出した。

「だが、王室は今でも疑っている。アルカンジェルの末裔が、何か事を起こすのではないかと、実際、わしの子供の頃祖父から聞いた話では、相当のことがあったらしい。だから苗字を変え、軍から離

れて商人になり。そして疑いも大分薄れた頃、アマンダがリンツァーの王族との間に子供を作った」

ミリエルは黙って聞いている。

「そのうえ悪いことに、その王族の母親は、サン・シモン王室の血を受けていた。それもよりによって玉座篡奪の陰謀に加担し、しかし証拠不十分で裁けず、婚姻という形で本国から追放された女だった」

ミリエルはダニーロが何を言いたいかうすうす気が付いた。

「もう、すべてはサン・シモン王室にばれてしまった。もしサフラン商会特殊部隊に戻れば、お前は確実に殺される」

ミリエルは何も言えなかった。今まで何も知らなかったということがよくわかったから。

「重なりすぎたって言うこと？」

「そう、アルマンがお前を手放すことに同意せざるを得ないくらい」沈黙が重かった。

「それで私にお嫁に行けって？」

ミリエルは泣きそうになっていた。

「そう、リンツァーの王族出身のお妃様となればサン・シモン上層部も手出しできまい」

「おじいちゃん、サヴォワは内戦中よ、命の保証がないのはどっちも同じじゃない」

「どっちが生き残れる確率が高いかじゃな」

「あたしが、サン・シモンに戻るより、サヴォワに行ったほうが生き延びられそうなんだ」

ダニーロは重々しく頷いた。

パーシモンとパーシヴァル。そしてアマンダと国王が一つ部屋に顔を付き合わせていた。

「アマンダ、どうしてミリエルにあんな凶器を渡したりしたんだ」

「あの時、あたしがどんな思いで生きていたか、わかってないわけ」

針の視線でにらまれて、パーシモンは思わず壁際まで逃げる。

「僕も、あの子は手近な場所に凶器がないと生きていけない子だって思ってたから」

凶器を差し入れた親子はまったく反省の色がない。

「パーシモン、お前」

頭痛をこらえるように国王はこめかみを押さえた。その言外に、お前はこういう趣味をしているんだとか、せつかく母親から逃れようとしたのに、同じような女を選んでどうするとか飲み込んだ言葉は売るほどあった。

「多分お義父さんが何とか説得してくれるでしょう」

「あれで説得されないはずだよ、事情を聞いたときは僕も顎が外れるかと思った」

パーシヴァルも同意する。

「いずれそういう風に持ち込む気だったんだ。おじいちゃんは」

確かにどっかの王族のお妃になってしまえば、サン・シモンは手が出せない。しかし別の理由で命を狙われる可能性も高い。

「だから、母上、レオナルドなら、そういうのきちんと面倒見てくれますから」

内乱状態さえ落ち着けば、文句なしの嫁入り先だとパーシヴァルは断言する。

「これから知恵を絞って、内乱を落ち着かせて見せます」

パーシヴァルはそう断言した。

お見合い決定

一番地下牢で過ごし、ミリエルは離宮に戻された。

上等な石鹸と香油で磨きなおされて、お見合いにあわせて授業のほかに美容の時間も入った。

ミリエルは黙々とすべての科目をこなしていく。

もはや自分に逃げ場はないと悟ってしまったからだ。

謁見の街核での暴れっぷりに腰が引けていた侍女達もおいおい元に戻りつつある。

ミリエル的には自棄になったつもりはない。進む方向が見えたからそこに行くだけ。そういう腹のすえ方をしていた。

「何を読んでいるんだい」

教養のため、課題図書目録を渡された、目録の中なら何を読んでもいいといわれたので、歴史書を読んでいた。

パーシヴァルは、ミリエルの机の上を眺める。

「どうして本が三冊もあるんだい」

「だって読んでいるのは戦争のところなんだもの。戦争のとき、大體自分の都合のいいところしか書かないでしょう。だから敵味方、どちらの言い分も同時に見れば面白いかと主って」

「面白い見方だね」

パーシヴァルは、サヴォワ史とサン・シモン史を同時に取り上げた。

「ミリエル。君に報告があるんだ。君のお見合いの日取りが決まった」

椅子から立ち上がると、ミリエルは、背後に置かれたソファセツトに移った。

小卓の上の呼び鈴を鳴らす手も最近はずいぶん慣れた。

「お茶を持ってきて、そして、お茶を置いたらしばらく来ないで」女官にそう命じると。ミリエルは改めて坐りなおし、パーシヴァ

ルの顔を正面から睨んだ。

「ただの結婚前の顔合わせでしょう」

「そうだね、お見合いといってもこの話は断ることが許されないから。でもさ、僕の用意した本読んでないの」

「一冊だけ読んだけど、他の課題図書や勉強の予習や筋肉トレーニングで忙しくて」

最後のは聞かなかったことにしようとパーシヴァルは思った。

「それはそうと、お見合いは、三日後、陛下の立会いで、郊外の離宮にて行われる」

「郊外の離宮？」

「そう、街外れの大分外れたところにある離宮だよ。人氣がほとんどない。そこに陛下と王太子殿下両法の手で、サヴォワ王太子レオナルドに引き渡される。そしてその場で婚約式と相成るわけだ」

「最初から婚約式と言ったら」

「ま、そうだけど、初めて顔をあわせるわけだし」

女官が持ってきたお茶をカップに注ぐ。

「後は自分でやるわ」

そう言つてミリエルは女官を制した。

「後、しばらく人を寄せないようにしてくれる」

女官は一礼してその場を去っていった。

「ずいぶん堂に入ってるね」

「どうだか、影で何を言ってるかわかったもんじゃないわ」

宮廷勤めをする女官や侍女は最低でも子爵家あたりの娘だ。それが、庶民の雑貨屋の娘を姫と呼んでかしくかねばならないのだ。面白はずないとミリエルは思っていた。

おそらく汚れ仕事のお碑た辺りが庶民の娘なのだろう。

妙なことになっていると人事のように思う。

「まあ、お姫様ぶりっ子を学ぶために、僕の用意した本を読んでほしいな」

パーシヴァルの言葉にミリエルは気のない顔で頷いた。

ミリエルとしては、これから行かなければならないサヴォワの情
報集めのほうが、お姫様ぶりっ子より重要だと思っていたのだが。

お見合い開始（前書き）

タイトルに偽りあります。まだ顔をあわせていません。

お見合い開始

レオナルドは来る婚約式のため、本国から随従してきた部下達と入念に準備をまとめていた。

「パーシヴァル侯爵の妹姫ですか」

部下達が怪訝そうな顔で、見合いの身上書を見る。

「パーシモン・ヴェルデ・リンツァー王弟殿下に姫君がいたということ自体初耳なのですが」

レオナルドは、母方の姻戚関係で故リンツァー王室とは近しく行き来があった。王弟殿下の姫君が存在したならとつくに面識があった。当然のはずだった。

「どうも、例の王太后がらみらしいという噂を聞きました」

先代の王太后と現国王のいがみ合いは知らぬものがないほど有名な話だった。

異母兄の国王と実母の王太后の板ばさみになって苦悩の日々を過ごしていたのがパーシモン王弟殿下だった。

それと、いきなり現れた姫君がどう繋がるのかいささか疑問に思ったが。結局考えないことにした。

「ミリエル姫か。肖像画も付いていないとは珍しいな」

王族同士の婚姻では釣り書きと同じくらい重要視されるのが肖像画だ。

特に姫君の縁談では、国一番の画家に、最高傑作をと依頼することも珍しくない。

また、画家にとつてもなく美化された肖像画を贈られ、本人が来ても別人ではないかと疑われるのも、よくある話だった。

「どの道明後日だ、それに姫君の容姿がどうあれ、断ることのできる話でもあるまい」

レオナルドは、そう言って身上書を閉じた。

ミリエルは、婚約式の手順をベアトリーチェに叩き込まれていた。王宮についてしばらくは顔を見なかったのだが、儀式の手順ならば私だと名乗り出たのだという。

うんざりした内面を、綺麗に化粧した顔で押し隠し。ミリエルは祭壇に見立てた机の上で、婚約証明書にサインをする練習をしていた。

「ミリエル様、ご自分の名前を間違っってはなりません」

ミリエルは真面目に自分の名前、ミリエル・モニークと記したのだが、ベアトリーチェはその場で顔をしかめた。

「正しくはこうでございます」

そこに記されたのは、ミリエル・アレクト・リンツァーという名前だった。

最初のミリエル以外まったく聞いたことがない。

「陛下がわざわざ考えてくださったのですよ」

聞いてないという言葉をミリエルは飲み込んだ。

偉い人というのはこういうものなのだ、もういちいち怒っていてもしようがない。

もはや諦めの境地で、サインをやり直した。

「サインが終わったら神官が掲げる台から、レオナルド殿下が指輪を取り上げ、そのお手にはめます。それで婚約成立となります。そして、陛下、パーシモン殿下のお二人が、証人としてサインを入れます。それで式は終了です」

最初から最後までの手順を、ミリエルは一通り頭に入れる。

「それでは、最初からおさらいです、まず入場し、レオナルド殿下に、ご挨拶するところから」

レオナルドの代わりにと連れてこられた騎士の顔も引きつっている。

最初の手順を教わったのは朝食を食べた直後、そしてすべての手順の説明が終わり、すでに夕日が窓から差し込んできている。その上、最初からおさらい。

ミリエルの目の前が真っ暗になるのを覚えた。

その日は抜けるような青空で婚約式という人生を決める儀式を行うには立ってはい幸先がいい。

レオナルドはそう思った。かすかな笑みを浮かべると、リンツァー側の、婚約式立会人達に挨拶する。

リンツァーの重臣達一同は、レオナルドの顔を見たとき涙ぐんだ。

「どうなされた」

「何でもありません」

ハンカチで目をぬぐいながら言われても何の説得力もない。

かすかに聞こえた言葉は、可哀相。

「無理もないか」

たった十五歳の少女が内戦に明け暮れる国に連れて行かれるのだ。しかし、彼は誤解していた。可哀相と思われていたのは他ならぬ自分であると。

お見合い開始（後書き）

レオナルドは正統は王子様の予定です。

お見合い終了と婚約成立。(前書き)

レオナルドがかわいそうです

お見合い終了と婚約成立。

離宮の大広間の中に入ると、儀式の準備は整えられていた。国王と王太子　その横に王弟殿下とその息子が立っていた。

国王親子と違い、王弟親子は、線の細さが際立っていた。国王の髪が濃い金色をしていて、目の色も紺色の濃い色をしているのだが、王弟殿下のほうは、髪は銀と見まごう薄い金色。瞳も淡い緑色、影の薄さは否めない。

そして、その傍らに坐っているのが件のミリエル姫だろう。

父親同様の淡い金髪をひつつめて、赤い宝石の付いた髪飾りでまとめている。薄い灰色に近いドレスは、絹の光沢とあいまってまるで銀のドレスを着ているよう。装身具は小さな赤い宝石のみでまとめられて少女自体が銀でできた彫像のようにも見える。

そして少女は、父や兄に似て線の細い華奢で小柄ないかにも儚げに見えた。

だがその表情は硬くこわばり、唇はきつく引き結ばれていた。

レオナルドは少女に歩み寄った。後三步で目の前にたつというタイミングでミリエルは立ち上がる。そしてスカートをつまんで貴婦人の一礼を送った。

下げられた首がひどく細い。

顔を上げた少女は、兄に促されて右手を差し出した。

その手の甲に口付けを落とす。

その時、違和感を感じた。掌に当たった指に当たるのは、胼胝の感触だった。

何か硬いものを常時掴んで力を込める作業をしているとできるもの。例えば騎士や兵士の剣胼胝や槍胼胝といったものに似ているような気がする。

しかし何で貴婦人にそんなものができるんだろう。

怪訝に思ったが、それを無表情に押し隠して、少女の手を放す。

「それでは、婚約式を執り行う」
国王の重々しい宣言が響いた。

神官による清めの儀式が終わった後、誓いの言葉を述べる。そして祭壇に二人並んで跪き無言で規定の時間祈る。

長身で、体格のよいレオナルドと、小柄で華奢なミリエルが並んでいるとまるで大人と子供だ。それに血色よく日焼けし、髪と瞳が黒に近い褐色であるため、余計に対照的だ。

そしていよいよ、婚約証名書にサインを入れる。

そして婚約指輪の授与。ミリエルの左手に指輪をはめるとき、レオナルドは眉をしかめた。左手にも、胼胝がある。指を押さえ、指輪をはめていくときに、何かに当たるごつごつとした手ごたえ。それに、指先や指自体、妙に硬い。

そんなレオナルドの疑問をよそに、その後、その証明書に立会人として、国王と王弟が連名でサインを入れる。

ミリエルと、レオナルドは並んで二人に一礼した。

そして、その離宮で、ささやかながら晩餐会が行われた。

二人の婚約は公にはされない。今は時機を見ている状態だ。

だが、いずれ二人にはサヴォワに戻ってもらうことが決定している。レオナルドはそれを承知しているし、ミリエルも覚悟を決めたようだ。

『たかが内乱、それごときを恐れていては傭兵王と呼ばれたご先祖に申し訳が立たない』と嘯いていたという。

しかし、そんなミリエルの内心を知らないレオナルドは、ミリエルに話しかけずらい物を感じていた。

「殿下は私が最近まで王族とみなされない身であったことをご存知ですか」

唐突にミリエルが口を開いた。

「そして王族のたしなみなど最近身につけたばかりの付け焼刃もい

いところ、これから先王族の妃としてやっていくのに大きな困難があるのは？」

意外にきびきびした口のきき方だった。先ほど感じた儚さが嘘のようだ。

「それに関しては聞いていません。詳しいお話をお聞きしても？」

「私の両親が貴賤結婚であったのはご存知ですね、そのことに腹を立てた祖母は、私を殺そうとしたのだそうです。腹いせですね、そのことを察知した母が私を抱えて、母国に逃げ延びたのだそうです」
重い話を、何の思い入れもなく淡々と語る。

「それでリンツァーでお育ちにならなかった。それで今日初対面となったわけですね」

昨日の疑問は綺麗に晴れた。しかし今日感じた疑問は、聞いていものだろうかと悩む。

「あまり裕福な家ではありませんでした。私自身が箒を持って掃除をしなければならぬような」

世間一般では、そういう家のほうがはるかに多い。しかし根っからの王子であるレオナルドは、そうですね、沈痛な面持ちになる。そして、と大きな誤解をしてしまった。

普通箒であんなごつい胼胝はできないということを彼は知らなかったのだ。

彼がその誤解に気付く日は遠い。

お見合い終了と婚約成立。(後書き)

次はミリエル視点になりますか

理想と現実と困惑と（前書き）

ストーリーは進んでいません。

理想と現実と困惑と

晩餐が終わると、ミリエルは馬車に乗せられ、離宮へと戻った。そして離宮に戻ると、簡素な部屋着に着替えさせるように侍女達に命じた。

面倒なことに、この手の衣装は一人では脱ぎ着ができない。

ミリエルも、侍女達にいちいち命じて着替えるのが面倒だと思っていたが、何しろ留め金に手が届かなかったり、きちきちのコルセツトのせいで、腰をひねるのがとてもなく難しかったりで、諦めていた。

衣装を着替え、髪を下ろすとうやうやく一息つくことができた。

腰を締め付けないすとした衣装を着て、それからお茶と簡単な軽食を頼んだ。

コルセツトをしたままでは胃が圧迫されて、ろくに食べることもできない。

出されたのは、お茶と、干し果物入りのパンとチーズ。無言で黙々と食べていく。

婚約式を終えて、これで結婚が決まったという実感はない。ミリエルにとっては押し付けられた仕事を終えたというだけのことだ。結構ずけずけとものを言っただけでいぶん驚いた顔をされた。

ミリエルは不意に未来の夫であるレオナルドの顔を思い出す。

日に焼けた肌、黒褐色の髪。それがまずミリエルの目を引いた。最初の挨拶から、手をとるまで、ずいぶんぎこちなく動いたが、そのとき背後にベアトリーチェの殺気にみちた視線を感じて、思わず表情がこわばった。

「もしかして、緊張していると勘違いされたかな」

思わず呟く。もっともミリエルにこの結婚について思い入れはない。その相手にもだ。

そういえばパーシヴァルが、言っていた。

「僕としては、背景はともかく。レオナルドと縁を結ぶのは悪いことじゃないよ」と。まあ友達を悪く言いたくないだけだろうが。

ゆったりとした長椅子に腰掛けて、ただっ広いやたら豪華な部屋で、夜食をほお張っているこのひと時が妙に現実感がなく思える。

お茶の甘い花の香りと、そのお茶にたらしした上等の蜂蜜の香り。

婚約だけじゃない。この場にある何もかもがミリエルにとって現実とは思えないものだ。

「悪い縁じゃないか」

ミリエルはレオナルドの顔を思い出して少し笑った。

「ぜんぜん範囲じゃない結婚相手よね」

堅実に、グランデと一緒に店をやってくれる人と結婚する予定だったのに。実際に現れた結婚相手は、戦乱の国の王子様。ハイリスクもいいところだ。その上、国が安定していないから、ハイリターンは今のところ保証されていない。

「本当だったらお断りしてるんだから」

そう呟いて口を尖らせる。そして我に返ってテーブルに突っ伏す。

「何やってんのよ、私」

現実味のない結婚話、しかし、相手の顔を見て、現実だと頭にしみこんできているのかもしれない。

「もう寝よ」

夜食を食べ終わると、ミリエルは、備え付けの浴室に向かう。

侍女達が、夜食を頼んだ段階で浴室の準備もしてくれていた。

大鍋に、湯を沸かし小さな桶で入浴していた生活。それでも、入浴できるだけ贅沢だった。沸かすのが一度では足りず、何度も大鍋を持って浴室に向かったかつての自分が嘘のようだ。

浴室には甘い香りが満ちていた。縁談のために、湯に香油が落とされているからだ。

ミリエルは両手を見た。掌にごつごつとした胼胝がある。

「それでもあの日は嘘じゃない」

あの雑貨屋で過ごした日々は現実、宮廷にいるのも現実。
祖父と母は今何をしているだろう。
衣装を脱ぎながらそんなことを思った。

理想と現実と困惑と（後書き）

ひたすらミリエルが混乱する話でした

旅立つまでの時（前書き）

もう少しでサヴォワ編になるはずなのですが、停滞気味です。

旅立つまでの時

パーシヴァルは国王に面会を要請した。

その時、国王はレオナルドと面談中だった。

「そのままで結構ですよ、僕のお願ひもそれに関係していますから」
気弱げな笑みで、パーシヴァルは執務机の脇に立つ。

「お願いとは、ミリエルがサヴォワに旅立つとき、僕も一緒にさせていただきます」

その言葉に二人ともに仰天した。

「正気か？」

レオナルドが恐る恐る聞く。それも当然だ。パーシヴァル侯爵といえば、弱腰、軟弱の代名詞と呼ばれている。

そのパーシヴァルが内戦状態のサヴォワとともに旅立つというのだ。驚かないはずがない。

しかしパーシヴァルは本気だった。

「君は荒事が苦手なんじゃないのか」

レオナルドが問いただす。レオナルドがリンツァーに半ば亡命のような形で滞在しているうちに親しくなった友人。と言えば聞こえがいいが、実際にはあまりに弱弱しすぎて、ほうっておくに置けなくなつたというほうが正しい。

王弟殿下のご子息と、それなりに身分の高い貴公子のはずなのに、はるかに身分がしたの人間にもコケにされる有様。

そんな彼を知りすぎるほど知っている。

実際にそう無能な人間ではないのも知っているが、それでも戦場で役に立つ人間化と問われれば力強く否と応えられる。

「でも、ミリエルも行くだろう。お姫様が二人いると思えばいいよ」
足手まといになる気満々の台詞に思わず脱力する。

「危ないからだめ」

「だめって行っても付いていくよ」

その言葉に思わずレオナルドは頭に血が上る。

「いい加減にしるよ、何もできないと知っていて、わざわざ今のサヴオワに来ようとするその行為がどういう意味を持っているか分かっているのか？」

「何もできないわけじゃないのは君も知っているだろう」

パーシヴァルは譲る気がない。

「君が、サヴオワに行こうという気を起こしたのは、ミリエル姫のためか？」

「もちろん、そうだよ、でも、それだけじゃない、君のためでもある」

無能ではない、おとなしく、気弱な性質だが、人と人の関係を見抜いたり、それを利用したりする才能には恵まれている。

彼の前で悪事を働いたものがいても、即座に告発したりはしない。その代わりゆつくりと、周囲の人間を利用して、追い詰めて破滅させる。

その手際に関しては評価している。

しかしそれも宮廷の中だからこそのことだ。実際にその外で通用することではないと思っている。

一歩も引く様子のない二人の言い合いに、待ったをかけたのは国王だった。

「二人ともいい加減にしる、この場合、パーシヴァルはレオナルドに負担をかけないように、自前で補給も装備も用意して付いて行く」
「陛下、それでは、」

レオナルドが不満げに口を挟もうとするのを制して言う。

「そして、ミリエルのことは、双方で責任を持つ」

「陛下お言葉ですが、ミリエル姫は私の婚約者です、責任を持つのは当然です」

「僕の妹だし、責任を持たなきゃだめでしょう」

「これは決定だ」

有無を言わさずそう宣言した。

その頃、ミリエルは、パーシヴァルから届けられた母の心遣いの
中身を確認していた。

全容を見るのが怖いので、女官や侍女達はミリエルの寝室には絶
対に立ち入るまいと誓っていた。

旅立つまでの時（後書き）

母の心遣いの全容は、リンツァー編の最終話と、サヴォワ編の冒頭に出てくるんじゃないかなと思っています。

薔薇の傍らで

リンツァー王国の薔薇の庭園。今は秋薔薇が見ごろだ。

淡い黄色の薔薇の傍らにミリエルは坐っていた。

その傍らにレオナルドが立っている。

庭園の周りには人払いがなされ、この場にいるのは二人きりだ。

淡い緑のドレス姿のミリエルと、レオナルドは、それぞれ向かい合って見詰め合っていた。

「よろしければ、私のリユートでもお聞きになりませんか？」

おそらく会話が続くまいと想定していたミリエルは、あらかじめ用意してきた、侍女達に用意させたとも言っ。リユートを持ち出した。

そして、適当に、爪弾き始めた。

豎琴を持ち出そうとしたのだが、あまりにわざとらしいと言う意見のもと却下された。

弾いているうちに、ふとその曲に付けられた歌を思い出す。

実はかなり陰惨な歌が付いていたのだ。

サン・シモンで流行っていた歌だもの、歌わなきゃばれないわよね。

開き直って最後まで弾く。

「美しいけれど、どこか物悲しい曲ですね」

ばれたか、とミリエルの背筋に冷たい汗が伝う。

「やはり、私というのは気が進まないですか」

いえ、そんなことはないですが、やっぱり腕立て伏せやスクワットをしていたほうが楽しいです。あと、大好きなのは登山しながらの走りこみです。

全身の筋肉をくまなく使う東大陸舞踊に興味ありますか。

脳裏に浮かんだことを、口に出す前に、ミリエルは飲み込んだ。

明らかにお姫様の話題じゃない。かといってミリエルの思考の箱

は、逆さに振つてもお姫様は愚かお嬢様の話題すら出てこない。

「姫は実際的なお話をなさる方でしたね」

婚約式のときのあけすけな告白のことを言っているのだろうか。

「それならば申し上げます、おそらく冬が来る前に、サヴォワ入りを果たす予定です。姫に辛い旅になるでしょうが、耐えてください」
前半護送車、後半ベアトリーチエの詰め込み教育より辛い旅なんかないと、言いたいと言えない。

おそらく彼はミリエルが、鎖につながれて、サン・シモンからリンツアーまで連れてこられたということは知らないのだろう。

「それで、パーシヴァルが姫と同行すると言い出しまして、姫、パーシヴァルには無理です、姫から忠告してあげてください」

「あの、私より兄のほうが弱いようなおっしゃりようですが」
レオナルドはあせったように額をぬぐう。

「いえ、姫が弱いと言っていることではなくて、パーシヴァルのひ弱さがずば抜けていると言っていることです」

たとえパーシヴァルがずば抜けてひ弱でなくとも、ミリエルのほうがパーシヴァルより弱いことはない。

と言うか、ミリエルにはか弱さのかけらもない。ほっそりとした肢体は見た目より重い。体脂肪率が平均的な乙女の半分だからだ。

少ない脂肪の代わりにみっちり付いているのは、引き締まった筋肉。

鍛え上げられたその腕力は雑貨屋の荷物搬入のとき威力を発揮した。

そして常時モーニングスターを腰につけて生活しているうちに磨き上げられた脚力。

どれをとってもパーシヴァルが、かなう相手ではない。

「お兄様とは、今日話し合ってみます。ですが、兄はあれで意外に頑固なので、説得できるかどうかわかりません」

ミリエルはリユートを膝の上で弄びながら、目を伏せて応える。
「そうですか、私も無理にとは言いませんが」

レオナルドはそう言ってミリエルの髪に手を触れた。

薔薇の傍らで（後書き）

レオナルド、アプローチ編か、ミリエル果てしなくずれている。

家族会議（前書き）

昨日更新しなかったにもかかわらずいぶんたくさんの方に来ていただき有難うございます。初日から読んでくださった皆様に感謝。
新しく来てくださった方にも感謝です。

家族会議

再び、馬車に詰め込まれ、旅の日々が始まる。

ミリエルが手近に置く荷物は、アマンダが用意した旅行鞆一つだが、ミリエル・アレクト・リンツァーとして持っていく荷物は、ミリエルつきの女官たちが、総動員してまとめていた。

いつの間に作ったんだと呆れるほど大量にある、ドレス類。うちの年収何年分だと問いただしたくなる宝飾品。それに付随する靴やら帽子やらその他諸々それだけで結構な広さの部屋が埋まってしまうほどだ。

そして、ベアトリーチェセレクトの教養のための書籍類。

そして、身の回りに必要なものとして、化粧品に化粧品。入浴に必要な物、そしてシーツまでわざわざ長持二つ分用意されている。

ミリエルはもはや見たくもないと、一切を無視していた。

これから内戦真っ盛りの国に行くというのに、絹のドレスがなんの役に立つと言うのか、そんなものを積む余裕があるのなら、食料や、医薬品を余分に積むべきだろう。

そんなミリエルの常識は、しきたりと言う言葉に叩き落された。

仮にも王族の女性が他国に向かうためには、それくらいのお支度がどうしても必要だと言い張ったのだ。

そういうわけで、パタパタと忙しそうに駆けずり回る女官たちを見守りつつ頭痛をこらえながらお茶とお菓子をいただくのが、最近のミリエルの日課だ。

ただ、これで、他国に行ってしまうからと言う温情で、ダニーロとアマンダとの面会が許されたのが救いだった。

ダニーロは、不名誉除隊処分は、元々お前の罪ではないのだからと、いざと言うときは、いつでもサフラン商工会に頼ることができる、黒獅子アルマン直筆の証書を手渡してくれた。

アマンダは、すっかりお姫様な格好をしているミリエルを抱きし

めて、何度もごめんね、ごめんねと繰り返していた。

二人がいる間、パーシヴァルとパーシモン親子は近寄ってこない。アマンダとパーシヴァルは親子なのだし、それなりに積もる話もあるのではと問うと、それはパーシモンの館でさんざんしたからいいと、そう言っただけ、もう少しアマンダに甘えておけと促された。

パーシモンは、近寄ってこようとするとアマンダに睨まれて後ずさってしまふ。

勝手に国王の養女にされたり、縁談をまとめられたり、それを食い止められなかったのがよっぽど腹に据えかねているようだ。

しかしミリエルが見てもパーシモンの弱腰では、食い止められただけだと思ふ。

「そういえば兄さん、兄さんもサヴォワに行くそうだけど、準備はいいの？」

その言葉にアマンダが目を剥いた。

「パーシヴァル、本気かい、あんたはミリエルと違うんだよ、いざという時山の中に逃げ込んで1月もつような子じゃないんだ」

ああ、やっぱり、兄さんのほうが弱いと家族は認識している。

ミリエルは心中で涙した。

「アマンダ、パーシヴァルは意外と言いだしたら聞かない子なんだ」

「何いってんだい、安全なグランデによこすのもさんざん決ったあんたが危険なサヴォワ行を何で止めなかったんだ」

「だって、いざとなったらミリエルが守ってくれるだろう」

パーシモンの言葉にそのままミリエルは轟沈した。

どこの世界に、いざという時兄を守れと妹に言う親がいるんだろう。

「まあ、確かにそれはそうだけど」

納得しないでお母さん。そんなミリエルの心の叫びを無視して、両親は話を煮詰める。

「まあ、パーシヴァルも、いざというときはミリエルの暴走を身体を張って食い止める覚悟があるんだろうし」

おじいちゃん、サヴォワよりあたしのほうが危険だと。

家族から散々な言いようにミリエルは、床にしゃがみこんで落ち込んだ。

「ミリエル、その絨毯高いんだからむしっちゃだめだよ」

パーシヴァルの的外れな忠告に、ちよっぴり殺意を覚えた。

「兄さん、レオナルドさんから、兄さんがサヴォワに入るのは無茶だつて言われたんだけど」

嫌味のつもりでそう言ったが、パーシヴァルは動じなかった。

「レオナルドはね典型的な王子様なんだ、王子様の道理でしか動けない。僕は母方の薫陶を受けて、それ以外の視点から動ける。だから行くんだ、もう王子様の視点ではどうしようもない状態になっているだろうからね」

意外に真面目な顔つきをしているパーシヴァルにミリエルは戸惑った。

「サフラン商工会幹部の孫、下手な名門貴族より、出るところによつては使える肩書きなんだよね」

そう言つてダニーロを見る。

「もしかして、おじいちゃん、いろいろと便宜を図つてたの」

「まあ、孫のことだし、いろいろと、できることはしたよ」

意外なつながりに、ミリエルは少々驚いた。

そして、レオナルドの心配はどうやら杞憂に終わりそうだとなんとなく思った。

再びの旅立ち

大仰な馬車を連ねて、ミリエルのお支度が整った。

ミリエルは、ふかふかの椅子の上で、青いドレス姿で姿勢を正して坐っていた。

乗る前に見た馬車は、精緻な飾り彫りを施された、それだけで芸術品といってもいい豪華な外観をしていた。

その馬車の中で、ミリエルは一人だけだ。

レオナルドは、騎馬で移動すると言っているし。パーシヴァルは自分の部下達と相乗りで移動すると言っている。

ミリエルつきの侍女達も使用人用の馬車で移動するので、ミリエルは結果として豪華な馬車を独占している格好だ。

しかし、コルセットで固められたドレスや、きつちりと結い上げられた髪は、一人だからと言って姿勢を崩すことを許してくれなかった。

ミリエルの足元に、馬車の内装や、ミリエルのドレスと不釣り合いな、黒い、革靴が置かれていた。

絶対に手元から放すなど、馬車に乗る直前にアマンダからくどいほどに念を押された。

騎士や兵士達が、持とうとするのを拒否して、ミリエルが自分で馬車に運び込んだ。

一人で、ただ坐っているのは苦痛でしかないが、ベアトリーチェがいないだけでしたと自分に言い聞かせた。

ミリエルの背後に連なる馬車には、ミリエルの侍女たち、そしてドレスや宝飾品を積んだ馬車。そのことを思うとミリエルの頭痛はいやます。

この非常時にドレスを満載してやってきて、常識がないのかって怒られたらどうしよう。

ミリエルは真剣に悩んでいた。

山道に行くレオナルドに、部下達が声をかける。

「ミリエル様とご一緒でなくともよろしいので」

そう言われて、レオナルドは顔を曇らせる。

母親が渡した荷物を抱きしめて、侍女や部下達にも触らせないように、かたくなな態度をとっていた少女を思い出すと、どこか胸がもやもやする。

それが、あのか弱そうな少女を自分の都合で巻き込んだことによる罪悪感なのか、それとも少女がいつまでも自分に打ち解けない態度をとり続けることによる苛立ちなのか、自分で自分のはつきりしない。

無論、ミリエルが心細い思いをしているだろうから自分が傍らに立って、その気持ちをほぐすべきだと、思っているのだが、どうしても行動に出せない。

ミリエルのいる方向を振り返ってみる。しかし、重厚な馬車の中、ミリエルの姿はどうしても見えない。

ミリエルは、いつの間にか転寝をしていたようだ。目をこすりそうになつて慌てて思い直す。

化粧が崩れるのみならず、化粧品が目に入って物凄く痛い思いをしたのだ。

化粧は身体に悪いのじゃないかと思う。

そうして身体を身じろがせたときその音がした。

火薬のはじける音。

そしてそれにあわせ、馬が暴れだす気配。

そして、ミリエルは自分の乗っている馬車が、周囲とは別方向に連れて行かれるの感じた。

ミリエルの前方は、壁だ、御者の姿は見えない。

ミリエルは慌てて足元に置いた鞆を抱きしめる。いざという時役に立つから、アマンダの言葉、これがいざという時だ。

ミリエルの中に確かな確信があった。

再びの旅立ち（後書き）

レオナルド、ミリエルはか弱そうであってか弱いではないよ

たった一人の旅立ち

そこに落ちていたのは、ただ切り刻まれたドレスだけ。

レオナルドとパーシヴァルは、それが最後にミリエルを見た時着ていたドレスの残骸であると認識していた。その下には宝石類も落ちており、それもミリエルのものだった。

ミリエルの乗っていた馬車が、隊列を離れそのままミリエルは拉致された。

直ちに救助隊が組まれ、ミリエルの乗っていた馬車が発見される。そしてその場にいた賊とみなしたものを掃討し、ミリエルの行方を捜した。

その時、レオナルドの部下が駆けつけたときには、すでに、身動きが取れなくなるように拘束された者達がいた。

針金で後ろ手に親指だけを拘束されている。

賊の一人を締め上げた結果もたらされた情報は、拘束された者達が、ミリエル姫を監禁しており、それを別の場所に運ぶため合流したときには、全員拘束されていた。

拘束をとくいとまもなく、レオナルドとその一団が攻め込んできたと言う。

「別の勢力がミリエル姫を攫いなおしたというのか」

レオナルドが難しい顔でうなる。

その脇にいたパーシヴァルは、拘束された相手を考え深げに見ていた。

「とりあえず、僕は彼を尋問してみるよ」

そうして、せっかく拘束してあるのだからと、その拘束を解かずに転がされた男を指差した。

「ちよつと席をはずしてくれる。個人的に聞きたいこともあるし」
そういわれて、不審そうな顔をしたが、レオナルドは素直に従う。
残ったのは拘束された男と、パーシヴァル、そしてパーシヴァル

に付いてきた騎士だ。

「あのー、やっぱし」

先ほどから物凄く何か言いたくて言えないという顔をして背後に立っていた。

「この針金を使う拘束法は、サフラン商工会特殊部隊ならびに、機動隊で広く採用されているものだ。間違いないだろう」

「お姫様、自力で逃げちゃったんですね」

乾いた笑いがこぼれる。

拘束されていた男達は三人、一人で三人の男を行動不能にして少女はさくさく逃げてしまった。

「しかし、大丈夫なんですか、土地勘まるでないでしょう？」

「一応、あの子は、武器だけを持って山の中で、草木や獲物を狩って生き残る訓練をしてるし、天体を確認して、方角を知る知識もある。猛獣の対処法も知ってる、まず心配ないと思うよ」

「本当にあんたの妹か？」

思わず言ってしまったも罪にはならないだろう。

軟弱の代名詞と言われているこの男の妹が、どうしてサバイバルの達人なんだと。

「たぶん、サフラン商工会のサヴォワ分支局のある街まで行くだろうな、まあ、それはそれとして、妹が逃げるまでに何があったのか話してもらおうか？」

ミリエルは、馬車から引き摺り下ろされると、そのまま山小屋のような場所に投げ込まれた。

粗末な黒鞆を抱えたまま放そうとしない態度に不審を覚えたものの、それ以上追求しようとせず、部屋の隅に坐らせたままほうっておいた。

これからミリエルをつれにくる別働隊に合図を送ると、二人が出て行った。男が一人になったのを確認してミリエルは行動を起こした。

少女がいつの間にか自分の傍に立っていたのを見ても、奇妙に思
いこそすれ、脅威には感じなかった。不意にその細い腕が首に巻き
ついて、媚びて命乞いでもするつもりかと思っただけだった。

頸動脈に強い圧迫が加えられ、意識を失うまで、彼は目の前の少
女に何の危険も覚えていなかった。

男が落ちたのを確認すると、人差し指ほどの長さに切った針金で
親指を拘束する。

スカートの下から、愛用の武器を持ち出した。

鎖の鳴る音に目を細める。仲間が拘束され、見たこともないがお
そらく凶器を手にした少女に、戻ってきた男達は仰天する。

脛に、鉄球が打ちつけられ、一人が転倒する。今一人も、肩から
鉄球を見舞われる。

手足の骨を砕かれ、床に倒れた男達の両手も拘束して、ミリエル
は、武器と黒靴を手にその場を立ち去った。最初に落とされた男は
その時には、意識を取り戻していたが、その背を追う事はできな
かった。

ミリエルは、ドレスを切っていた。このドレスは、一人では脱げ
ない。ならば切って無理矢理脱ぐしかない。

ようやくドレスとコルセットを身体からはがすと、黒靴に入って
いた茶と灰色の服に着替え、茶色の外套を着込んだ。

この茶色の外套はアマンドの特注品だ。いざというときには裏返
しにして切ることができる。

その裏の生地は、縦系が茶色、横系が緑、光の当たり具合で茶や
緑に色がちらちらと変化する。山の中でこれを着ればまず発見は難
しいだろう。

そしてミリエルは、茶色い帽子に、髪を押し込んで、宝石と貴金
属の装身具もその場に捨て置く。

そして、左手の指輪は、悩んだ末に、ハンカチでくるんで、靴の
隠しポケットにしまう。

鞆の中には、保存食と道具も入っている。十三のときより楽にしのげるはずだ。

ミリエルは、悠々とその場から歩いていった。

たった一人の旅立ち（後書き）

ここでリンツァー編は終了です。

次はサヴォワ編です。

更に新キャラも出てきますので。

レオナルドの勘違いはいつ是正されるのか、作者も考えてません。

閑話、ある騎士の旅立ち

黒髪の騎士は、庭園で跪いていた。

伯爵夫人は薔薇を手には歩み寄る。ゆるゆるとした歩みだがその間一度も騎士の身体は身じろぎもしない。

伯爵夫人のつま先が目の前に来たとき、騎士はようやく口を開いた。

「お初にお目にかかります。マティルダ王太子妃殿下」

はつきりとした声音にマティルダは眉をしかめた。

「その呼称は捨てました。私は、シファ伯爵夫人です」

かつてマティルダは、隣国の王太子妃だった。そしてその地位を捨てさせたのは眼前の騎士の姉、王太子の愛妾マルグリットが存在だった。

かつての夫とその愛妾に受けた仕打ちは一生涯忘れられそうにない。もはや関係ないと捨て去り、新たな夫を得たいまでさえ。

「そうですね、そうさせたのは、私の姉、詫びて住むことではありません」

騎士の言葉はよどみない。

「詫びると申しましたか、かの一族にそのような言葉があったとは」とんと知りませんでしたか」

憎まれ口にした風もなく騎士は、頭を下げる。

「ですが、私はあなたに詫びに参りました。姉がいたしたこと、詫びてすむことはありません。ましてや許しを請うなど論外。ですが、私の心がすまないのです」

マティルダは、目の前の騎士を見下ろす。

「あなたが詫びる筋合いがあるのですか？ 私は一度も宮中であなたに会ったことがない。詫びねばならないことなどあなたはしていないでしょう」

会ったことは愚か、騎士の存在すらマティルダは知らなかった。

だからこそ、面会を求められて驚いた。

「後ろめたいからです」

意外な言葉にマティルダは目を瞬かせた。

「それは私にですか？」

「いいえ、姉や、家族に対してです」

マティルダが、王太子の下をさった後、愛妾とその一族も王宮を追われたと聞く。しかし元々王宮に眼前の騎士はいなかった。

「私は、沈む船から逃げるねずみなのです。このまま緩やかに没落を続ける家から逃げる。その代償にあなたに家族に代わって謝罪に来たのです」

不意ににじむ自嘲。しかし、マティルダは騎士を責める気持ちがうせた。

騎士もまた、マルグリットの犠牲者だったのではないかと思い当たったのだ。

「詫びは受け入れました、あなたはこれからどうなさるの」

「遠い異国に旅立つつもりです。西方に、戦乱の気配があると聞きました。そこで剣の腕を売ることができればと」

顔を上げた騎士は、揺らがない決意を秘めた目をしていた。

「王太子妃の位を降りる際、私は色々と謀をしました。そのため、マルグリットは愛妾の地位を追われた。私に負い目など、感じる必要はないでしょう」

マティルダは薄く笑う。短い結婚生活。恨みだけを溜め込む日々だった。王太子の下を去ると決めたとき、初めて楽しいと言う気持ちを覚えた。

最良のタイミングで、王太子とその愛妾に確実に面目を潰し、消えない恥をかかせてやろうと。

それをやりおおせた以上。マティルダにかの国への未練はない。

「止められませんでした」

「止めてくれなくて幸いだと、今は言えます。今は幸福ですから」
間違いなくそれは本心だった。

「ごきげんよう、あなたの旅路に幸いがありますように」

マティルダは踵を返す。視界の端に、騎士が、再び頭を垂れるのが見えた。

「似ていない兄弟と言っつのは聞きますが」

背後の侍女が呟く。

「そうね、あんな似てない姉妹も珍しいわよね」

マティルダは聞こえないように呟いた。

閑話、ある騎士の旅立ち（後書き）

間違えたと思った方、実はわざとです。別の短編を入れたわけじゃありません。

出会い（前書き）

新キャラです。ミリエルと別の意味で規格外な方

出会い

街道の端で少女が行き倒れそうになっていた。木に寄りかかり、疲労の色の濃い顔をうなだれさせていた。

そんな少女に対してよからぬことを考えるものは、この荒れた国サヴォワでは数多い。

薄汚れていてもそれなりに端正な顔立ちをしている少女ならなおさらだ。

五人の男達が少女に近寄って言った。

茶色い帽子から綺麗な薄い金髪がこぼれる。

売り飛ばせそうだ。そう考えて舌なめずりをする男達に、気の抜けたような顔で、少女は立ちすくんでいた。

「そこのお嬢さん、その男達は連れか」

騎馬の人物が、少女に声をかけた。

男達はとたんに顔をしかめ、騎馬の人物をねめつける。

長い黒髪を肩でくっただまだ若い二十歳そこそこ、そして体格はあまり恵まれていない。身長はまあ高い程度、肩幅も狭く細いと言いかひよろひよろしている。

しかし腰には大振りの剣をはいている。

そして黒尽くめの装束が騎士身分だと主張している

その人物は、馬から降りると、男達を無視して、少女に駆け寄った。

やつれた顔に、唇も乾いている。おそらくしばらく飲み食いがないなかったのだろう。

「この少女の保護者ではあるまい、保護者が付いていればここまで酷い状態になる前に何とかしている」

そう決め付けると、少女の手をとった。

「渡すか、俺達の獲物だぞ」

かどわかしを企んだことを隠す気もない発言に、剣を抜いた。

「目の前で犯罪を見逃すわけにも行かないな」

武器を持っていても、多勢に無勢で押し切れると踏んだのだろう。一斉に飛び掛ってくる。

少女を背中にかばうと、騎士は剣をなぎ払う。三人同時に顔から血を吹いた。

「もつと深く切り込んでいれば命はない」

淡々とそう言っただけだ。無傷だった背後の二人はそのまま後ずさる。

剣ごときと舐めてかかっていたが、実際に流れる血を見て怖気づいたのだ。

「うせろ」

脱兎と言っ言葉にふさわしく男達は駆けさつていった。

へなへなと地面に蹲る少女を騎士は抱き起こした。

「大丈夫か、名前は？」

「ミリエル」

掠れた声でそう答えると、ミリエルは何とか立ち上がろうとあがいた。

「無理をするな、お前なら軽いから、これから宿屋に連れて行つてやる」

そう言っ少女をまず馬に乗せてから、自分も馬にまたがった。

「荷物は、これだけか？」

黒鞆を持たせてやると、ミリエルは安心したように微笑んだ。

「ミリエル、私はマルガリータ・ツェレと言う。宿に着いたら事情を話してくれ」

振り向くとミリエルは非常に微妙な表情をしていた。

「有難うございます」

礼を言っその顔も引きつっていたが、深く考えないことにして、マルガリータは馬を進めた。

地図の読めない女

山間のひなびた村にパーシヴァルは来ていた。

この村の織物がサヴォワ特産で、西大陸でもかなり高位に愛好者が多い。

そのため、内乱の影響もこの村では、あまり関係ない。せっかくの特産品を潰して、後々の後悔の種にしないため、ここはサヴォワでも数少ない休戦地帯だ。

そこに、サフラン商工会サヴォワ分支局がある。

特産品の精緻を極めた織物を優先的に手に入れるために、わざわざ住み着いたのだ。

そこに陣取って一週間、パーシヴァルはミリエルを待ち続けた。

「なんだか心配になってきた」

「やっとか、やっとなのか？」

相棒の騎士がパーシヴァルに突っ込んだ。妹が行方不明になって一週間目でようやく心配になるってどういう神経してるんだ。

家主は、どこか複雑そうな顔をして、呟いた。

「まさかとは思うが」

パーシヴァルは後を聞こうとした。

その頃ミリエルは、豚の臓物と豆のスープをかきこんでいた。

あまりのがつつきようにマルガリータは茫然としている。

「有難うございます。こんなまともなご飯、どれくらいぶりでしょうか」

目に涙まで浮かべるミリエルに、むしろいたたまれないものを感じて、マルガリータは、無言で頷く。

ミリエルの着ていた服は洗濯するため脱いで、今ミリエルは、マルガリータから借りたシャツ姿だ。助けてくれたお礼に、マルガリー

「タの分まで選択させてもらうと申し出て、二人分の衣服が、灰を溶かしたぬるま湯に浸っている。」

「あの、灰を入れたら余計に汚れないか？」

「何言ってるんですか。石鹼だって灰を入れて作るんですよ、灰は立派な洗剤です」

そう言っ てミリエルは、付け置きしておいた洗濯物をもみ洗いしはじめた。

「今までどうしてたんです？」

「宿屋の女中に宿代上乘せで、やってもらっていた」

一人分の洗濯で、なんて無駄なとミリエルは呆れた。

「ミリエルはどうしてあんなことになっていたんだ」

聞かれて、ミリエルはとっさに出た自分の言葉に悶絶しそうになる。

「私、人攫いにあつて、やっと逃げてきたんです」

どこの世界に、旅行鞆片手に誘拐される準備のいい人間がいるんだ。と自分で自分を突っ込んだ。

基本的に嘘ではない。しかし嘘臭く聞こえることは間違いない。

しかし、マルガリータはそのまま流した。

「それで、家はどこだ」

そう言われて、正直にサン・シモンのグランデだと答えた。もちろん、近隣諸国に、グランデの治安のよさは知れ渡っている。しかしそれも流された。

「ずいぶん遠くから来たんですか」

サン・シモンの治安の良さを知らないと言うことはそう判断するしかない。マルガリータが答えたのは、東の端にある国の名だった。ミリエルは濡れた手を拭いて、地図を指す。そして現在地を聞いた。

そしてミリエルはその場にへたり込みそうになった。

ミリエルが目指す村は、最初に地名を確認した場所から、歩いて三日ほどの場所にあった。そしてミリエルは、一週間、反対方向に

歩いていたのだ。

「まさか」

ミリエルの背筋に冷たいものが走る。認めたくはない、認めたくはないが、もしや自分は方向音痴だったのでは。

ミリエルはグランデの街をほとんど出たことはなかった。たまに知らない場所に行くときはいつもダニールとアマンダが一緒に、その事実を今まで自覚することはなかった。

しかし、初めての一人歩きでこの失態。ミリエルは地の底まで落ち込んだ。

パーシヴァルは目を瞬かせた。

「地図を読めない？」

「オリエンテーリングをやった時にな、三回に一回は反対方向に進もうとして周りの子達に止められてたらしい」

決まり悪そうな顔で、家主はそぼそと答える。

きちんと方角を見定めることができるのに、どうしてと、みんな不思議に思っていた。

「努力すれば何とかなれると思うが」

その努力をする機会がなかったと。

パーシヴァルは深い溜息をついた。

地図の読めない女（後書き）

灰を入れて洗濯は、古来日本で広く行われてきました。

それ以外ではみかんの煎じ汁ですね、石鹼を作るのに灰を入れるのは昔の話で、今は合成アルカリを使っています。

王太子妃の憂鬱

洗濯した服が乾き、ミリエルがようやく人心地付いたときには、マルガリータに拾われて、半日が経過していた。

その際、マルガリータが着替えるのを見て、間違いなく女性だと確信した。

長い黒髪を後ろでくくったきりの化粧けのない顔。その容姿は平凡と言うには少々いかつきつい印象だ。そして鍛えてみっちり筋肉の付いた体型も女性らしさとは程遠い。

もともとミリエルも、筋肉に食いつぶされて、胸は平均よりかなり小ぶりなのだが。

「昼は、届けてもらったけれど、夕食は下の食堂で食べるか？」

そう問いかけられてミリエルは、こくりと頷いた。

「あの、一つ訊いていいですか？ マルガリータ様は、どうしてお国から出られたんですか」

おずおずとしたミリエルの問いに、マルガリータは面倒くさそうに答えた。

「私には、似ても似つかない姉がいてな。ずいぶんと美貌を誇った女で、その美貌を武器に、王太子の愛妾になった」

王太子の呼称にミリエルの肩がびくついた。

「で、今は王太子を誑かし、国を傾けた毒婦と呼ばれている。そんな女の妹として、国許にいるのは身の破滅だからな、それで逃げた」

王太子の愛妾となれば、貴族以上の身分。つまり信じがたいが、マルガリータは貴族のお嬢様と言うことになる。

「ええとそのとこ詳しく教えてもらえますか、確か」

ミリエルは国名を口に乘せる。そして確かその辺で政変が起こったとかごたごたしたと言う話を聞いたことがあるのを思い出した。

「もともとの発端は隣国がもう一つ向こうの隣国と戦争になったこ

とだ。その時前後して王太子妃が嫁いできたんだが、本国がそんな状態で、影が薄いというか、周囲の人間に無視されると言うか、王太子本人も王妃を同行するべきところで姉を連れ歩いている始末で、ところが事態が動いたんだ」

そこでマルガリータは言葉を切る。

「王妃の母国が戦勝国になって、隣国を併呑した」

その話なら知っていた。近隣まれに見る大事件になったと商工会本部で大騒ぎになったはずだ。

ミリエルはほんの半年前の喧騒を思い出した。

「その直後だが、王宮で洗濯女が大怪我をした。その大怪我と言うのが階段から転げ落ちたと言うものだったが、階段に油が塗られていた。そして、王太子妃が、その階段を通って早朝の散歩に行く習慣だった」

洗濯女は、洗濯物がクッションになって一命を取り留めたとか。

「そして、わが祖国と王太子妃の母国の会談で王太子妃は自国の大使に救いを求めたんだ。このままでは殺されると」

マルガリータは思い出す。その時、近隣諸国の賓客も大勢いた。

その真ん中で、王太子妃が、このままでは殺されると叫んだのだ、結構な大事になった。

「まあ、それで、洗濯女の事故とか、姉が毒薬を購入した事実とか、色々と呼ばれて、王太子夫妻は離婚、わが国はとんでもない恥をかいたわけだ」

ミリエルとしても口が挟めない。

「それに今までの王太子妃の悲惨な生活も取りざたされて、なんでもベランダに食べられる植物を繁殖させて飢えをしのいでいたとか、毒殺を恐れてねずみを飼っていたとか」

そして王太子は、すべてマルガリータの姉、マルグリットに責任を押し付けたらしい。もっともそれは、隣国の王太子妃の親族に蹴された。

「たかが男爵令嬢が、王太子妃に攻撃できるはずがない。それをし

たというならば、相応の身分の後押しがあつたからだ、まあ、王太子の逃げ得は許さないという姿勢を貫いてくれたのがせめてもの救いか」

話についていけないと思つたが、ふとミリエルは思う。洗濯女の事故は妙に都合がよすぎないかと。まさか、とミリエルその国の王太子妃に疑いを覚えた。

「まあ、それで父は失脚、まああの姉に誑かされる程度の男に望みをかけたのが馬鹿だったとしか言いようがないな、状況が変わったときの掌の返しっぷりといい、その程度の男だった」

ふと自分の鞆の底に隠した指輪の事を思い出した。ミリエルがサヴオワの王太子と婚約した証。

ミリエルは、身につまされると言つのはこういう状況かとしみじみと思う。

「王太子妃と言つのは」大変な仕事なんですね」

今まで忘れていたレオナルドのことを思い出す。ずいぶんあっさりと自分との結婚を了承したが、女はひとりじゃないしとか言つて別の女囲つてんじゃ。

むくむくと不信感がこみ上げてきた。

王太子妃の憂鬱（後書き）

ラスト、ミリエル理不尽ですね、可哀相なレオナルドは次回に出
ると思います。

婚約者達の苦悩

レオナルドは一人で食事を取っていた。向かい側に坐るのは、ドレスを着た人形。

王太子の婚約者ミリエル・アレクト・リンツァーの行方不明は当座隠されることとなった。

ごまかしのため、ミリエルに似せた人形を使う。或いは背格好の似た少女にベールを被らせる。そうしてきたがそろそろ限界ではないかと思う。

パーシヴァルは、サヴォワに母方の祖父の知人がいるのでそちらに逃げ込んでないか確かめてくるといって出て行った。

パーシヴァルはミリエルが自力で逃げおおせたと信じているようだ。

しかし、レオナルドには信じられない。あのか弱そうな少女がどうやって自力で逃亡したと言うのだ。

レオナルドの考えでは、サヴォワの覇権を狙う自分以外の二人、ミリエル誘拐を試みたのは、父の弟であり、最初に反乱を起こした大公であることはすでに調査済みだ。

それ以外の従兄弟か、それともそれに順ずる貴族が、ミリエルを奪い取ったのだと。

ミリエルの消息が知れないことは、今も秘密だが、いずればれる。いやすでに水面下では広がりつつあるかもしれない。

だから自分は、ミリエルがどこにいるか一刻も早く探り当て、救いに行かねばならない。

焦燥がレオナルドの胸を焼く。

婚約式の折、彼女は一度も笑わなかった。ただ、自分は王族としての教育を満足に受けていない、それでもいいのかといった趣旨のことを真摯な言葉で語った。

いや、それはレオナルドに問いかけるといふより、彼女自身が不

安だったのだろう。

「そんなことに今頃気付くとはな」

苦いものを飲み下す。どれほど後悔しても足りない。どうして自分はあの馬車と一緒に乗っていなかったのか。

彼はフォークを置いて、顔を覆う。

少女に無事でいてほしかった。リンツァーの援助の件を置いても。

その頃、ミリエルは、パンと煮物という実質的な食事を取っていた。

マルガリータと差し向かいで、黙々と食べている。

「本当に美味しそうに食べるな」

ミリエルは満面の笑顔で答える。

「だって本当に美味しいですし」

ミリエルにとってはこれがまともなご飯だ。もちろんアママンダの愛の保存食はありがたかったし、山でしとめたウサギや山鳥も美味しくいただいたが。やはり手をかけた煮物は美味しい。

そして、王宮や離宮で食べたあの味は美味しいけれど、喉に詰まる豪華絢爛な宮廷料理。あれを食べている間、実家の食事がどれほど恋しかったか。

肉がまばらに入った野菜の煮物。これこそ人間の食べるものだとミリエルはこぶしを握って力説したかった。

「まあ、国許が出るまで、こんな宿屋や食堂に入ったことなどなかったからな」

ミリエルは、芋を噛みながら頷いた。確かに、こういう飾り気のない食堂に貴族のお嬢さんは来ないだろうなと。ミリエルにとっては、祖父がよく利用する居酒屋に似た雰囲気なので居心地がいいのだが。

そんな二人の横に唐突に誰かが坐った。この手の店では勝手に相席など珍しくもないので、ミリエルはわれ関せずとパンをかじりつづけた。

「久しぶりだなツエレ」

その言葉に思わずミリエルは顔を上げる。

「なあツエレ、これはお前の連れなのか、ずいぶん毛色の変わった連れだな」

「今日拾ったばかりだ」

そうやってマルガリータと会話する男は、やせたいかにも気性の粗そつな目をした中年男だ。刈り込んだ髪がサン・シモンの軍人を思い起こさせた。

「拾ったか、ずいぶん余裕だな」

男は小ばかにした顔でマルガリータを睨む。

「これだからお貴族様上がりは嫌なんだよ、といってサン・シモンの狂犬もごめんだが」

ミリエルのこめかみにピシッと青筋が浮く。

目の前の皿を男の頭にたたきつけたい衝動を必死にこらえる。

「まったくこんな耳寄り情報も知らずにこんな小娘を拾うとは、間抜けもいいところだ」

耳寄り情報、その言葉にマルガリータが身を乗り出す。

「王太子が帰国した。花嫁を連れてな」

思わずミリエルは身を引いた。

「ところがその花嫁が行方不明になっちまった。王太子側は必死に隠しているが、見るものが見ればばれちゃったことだ」

ミリエルは更に身体を男から離す。

「リンツァー王家のお姫様、この身柄を巡ってひと悶着ありそうだな。今のところ、どの勢力がお姫様を握ってるのか、わかっているのは王太子のところにはないってことだけだ」

ミリエルの血の気が加速度つきで下がっていく。

ミリエルは自分のうかつさを呪った。うっかり本名のミリエルを名乗ってしまった。こんなことになるかわかっていたらアマンダと名乗ったのに。後悔しても後の祭りだ。

「まあ、騒ぎの中心になるだろうな、そのお姫様は」

ミリエルはいつそ殺せといたくなった。

婚約者達の苦悩（後書き）

レオナルド、哀れです。そしてミリエルも事態の重大さがやつと飲み込めたようです。次回はサヴォワの勢力争いの説明になります。

王太子妃殿下の値段

男は滔々としやべりだす。ミリエルは耳をふさぎたい衝動をこらえて、その言葉に耳を傾ける

そもそも内乱の始まりは、十年以上前、サヴォワ王の暗殺からだった。その首謀者は、王弟ルド大公。そして新王の名乗りを上げようとしたが、それを阻んだのが、王の姉の産んだ子供達。

そして王の長男王太子レオナルドは母の母国リンツァーとサヴォワを行ったり来たりしながら、ヒットアンドウェイ戦法で、内乱を止めようとしているが、いかんせんこの中で一番の若年、経験のなさ否めない。

内乱は各地で小規模ないさかいが起きる程度だが、それは今のところと言う注釈が付くだろう。

王の姉の子供達とはかく。ルド大公と王太子、この二人はどちらがどちらの喉首を搔つ切るかと言うところまで行かなければ、内乱は終わらないと言うのが、サヴォワならびに近隣諸国の予想だ。

そして、それに各貴族が、あつちに付いたり、こつちに付いたり、はては、王家を断絶させて新王家を作ろうという騒ぎになったり、収拾が付かないとはこのことと誰もが言う。

そこに降って湧いたリンツァーから来た花嫁だ。その花嫁について、この花嫁を得ればサヴォワ覇権に有利だと言う噂が流れ、どこに花嫁がいるか、誰もが鵜の目鷹の目状態だとか。

目の前にいますよ、と言ってやろうかとミリエルは思う。

「そのお姫様がどこにいるか知ってますか」

ミリエルは素知らぬ顔をして聞いてみた。それに笑って男は答えた。

「知ってたらとつくに搔つ攫つて、どこに売りさばこうか算段するよ」

ミリエルの目が据わる。

「お姫様ってどんな顔をしてるんでしょうね」

「さあ、肖像画もないらしいからな」

もちろんだそんなもの描かせた覚えはない。

「どうかしたのか、ミリエル」

名前を呼ばれて肩が跳ねる。ミリエルという名前は知れ渡っているのだろうか。

「いえ、何でも」

「そういえばこいつどこで拾ったんだ」

男が気のない顔で、尋ねる。

「この近所だ」

そう言っミリエルを拾った場所を具体的に話すと。いつそうつまらなそうな顔になる。

「いくらなんでも一人であの距離を歩けるわけがないよな、それに女の足じゃ早すぎる」

ミリエルは安堵の息をついた。母と祖父に感謝の祈りを捧げたい気分だ。男は普通の女の子の脚力を基準にして考えたらしい。

山岳訓練や、軍事教練を受けているミリエルにその基準は当てはまらない。

「で、お前さんの出身はどこよ」

嘘をつくわけにはいかない、ミリエルは正直にサン・シモンのグランデだと答えた。

「人攫い？」

やっぱり知っていたか。とミリエルは臍を噛む。

「サヴォワについてから、あの、おじいちゃんの知り合いを訪ねてきて」

ミリエルは冷や汗をかきながらごまかした。

パーシヴァルはとりあえずその村から出ることにした。

「もし、ミリエルが来たら連絡を」

そのための連絡先だけ残して。

波打つ金髪を軽く振る。そして馬にまたがった。

「後で、適当なのをあの村に派遣しておいてくれる。ミリエルを送迎できるように」

「どこに行っちゃったんだか」

騎士はパーシヴァルと並んで馬を進めながらぼやく。

「このまま見つからなかったらどうする」

「その時はその時、まあ、あの子ならどこでも生きていける気がするけどね」

パーシヴァルは薄く笑う。

「どっちでもいいんだな、あんた」

ミリエルが、この国の王妃になろうと、或いはどこかで身を潜めて暮らそうと。

「このままミリエル・アレクト・リンツァーが死んだことになるまで、隠れてるかもね」

そうすれば、サン・シモンで新しい戸籍で生きていくこともできるかもしれない。

「最終的に、決めるのはあの子だ」

パーシヴァルはきっぱりと言う。

「レオナルド王太子殿下に、なんて言うんだ」

「今は待つしかないって言うさ、正直にね」

賭けをしましょう

粗末な宿屋の一室で、ミリエルはベッドのシーツを整えていた。宿代から食事まですべてマルガリータが出しているので、簡単な雑用ならできるといつてベッドメイキングを引き受けたのだ。

マルガリータの外套にブラシをかけたり、朝起きたときの洗顔用にタオルを用意したりといったこまごまとした仕事をしているミリエルを見ながらマルガリータはしみじみとやっぱり自分は貴族のお嬢様なんだと思っていた。

ミリエルがテキパキとこなしていく雑用のこなし方すら最初はわからなかった。

「ミリエル、そうして雑用をこなしてくれると私はとっても快適なんだが、その快適すぎるのも困る」

唐突に言われて、枕を叩いていた手を止める。

「実際、貧乏でもうちは男爵家で、だから子供の頃から女中がいて家の雑用はすべて女中がこなすという生活をしていたから、ミリエルがそうしてくれるのはありがたい。だが、もう私は本国を出て、男爵令嬢と言う肩書きももうないも同然の身で、だから、そういうことも自分でできないといけないと思うわけだ」

ミリエルはしばらく考え込むしぐさをしていたが、ポンと手を叩いた。

「それなら、私がやり方を教えますので、覚えると言っるのはどうでしょう。別に難しくありませんよ」

ニコニコ笑ってミリエルが答える。

「そうだな、教えてもらえばいいんだ」

マルガリータはミリエルに笑い返す。

「ミリエル、実はさっきの男、クライストというんだ、まあ、サヴオワに来る以前、別の国のごたごたで知り合ったんだが、あの男の言っていた親王太子派の貴族のところに身を寄せようと思う。ミリ

エルはどうする？」

王太子派の貴族、声に出さずに唇だけでその言葉を弄んでみる。

「まあ、結局私の貴族根性は抜けないということだ、正当な王太子と言ふ言葉は私の中では結構重い」

マルガリータの言葉を聞き流しながら、ミリエルは、今後と言うものを考える。

祖父が印を付けてくれた場所は三つ。一つは織物工房のある村。もう一つは、サヴォワの特定の鉱石を使わねば出せない色の磁器を焼く工房のある村。そして、サン・シモンから、カティン商会直轄販売店のある町。

どれもこの村から行くのには、十日前後見なければならぬ。そのため路銀も心もとないし、また道を間違えたら目も当てられない。あの場所から逃げるために宝石類をおいて来たのは後悔していない。何故ならミリエルの年齢では、換金することができないからだ。換金できないのであれば、ただ重いだけとさっさと捨ててきた。後は、アマンダの心遣いのへそくりが少々。心細い限りだ。

マルガリータについていけば、そのうちレオナルドと出くわすかもしれない。

今、ミリエルは、レオナルドに会いたいのか会いたくないのか、迷うばかりだ。

「あの、私も着いて行っていいですか？ 私精一杯働きますから」
ミリエルは迷いながら決めた。賭けをしようと、もし、下働きの格好をしたミリエルをレオナルドが見分けたら、その時は覚悟を決めて、婚約者に戻ろう。もし見分けられなかったら、その時は、永遠にお別れしようと。

ならばマルガリータとともにその貴族の場所に赴きそこで、レオナルドを待とうと。

「だめですか？」

マルガリータは苦笑する。

「しばらくは私の女中でいいか、それから、給料は出すから、行き

たいところができたら言え、送ってやる」

いいのだろうか、ここまで親切に甘えて。ミリエルは申し訳なく
思いながらマルガリータの言葉に頼ることにした。

焦燥とそれ以外のもの

騎馬で肅々とパーシヴァルは進む。

「思うんだけどね、偽ミリエルを仕込むのは僕達だけだろうか」
背後の騎士に尋ねる。

「偽ミリエルといいますと？」

「ミリエルはさ、肖像画も出回っていないし、容姿に対する情報がほとんどない。だから簡単にどこかその辺の女の子を連れてきて、この子がミリエルですよって主張すれば、それで通るんじゃない」

「兄の貴方の眼をごまかしてですか？」

「僕が鑑定できないようにすれば時間は稼げるよね？」

言われた言葉に騎士は息を呑む。

「つまり閣下のお命を狙うやからが現れると言うことですか」

「こうなってくるとそれも警戒しなきゃだめかな」

パーシヴァルは馬を操りながら、そんなことを呟く。

「もちろんこちらにミリエルが帰ってくれば話は別だ。命を狙われるのはあの子だよ」

くすくすとはががおかしいのか笑っているパーシヴァルを気味の悪いものを見るように騎士は凝視する。

「だって笑えないか、襲った奴が可哀相だ」

ミリエルの戦闘能力は今のところ知られてはいない。ある意味究極のブービートラップといえそうだ。

「それであなたはどうするんです」

「どうもしないよ、頑張るのは君達だ」

あっさり言われて目が点になる。そう、戦闘能力皆無の彼が死角に襲われた場合、相手をするのは自分の役目だ。

つまりこれから過酷な目にあうのは間違いなく自分だと言うことで。

真剣に業務放棄を考えなくなった。

さして大きくもない館の一室に、レオナルドは滞在していた。前王への忠実さだけがとりえの領主の館だ。

彼自身はさして権力を持っていない。そして財力はそこそこの程度。武力皆無。

だからこそ、隠れ蓑に使うには有効な相手だった。

今この館にいるのは、彼と十人ほどの忠実な騎士。そして、ミリエルのドレスを着させられた下働きの少女だけだった。

秘密ルートで届けられた手紙を確認している彼のもとに、パーシヴァルの帰還が告げられた。

パーシヴァルと、護衛の騎士二人だけがレオナルドの元に戻った。「ミリエルはまだそこにたどり着いていなかった。念のため人を駐在させることにした。それと、いざという時頼れと祖父が手配した場所は後二箇所ある。そこにも人を派遣しておく」

パーシヴァルの顔にさして焦燥の色はない。

「俺の情報網に、ミリエル姫に関するものは一切ない。叔父あたりがミリエル姫を手に入れたら、盛大に騒ぎそうなものだが」

「君の叔父さんて、確か五十に手が届くよね、それが十五の女の子をどうしようって言うのかな」

リンツァーにいたころに入って来た情報に寄れば伯母は先年亡くなったそうだった。

「それでミリエルと再婚？ 冗談じゃないよ、あの子だって嫌がるだろう」

ミリエルがリンツァー国王の頭蓋骨を割るのを断念したのは相手がレオナルドだったからと言うのもあるだろう。その叔父あたりに嫁に行けと言っていたら確実に、頭蓋骨どこるか折れる骨のすべてをへし折りかねない。

「しかし、それならミリエルはどこに行ったんだ」

「まだどっかの山の中に潜伏してるのかも」

パーシヴァルとしては一番ありそうなことを行っただけなのだが、レオナルドはきつい目で彼をにらんだ。

「君は存外薄情なんだな、仮にも妹がそんな目にあつて、どうしてそんなに平然としていられるんだ」

「ここで泣いても、何にもならない。無駄なことはしない主義だ」

パーシヴァルはきつぱりと言い切った。

「打てる手は打った。今できることは待つことだけだ、それじゃ、君のために軍隊を仕立ててくれる人と頑張つてやり取りしなよ」

レオナルドは拳を握り締めたまま俯いた。

食事の合間（前書き）

マルガリータとミリエル、出るたんびに何か食ってる。

食事の合間

かぼかぼと蹄が鳴る音がする。ミリエルの前方を行くのは二頭の褐色の馬。そしてミリエル本人は、灰色のロバにまたがっている。

ロバなら安いからとマルガリータが買ってくれたのだ。いったいこの人の経済観念はどうなっているのだろうとミリエルは真剣に悩んだ。

お金に関しては、マルガリータは裕福だ。何故なら王太子の寵姫だった姉に仲介してもらおうと、妹であるマルガリータに様々な高級品を献上したものが相当数いたらしい。

マルガリータ本人は、みそつかすと蔑まれ、館に引きこもって剣や武術の腕を磨くしかすることがなかったので、その高級品は使われないままマルガリータの私室に死蔵されていたと言っわけだ。

袋に無造作に詰め込まれていた宝石の数々を見てミリエルは絶句した。

そしてマルガリータに、もう二度とこんなうかつなまねをしてくれるなど説教をする羽目になった。

しかし、あのマルガリータをもってして、経済観念がないといわれる彼女の姉、マルグリットっていったい。

ミリエルは背筋に冷たいものが走った。できれば一生その顔は見たくない。

前方には、マルガリータと併走するクライスト。あっちこっちで傭兵働きをしているらしいが、そもそも傭兵と言う職業が成り立ちにくくなって久しい昨今。どういう素性の人間なのだろうと。ミリエルは観察してみる。

傭兵と言う職業に偏見はない。ミリエル本人も、兼業とはいえ、自分は傭兵だと思っているし。先祖は傭兵王だし、そしてサフラン商工会も、傭兵部門は完全に削除したわけではなく。近隣諸国がきな臭い状況になれば、そこで一稼ぎをもくろむものもそこそこいる。

クライストの行っていたサン・シモンの狂犬というのは彼らのとだろう。

とりとめもない思考がだんだん更にまとまりにくくなる。

原因はロバの鞍に乗せたお尻だ。かぼかぼと蹄がなるたびに鈍痛が走る。

これは歩いたほうがましだったか。

ミリエルは街っ子で移動手段は徒歩か乗合馬車。ロバにも馬にもほとんど乗ったことがなかった。王宮にいるとき、貴婦人のたしなみと言われ、横乗りの練習もしたが、それも三十分も乗れば終了だった。

もう二時間乗りっぱなしだ。

「休憩にしようか」

マルガリータの言葉が、ミリエルにとっては天からの救いに思えた。

マルガリータが軽々と馬から降りると、クライストもそれに続く。ミリエルもロバから降りようとして落ちた。

地面に突っ伏ししばらく動けない。

「ミリエル、辛いのは今だけだ、尻は、案外神経が少ない部位だからじきに麻痺する」

「すいません、まったく救いになりません」

ミリエルは泣きそうな顔で、よろよろと立ち上がった。

「それじゃ、食事の支度をさせていただきます」

ミリエルは、そう言っただけで宿屋の調理場であらかじめ作っておいた保存食を取り出す。

小麦粉に卵と水、塩を混ぜて練り上げ、薄くのし、細く切った麺を油で揚げて水分を飛ばしたものだ。

サン・シモンではおなじみの保存食だった、東大陸から伝わったらしいという話は聞いていたが、その真偽は確かめたことはない。

そのまま食べてもいいし、熱々のスープに投入すればそれだけでふやけて腹にたまるので、満腹になる。

マルガリータはミリエルの作業風景を興味深げに、見守っていた。ついでに宿屋のお上も舐めるようにミリエルの作業工程を凝視していた。後で再現して店に出すつもりらしい。

「何とか黒獅子に連絡を取って、うまく売れるかもしれない」

思わずサフラン商工会幹部の孫娘としての思考にはまりそうになるのを抑える。

「実は楽しみだったんだ、油で上げている時実に美味しそうな匂いがしたから」

嬉々として、ミリエルが袋から取り出したそれを口に運ぶ。

ぱりぱりした歯ざわりが楽しい一品をマルガリータは賞味する。

マルガリータの食べているものを見てクライストは嫌そうに顔をしかめた。

「それ、俺はいらない、サン・シモンの狂犬どもを思い出す」

狂犬の言葉にミリエルは反射的に攻撃しそうになったが、腰の鈍痛で、つんのめるのみに終わる。

「いったい何があったんだ」

保存食の入った袋を大事そうに抱えたマルガリータが尋ねる？

しかし、クライストは顔を背けるのみだった。

食事の合間（後書き）

ここに出てくる保存食は、中国の伊麵というものです、たぶん。うる覚え。

作り方はほぼインスタントラーメンと一緒に。食べ方も一緒です。揚げてないものは卵面です。

ミリエルメイドさんになる。

三日後、ミリエルたちは目当ての建物に着いた。

マルガリータとクライストがその館の領主と呼ばれる人間に、なにやら紙を渡していた。

紹介状らしい。そういえば、知り合いが黒獅子のところで似たようなものを渡されていたなとミリエルは記憶を探る。

ミリエルといえば、二人の影に隠れるような形で立っていた。ロバの鞍のダメージからまだ立ち直っていないのだ。

ジンジンと痛む腰は立っているのがやっとだ。

「それで後ろの娘は何だ」

小柄で華奢な少女を不審そうに見る。ミリエルはとても傭兵には見えない。

「私のメイドです」

マルガリータがきっぱりと答える。

「メイド？」

そりや不審がるだろう。メイド連れの傭兵など聞いたことがない。

「ああ、男爵家の出だから」

領主は、妙な納得をして見せた。ミリエルは表情を動かさないようにするのに苦労した。

男爵家なら、メイド連れで従軍ってありなのかと驚愕を押し殺す。

「しかしだ、あなたの世話だけで遊ばせておくわけには行かない。

早朝の掃除には参加してもらう。あと庭の草むしり」

厳しい目でミリエルを睨みながらそう言われて、ミリエルはにっこり笑って答えた。

「はい、わかりました領主様」

以前メイドの真似事をしたとき習ったことが役に立った。

「制服は貸与する」

それはミリエルにとってありがたいことだったので笑って受け取

ることにする。

「それでは、部屋に案内する、ああ、その女中は、この館の女中部屋だ」

そこで女中頭と引き合わされ、ミリエルは、決まった時間、館の雑用をこなし、それ以外の時間はマルガリータの面倒を見るように言われた。

そしてミリエルにあてがわれた部屋は、小柄なミリエルがろうじて横になれるだけの小さな寝台と、その寝台より狭い空間。扉を開けてそのまま寝台に飛び込めそうな狭い部屋だった。

まるで物置に寝るようだと思ったが、女中の扱いならそんなものだろうとあつさり割り切る。一人部屋なのありがたい。なにより、寝台で寝られる。

刈った草を積み上げて寝る場合、妙に身体のバランスを崩すのだ。ミリエルは、自分の鞆を寝台の足元にある棚に片付ける。棚がぎしぎしと軋んだ。

どうやらモーニングスターが重いようだ。

お仕着せのメイド服を調べてみる。黒い簡素なワンピースだ。それに定番の白いボンネット。

鞆からモーニングスターを取り出して、メイド服に取り付ける算段をする。

幸いスカートはたつぷり布を使っているので、隠すスペースには困らない。

そして、鞆の隠しポケットの中の指輪をミリエルは今日はいじめて取り出した。

他の首飾りや、イヤリングと一緒に捨てていこうかと一瞬迷った。しかし、それをハンカチで包んだとき自分は何を考えていただろう。薔薇の花の形をしていて、花芯のある位置に、赤い宝石が嵌まっている。

そういえば、この指輪を初めて嵌めた日、自分の装身具もすべて赤い宝石で統一されていたのを思い出した。

ミリエルは、メイド服に着替え、指輪はハンカチでくるんだあと、紐でぐるぐる巻きにして、首にかけて服の下に隠すことにした。

もう鞆を肌身離さず持つて歩くことはできないからだ。そして自分の部屋の外に出ると、何故か物凄く見覚えのある顔を見てしまった。

ミリエルメイドさんになる 2

たまたま廊下を歩いていたのだろう。彼は、ミリエルを不思議そうに見下ろしていた。

「お前、急にいなくなっと思ったなら何でこんなところに？」

あまり表情の動かないウォーレスがミリエルに詰め寄る。

しかし驚いたのはミリエルも同じだ。

「お願い、聞かないで、それと、あたしが知り合いだって誰にも言わないで」

ミリエルはウォーレスの腕にすがってそう訴える。

「わけありか？」

言われてミリエルはぶんぶんと首を振る。

「でもウォーレスは何でここにいるの」

「決まってるだろう、出稼ぎだよ」

商人兼傭兵として働く人間はサフラン商工会では珍しくもないが、ウォーレスが、傭兵として働いていたことはミリエルはあまり聞いたことがなかった。

無論、サフラン商工会最強の男として、傭兵働きすれば、相当稼げることは、間違いない。

「黒獅子のお達しだよ、黒獅子はサヴォワ問題で王太子に味方するつもりらしい」

その言葉にミリエルのこめかみに冷や汗が浮かぶ。

まさかと言う声が聞こえる、しかし、おそらくという声のほうが強い。

黒獅子アルマンはミリエル、サヴォワ王妃就任をサフラン商会のビジネスチャンスと捉えた可能性が高い。

となれば、腕利きの洋平たちが、王太子レオナルドの下に集うことになる。

それもミリエルが、王太子の妃の地位にあればこそだが。

またか、と思う二度目ともなると怒る気にもならない。それはアルマンという人をよく知っていたからかもしれない。

ミリエルは、版図を広げる一方の額を持つ人間の臓腑をえぐる暴言を呟くと。ウォーレスに聞いた。

「サフラン商工会から何人来ているの」

「今のところ俺だけだ。まあ、様子見だな、そうそう人材派遣はしない」

ウォーレスの言葉にミリエルは考え込む。

「それはそうと、他人のフリヲしてほしかったんじゃないのか、このままだと誰かに見られるぞ」

慌ててミリエルは、ウォーレスから離れる。

そのまま、再び廊下を進む後姿を見送ったあと、ミリエルは女中頭に教えられた部屋に向かう。

数分後、ミリエルは、井戸で水汲みに精を出していた。

水汲みが終わったらその水で廊下の掃除。いちいちモップを手で絞らねばならないのが面倒だ。

サン・シモンなら、モップには、モップの水きり策付きバケツがあったのだが。そこまで考えて、ふとリンツァーにもそれはあったのだろうかミリエルは考えてみた。

おそらくなかったらう。王宮や貴族達にとって女中はさして気に留める存在ではない。そんな女中にわざわざ金を出して設備投資という便宜を図るはずもない。

「おそらく売り込んだとしても、買わないでしょうねえ」

ミリエルは溜息をついた。

水拭きが終わったら、乾拭き、乾いた雑巾で丁寧に廊下を磨く。

どうやらミリエルの仕事は掃除に限定されるらしい。飲食物を扱う仕事はさせてもらえないようだ。

当然の用心だとミリエルも思う。今、この館を取り巻く状況を考えれば素性のわからない人間に飲食物を扱わせるとしたら相当の馬鹿だ。

しかし、目に付いた限りでは女中の数は館の規模とあっておらず、ずいぶんと少ない。やはり秘密が漏れるのを恐れていたことだろうか。ミリエルはかがんだ状態から立ち上がり腰を伸ばしつつそう思案した。

ミリエルメイドさんになる 3 (前書き)

ついに五十話です、思ったより速いペースです。それでまだミリエルとレオナルドは再会してません。どこまで続くんでしょうね・

ミリエルメイドさんになる 3

女中頭は主に命じられた仕事をしていた。新しく入ったと言う少女の私物を探ることだ。

少女の持ち物は黒い鞆が一つ、そして外套が一つ。

鞆の中に入っていたのは、袋に詰め分けられた保存食と思われるもの。そして、同じく袋の中に詰められたガラス玉。丸いものと楕円形のものが一つずつ。

替えの下着類が二枚。それを探っているうちに違和感に気付いた。一枚は何の変哲もない飾り気のない普通の下着、だがもう一枚は、明らかに貴族階級の間御用達の高級品だ。多少よれている気がするが、胸元に施された精緻な刺繍は、それが天井知らずの値段が付くことを何よりも雄弁に語っている。

すそに縫いこまれた繊細なレースの手触りは間違いなく絹。先ほど開けた袋の装身具かと思ったガラス玉と合わせて考えると、違和感はいや増す。

他には鞆に入ったナイフが二振り、しかし、それだけで怪しいと言いきれない。

以前にもナイフを持っていた娘がいたが、野外行動をとるなら当然の準備だと言いきられてしまった。

とにかく報告を、探ったものは綺麗に片付けて彼女はその部屋を後にした。

ミリエルは、拭き掃除を続けながら居心地の悪さを感じていた。はいつくばって拭き掃除をしていると、スカートの下に隠したモーニングスターがごろごろ転がりそうになるのだ。

明日からはモーニングスターは部屋の、ベッドの下あたりに隠しておこう。ミリエルはそう決心した。

その時、部屋を女中頭が漁っていたなどと、夢にも思っていない

ミリエルだった。

掃除が終われば食事を取る。食堂に行つて、二人分の朝食をもらつてマルガリータの部屋に向かう。

マルガリータの部屋は、ミリエルの部屋二つ分くらいの広さだった。

ミリエルにあてがわれた部屋が狭すぎるので、比較にはならないが、あまり優遇された扱いではないと思つた。

マルガリータはすでに着替えており、ベッドの脇に、椅子と腰掛と小さなテーブルが置いてある。その上に料理を載せて、マルガリータは椅子に、ミリエルは腰掛に坐る。そして食膳の祈りを呟いたあと、スプーンを手にとつた。

ブイヨンでみじん切りにした野菜と米を煮た料理だった朝食としては軽くていい。ミリエルは朝食前の重労働で消費した分を取り戻そうと、旺盛な食欲を見せた。

「マルガリータ様、これからの予定は何ですか？」

「とりあえず、鍛錬だな、他にも傭兵希望者がいるらしい。その連中と遣り合つて腕を証明しろと言われた」

マルガリータもスプーンを動かす合間に、答えるとあとは無言で食事に没頭する。

ミリエルが先に食べ終わると、根乱れたベッドに向かい早速ベッドメイキングを始めた。

手際よくシーツを整えるミリエルの手元を物珍しそうに見ていたマルガリータは、我に返つた。

「明日からそれは自分でやる」

「よろしいのですか？」

「見ていて、大体覚えた」

やると見るのは違ふんだけどミリエルは思ったがそれは口に出さないことにした。

「そうですね、がんばってください」

ただそう励ますだけだ。やってみなければ最初から始まらないか

ら。

「それはそうと、さつきクライスとが来たんだが、なんでも明日、ミリエル姫が、とある貴族に保護されていたのをここに連れて来るらしいぞ」

言われたミリエルが、思わず掴んでいたシーツごと崩れ落ちた。

ミリエルメイドさんになる 3（後書き）

別小説も掲載しました、ナギというタイトルです。古代を舞台にした歴史ものですので、少々硬いかもしれませんが。

ミリエルメイドさんになる 4

女中頭が、領主に、自分の仕事を報告した。

騎士の持ち物にはおそろしく高級な品物を入れた袋が合ったということ。そして、それ以外の不審物を見なかったと言うこと。

そして騎士の連れてきた少女の持ち物に、ナイフが二振り、しかし、旅の必需品かもしれないと言うこと。そして他の衣類とはあまりにかけ離れた高級な下着の事を報告した。

ガラス玉のことには触れなかった。少なくとも少女の身なりから違和感を覚えなかったから。

領主は黙って聞いていた。

もとより、女中頭に新しく来た者たちの荷物を調べさせるのは念のためとしか言いようがない。

どの道これで本当の間者など見つかるわけがないと思っている。

女中頭は、おずおずといった風に言葉をつむぐ。

領主はかっと目を見開いた風に自分を見る。其れが異様で、極力この部屋には寄りたくないのだ。

恰幅のいい体格、やや薄くなりかけた茶色の髪を短く刈り灰色の帽子で覆っている。

眼光炯炯としごつい鼻と分厚い唇が見るものに強烈な印象を与える。

いつも威圧感に押されそうになる。

「まあいい、今回の連中も異常なしだ」

しかし女中頭はまだなにか言いたそうな顔をしている。

「貴族に仕えていたメイドだろう。おそらく主人のもう要らなくなったものを失敬したんだろう、それよりもだ、明日、この館にミリエル姫が滞在する。姫をもてなすため、館を隅々まで磨き上げさせるように」

ミリエル姫の名前を女中頭は何度か聞いたことがあった。

国外に逃亡中の王太子の婚約者。この婚約によって、リンツァー王国の援助を王太子は得ることになる。そのくらいは。

「その、お部屋はどういたしますか」

「客間の一番いいお部屋を用意させろ、粗相があつてはならん」

女中頭は深々と頭を下げた。

女中達は、それぞれ持ち場について、掃除をしていた。

そろそろ秋ということで散る落ち葉を穿き集めていたミリエルにおそらくミリエルより少し年上と思われる女中が話しかけてきた。

「どこから来たの、あんた外国から来たって聞いたけど」

ミリエルはあいまいに笑って言葉を濁す。なんとなくこの館では、マルガリータの母国からつれてこられたという風に取りられている。

しかし、ミリエルはマルガリータの母国について、詳しいことは何も知らない。

細切れの情報はあがるが、元々すんでいた者からすれば知らなさ過ぎると言われるだろう。

「いいなあ、あたしも外国に行つてみたい」

その女中の慨嘆はミリエルにはいささか理解しがたかった。

ミリエルがしたくもないのに、隣国に強制送還された件はさておいて、元々サン・シモンは外国人に鷹揚なだけでなく国外に出て行くことにも鷹揚な土地柄なのだ。

外国帰りなどはいて捨てるほどいる。

「そういえばお姫様がこの館に滞在なさるそうだけど何でかあんた知ってる？」

それに関してはミリエルのほうが知りたいといひそうになった。

やって来るも何も、ミリエル姫はすでにここにいるのだ。

あの時、ちゃんと締め上げてればよかった。

ミリエルを誘拐しようとした連中をきちんと締め上げて情報を吐かすべきだったかとミリエルは後悔していた。

あの時は援軍が来ないうちにと気ばかり焦っていたのだがとんだ

手抜きだつた。

そんなミリエルの心中も知らず好き勝手なことばかり話す女中にミリエルは別の意味でこめかみに青筋が浮いた。

その少女は、五人ほどの女官に付き添われ、腰まで垂れるベールを被り、その姿を見せることを完全に拒否していた。

領主が跪いてその手に口付けたが、その表情はうかがい知れない。ミリエルは、同じく跪いてその姿を窺っていた。

ミリエルメイドさんになる 4（後書き）

強烈な顔をした領主ですが、ミリエルやマルガリータは動じません。
ん。

その程度のことです。驚くほど繊細じゃありませんから。

誰も知らない苦悩（前書き）

コンスタンシアさん、なかなか味のあるキャラになりそうです。

誰も知らない苦悩

今日からお前は死んだ。コンスタンシアは、唐突に父に言われた。窓から外を見れば黒い布をかけられた棺が、今まさに運び出されようとしている。

「今日からお前はミリエル・アレクト・リンツァーだ」
聞いたことのない名前、しかしその言葉を転がす父の唇は笑み崩れそうに見えた。

「レオナルド王太子の婚約者だ」

その言葉に耳を疑った。レオナルド王太子は、リンツァー国王の親族、ミリエル・アレクト・リンツァーという少女と婚約し、彼女を伴って、サヴォワに帰還した。ところが突然の襲撃にミリエルは行方不明。かなり高い可能性で死んでいると思われる。

「だからお前がミリエルになるんだ」

コンスタンシアの脳に、じわじわと父の言っている意味がしみこんできた。

父は自分を次代の王太子妃の偽者に仕立て上げようとしているのだ。

「お父様、もしばれたら私は死刑ですよ」

仮にも王太子妃を騙るなど、国家反逆罪に問われても、いや問われて当然だ。

「だが、王太子にも弱みがある。どうあってもミリエルと結婚しなくてはならない。さもないければリンツァーの援助は受けられない、そのミリエル姫を婚儀の前に不手際で死なせたとあれば、王太子はすべてを失う」

「ミリエル姫は本当に死んだんですか？ もし生きてたらどうするんです？」

自分が王太子の前にミリエル姫として立った後に、実は生きてい

たミリエル姫が現れたら、死刑だ、その場で首落とされても文句は言えない。

「それはない、私のあらゆる伝を探ってもミリエル姫を手に入れたものはいない」

情報網には自信を持っている父にコンスタンシアは溜息をつく。

どんなものにも穴はあるのだ。父の情報網が、貴族限定だと言うこともコンスタンシアはわかっていた。ミリエル姫が、もし貴族以外の商人などに保護されていたらと言う可能性は微塵も考えていない。

コンスタンシアは先ほどの空の棺を担いでいく光景を思い出した。まさか、いざとなったら自分も騙されていたと言いついて私一人を死刑台に送るつもりでは。

あまりにありそうな可能性に眩暈がした。

抵抗は無駄だ、これはすでに決定事項。コンスタンシアがいかにかに抵抗しようと、父は自分をミリエル姫だと王太子の前に押し出すだろう。

父が出て行き、その際に扉に嚴重に鍵をかける音がした。

今自分がいる部屋は最上階。窓から飛び降りれば自殺できる。

いつそそうしたほうがいいかもしれない。そう思っているにも窓枠を掴む手は震え、結局床にへたり込むことしかできなかった。

そして、王太子派の貴族の館に、コンスタンシアは連れてこられた。

上半身を完全に覆うベールを付けさせられて。

「どう思う」

その日の夕食は、わざわざ自分の皿を持ってクライストがやってきたので三人でとった。

そして無言で食事をしているそのときにクライストが冒頭の台詞を吐いたのだ。

「怪しいと思う」

マルガリータが一応返事をする。

ミリエルは偽者だとちゃんと知っていたがこの時は、無言を貫いた。

「そういえばお上ちゃんの名前もミリエルだったかな」

思わずミリエルは芋の煮物を喉に詰まらせそうになった。

「そうですね、紛らわしいので、私のことはミリーと呼ぶことにしませんか」

とつさに口に出たが、これはいいアイデアだとミリエルは自賛しそつになった。

やばすぎる本名を呼ばれる機会はなるだけ減らしたい。

「そうだな、紛らわしいな」

マルガリータもごく自然に賛成してくれた。

「あのベールは怪しすぎるな」

クライストは続けた。

ミリエルはあのベールの下はどんな顔をしているのだろうと空想してみた。

事態の動くとき

ミリエルはシーツの洗濯をしていた。

この館はずいぶんと女中が少ないのに、傭兵達は、少しずつだが確実に増えていつている。そのため人手は完全に足りない。

ミリエルは容赦なくこき使われていた。

シーツのような大物を洗濯するのは重労働で、ノルマの枚数終われば疲労困憊。しかし、それで休めない。更に銀器磨き、庭掃除、更に、自分とマルガリータの衣類の洗濯と、やることは腐るほどある。

マルガリータもこの館の人間があまりにミリエルをこき使うので抗議しようかと申し出てくれたが、ミリエルはそれでマルガリータの立場を悪くしたくないと断った。

洗濯したシーツをもう一人の女中と協力して絞ると干しに向かった。

それでもその日までは平穏な日々だったのだ。

手紙の蠟封を確認し、レオナルドは封を切った。

ミリエルを保護したと言う文面の手紙。そしてミリエルの身柄の場所も記されている。

「確かい」

背後から覗き込んでいたパーシヴァルが尋ねる。

「わからない。一応味方を名乗っている人物ではあるが」

手紙を片手にレオナルドは肘を付いた。

「ミリエルを照明する証拠はあるんだろうか？」

「それも書いてない、実際に行ってみるほかないだろう」

パーシヴァルは俯いていかにも言いにくそうに尋ねた。

「あの、君は女性の過去を気にするほうかい？」

唐突にわけのわからないことを言われ、レオナルドは怪訝そうに

振り返ってパーシヴァルを見た。

「実は、ミリエルは子供の頃大怪我をしてね、そのときの傷跡が今もすっかり残っているんだ。君はそれを気にするかい？」

「そんなことか、それくらい、別に」

「そう言ってくれて嬉しいよ、それじゃミリエルのドレス係の女官を連れて行けば万事解決だね」

言われた意味がようやく理解できた。その女官に、傷跡を確認してもらえば本物鑑定が簡単にできる。

「それはそれとして、マーズ將軍の軍が、その館を目指すらしい、我々はそれに合流する予定だ、君とその部下達も、同行してもらう」「来るなど言われても付いてくるつもりだったさ」

パーシヴァルはそう言って、手帳に書き込んだ事柄を確認し始めた。

「それでパーシヴァル、君はこの手紙にかかれたミリエルが本物だと思うかい？」

「もちろん、偽者さ」

にっこりと笑顔で断言して見せた。

「君は、ミリエルが見つかったてほしいのかほしくないのかどっちだ」「もちろん無事が確認できたら、それに越したことはないよ。でもこの場合は偽者の可能性が大だね」

「君は何を知っている？」

「それは内緒」

パーシヴァルはそう言って笑った。

遠眼鏡を持って館の物見やぐらに立った男は息を呑んだ。敵がこの館に押し寄せつつある。

彼は紐を引いた。物見やぐらの上にある鐘が盛大に鳴り響く。カンカンカン、カンカンカン。三度ごとに続くとき、危険が迫っているという符丁になる。

館の領主が、椅子から飛び上がった。そして館に集められた傭兵

達も、それぞれの武装をかき集める。

そして紛れ込んでいた傭兵も同じ行動をとった。

慌てて自分の部屋に戻り、ベッドの下のモーニングスターを掴む。それをスカートの下に装着すると部屋から出て庭に向かう。

ただ一人、非武装の傭兵、熊殺しのウォーレスが、悠然と佇んでいるのが見えた。

「今度は、今までの騒ぎとは違うぞ」

彼は独り言のように呟く。

「今日が初めての実戦だ」

ミリエルは、身内に戦きが走るのを感じた。だが、大きく息を吐くと、無言でマルガリータのもとに向かった。

肩透かし

マルガリータは剣を穿き身支度を整えた。そこにミリエルが駆け込んでくる。

「お前は、他の女中とどこかに隠れている」

しかしミリエルは首を小さく、横に振る。

「でも、私はマルガリータ様のメイドです、確かにこの館に人手不足解消のお手伝いはしましたが」

マルガリータは溜息をつく。

「ミリエル、ここは危ないんだ。お前がいたら足手まといだ」

しかしミリエルは動じない。

「足手まといにはなりません」

根拠のない自信だとマルガリータは断じた。

「他の女中達と一緒にいろ」

そのままミリエルをおいて、マルガリータは出て行く。

ミリエルが廊下に出ると、ミリエルと顔見知りになった女中達が泡を食って走っていくのが見えた。

ミリエルもそれについていくことにした。走っていった先には、女中頭が待っていて、この館の一番奥、ミリエル姫が使っている部屋の方に向かった。

ミリエルの見たところその部屋は、この館で一番立派な客間なのだろうが、それでも作り自体は簡素だった。

基準がリンツァー王宮なので、ミリエルの感想に誰も同意しないだろう。

そこには、デザインの違う衣装を着た女中達が手を取り合って震えていた。

「どうか、ここが一番奥まって安全な場所なのです、どうか私達この館の非戦闘員も匿ってください」

女中頭が床に頭を摩り付けんばかりに懇願する。そして奥の寝室から、相変わらず腰まで覆うベール姿のミリエル姫が現れた。

「わかりました、私はこの奥の寝室にいますので、あなた方はここにいてください」

か細い震える声でそう言うのと再び寝室に舞い戻ってしまう。

周囲の女中達はその場で蹲るもの、抱き合って泣きじゃくるもの、様々だ。

ミリエルは、一番奥ということは火をかけられたら一番危ないんじゃないだろうかと周囲の壁を叩き始めた。

「あの、私はいいです、外に行きます」

そう言ったとたん、周囲に悲鳴が上がる。

「ここが一番安全なのに」

「下手な奴に捕まってこの場所を白状されちゃたまらないわ」

「勝手なことを言わないで」

この館、ならびにミリエル姫御付の女中がいつせいにわめき散らし始めた。

ミリエルは舌打ちすると、窓の傍に行儀悪く坐った。

「この窓も危険です、石か何かで割られたら」

そういう言葉に合わせて、分厚い木の扉で窓をふさぐ。

ミリエルは再び舌打ちをした。これで外の情報は一切入っていない。

コンスタンシアは、一人寝室にそのまま力なく床にへたり込んだ。これが、ミリエル姫を狙った襲撃である可能性は窮めて高い。

暗殺ならその場で殺される。身柄を拘束でも偽者とばれれば結局殺されるだろう。

短い人生だった。

虚ろな目で、窓辺に置かれた花瓶を見ていた。何かするべきなのだろうが、そのするべきことが思い浮かばない。ただ座り込んでいるだけ。

泣く気力も泣く。ぼんやりと花瓶を眺め続けた。

二人のミリエル。

窓の向こうから、コンスタンシアに向かって飛び込んでくるものがあつた。

窓ガラスを飛び散らし、窓をけり割つた勢いそのままにコンスタンシアの前に立つ。

悲鳴は喉に張り付いた。

そして、背後の扉が開き、小柄な影が飛び込んできた。

小柄な影は、コンスタンシアと侵入者の間に滑り込んでくる。

手にした剣で、薙ぎ払おうとしたそれは、硬い金属の鳴る音とともに流される。

手甲を付けた両手で、剣をはじいたその勢いに、懷に潜り込み一気に顎を砕く。

コンスタンシアの目に、その小柄な姿は女中の制服を着た少女に見えた。

幻覚まで見え出した。もうおしまいかと絶望している隙に、少女と、侵入者の戦いは、佳境に入り顎を砕かれ、下に崩れた相手の延髄めがけて少女の蹴り落しが決まり。侵入者はそのまま倒れた。

更に少女は情け容赦なく。相手の身体をその身内に似合わぬ怪力で、持ち上げると窓の外に、放り出した。

「あ、あの、ここ三階」

コンスタンシアの声帯がようやく機能するようになり、かるうじて絞り出した声に少女は惘然としてこたえた。

「それがなに」

そして窓の外を覗き込む。

「あ、まだ動いてる、結構しぶといわね」

まるでお鍋が吹いてるわね、とでも言っているような口調でそう呟くその少女の容姿は、ややつり気味の丸い目が子猫のように愛ら

しい美少女だった。

「まったく、だから言ったんだ。敵さんのお目当てはお姫様、だからお姫様の傍が一番危ないんだっての」

少女はまた一つ舌打ちした。

ミリエルは、初めて、ミリエル姫の顔を見た。整った顔立ちをしている。しかしそれだけだ。いわゆる印象の薄い美人顔という奴だ。髪の色はミリエルより濃い蜂蜜色。瞳も、ミリエルと違って薄い青だ。

もしこの顔を見てあたしと見分けが付かないなんてぬかしてみなさい。レオナルド殿下張り倒して婚約破棄決定だ。

似ても似つかないその顔をまじまじと見たあと、ミリエルは扉の向こうを見た。

どうやら一連の騒ぎは、見ていないようだ。全員、頭を抱えて震えている。

「大丈夫です、窓から侵入しようとした賊は、そのまま下まで落っこちましたから」

ミリエルがそう言って、女中頭を宥める。

「あの扉を閉めてください」

ミリエルが破られた窓を指し示すと女中頭はおどおどと前に進み出て窓を閉じる。

ミリエル姫はその場に座り込んだまままったく動く様子はない。

「大丈夫ですか」

そう言って肩をゆする。唐突にその手が掴み返された。

「助けて」

か細い声でそう呟くのが聞こえた。

「どうやって？」

「お願い、傍にいて」

泣きそうな顔で懇願される。ミリエルは溜息をついた。

「いいけど、さっき見たことは他言無用ね」

そう耳元で囁くと何度も頷く。

規則正しい足音とともに、マルガリータが駆け込んできた。

「何があった」

「侵入しようとした賊が窓から落ちたみたいね」

ミリエルは笑ってごまかした。

疑惑

まずマルガリータの目に飛び込んで来たのは、部屋の隅に蹲った抱き合い、頭を抱えてすすり泣く女たち。

その中にひとときわ小柄なミリエルの姿はない。

奥の壁にあいた扉、そこに飛び込むと、華麗なドレス姿の女が蹲り、ミリエルが宥めるように手を握ってやっている。

「何があつた」

ミリエルは引きつった笑みを浮かべて窓に向かって顎をしゃくる。「侵入しようとした賊が窓から落ちたみたいね」

ミリエルの言つたとおり、窓ガラスの破片が、あたりに散乱していた。

「怪我はないか」

「あたしはない、お姫様はショックが大きいみたいだけど」

そう言つてミリエルはスカートをパンパンと叩く。その時スカートに何か忍ばせたように見えた。

ミリエルは怪訝そうにマルガリータを見る。

「どうしてここに」

「下は大騒ぎだ」

いきなり降つて来た男に驚かない人間などいない。

「何か情報を取れそう？」

「いや、顎が割れてるし、筆談をしようにも腕も折れてる」

ミリエルが小さく息をついたのは気のせいだろうか。

「マルガリータ様、これはチャンスです。このチャンスを逃す手はありませんよ」

ミリエルが満面の笑みを浮かべてマルガリータに提案したのは、ここは女であることを生かしてミリエル姫専用の護衛になつてしまえというものだった。

いきなりそんなことを言い出したミリエルに不審を覚える。

ミリエルは、平凡な商人の娘だといった。しかしこの状況下で、平然と成り行きから行き先まで筋道だった考えができる平凡な娘などいるのだろうか。

始めてマルガリータはミリエルに疑問を持った。

「だって、これはマルガリータ様にしかできないことですよ」

ミリエルはそのまま言葉を紡ぐ。

「でしょ、ミリエル姫、こちらのマルガリータ様はれっきとした女性です。女性ならば寝室まで護衛してもらっても大丈夫でしょう」
いつの間にかミリエル姫と交渉済みらしい。ミリエルの電光石火の早業に呆れるばかりだった。

そして当のミリエル姫は、涙ぐんだ目で、プルプルと震えながらマルガリータを見ていた。

「そういうわけで、サマンサさん、その旨領主様に伝えていただけますか？」

同じく部屋の隅で固まっていた女中頭に、ミリエルは笑って伝えた。

クライストは、落ちた男を観察していた。

顎の骨が砕けている。傷を見慣れたくらいストの目には、それが事故で付いた傷が、戦闘で付いた傷か簡単に見分けることができた。服を剥ぎ、落下した以外の傷が他にないか確かめる。

首、ちょうど延髄辺りに内出血の跡が。これは落下の傷と適合しない。

意識を失い、適当な場所に運び込まれた男をクライストは厳しい目で睨む。

男の素性自体は謎ではない。同じ傭兵として雇い入れられた男だ。内通者がいる可能性も想定範囲内。

しかし。誰がこの男を窓から叩き落したのか。

困惑

思索を続ける時間はさして取れない。最低限の治療を施し、クライストはそそくさとその場を後にする。

襲撃者自体の数は多くない。ざっと二十人ほどだろうか。

こちらに集められた傭兵はクライストと先ほど置いてきた男を入れて十人ほど。有利とは言いがたいが、それでも何とかなりそうだ。館の外に出たとたん。物騒な破壊音が聞こえた。

手足が曲がるはずのない方向に曲がった男達が倒れていた。

「おや、クライストさんじゃないですか」

叩き折られた剣を踏みにじりながら、柔和な笑みを浮かべて、男が近づいてくる。

名前は知らない。なのに何故この男は自分の名を知っているのか。そんな疑問が顔に出たのか、ニコニコと笑いながらその男は答えた。

「サフラン商工会の情報網は優秀ですからね、一度関わりあった人間の似顔絵も会誌で出回るんですよ」

嫌な思い出を引き出されてくらいストの表情が強張る。

「サン・シモンの狂犬か」

小さく苦笑して、彼は、呟く。

「ずいぶんな渾名を付けてくれますね」

それを見ながらクライストは内心呻く。だからサン・シモンの狂犬はたちが悪いんだ。

そのたちの悪さの一角が一見すれば普通の人間にしか見えないと言っことだ。

どこにでもいる平凡な町民。その皮を被っている凶悪な戦闘集団。それがサン・シモンの狂犬だ。

実際、目の当たりにするまで目の前の男が傭兵の一人だとまった

く気付かなかつた。

彼らはどんな場所にも簡単に入り込んでしまう。

何しろ堅実な商人と言う隠れ蓑を持つているからだ。

「こちらの獲物はもういないようですね。それならばあちらにもう少しいるかもしれません」

そう言つて立ち去つていく。足元に点々と行動不能にされた男達を残して。

とり合えず、攻め込んできた者達の制圧は終了した。それが確認され、逃げ散つたものは深追いせず、行動不能になつた者達は、最低限の治療だけを与えられて拘束された。

マルガリータは、女中頭による身体検査を終えると、そのままミリエル姫の使っている客間のすぐ傍の部屋に移ることになった。

ミリエルは、最初の部屋のままだが、今までやっていた廊下磨きや、庭掃除は免除され、マルガリータの世話だけしていればいいということになった。

あの部屋で寝起きし、それ以外の時間は丸余りになる。

ミリエルは、暇があるときは申し出て、廊下磨きでも銀器磨きでも何でも磨くと申し出たが、余りはかばかしい返事はなかった。

まあ、マルガリータと同室でないだけいいかとミリエルは樂觀的に考えた。

何しろ、暗器の手入れをマルガリータに見つからないようにするのはなかなか大変だったので。

ミリエル姫は、そのことにどこか不満そうだったが、本当のことは言えないので、無言を通していた。

ミリエルはやっと一人自分のベッドに戻るとそのまま大きく息をついた。

「あー疲れた」

身体はともかく。気疲れは妙にした。

それに自分が厄介ごとを背負い込んだ自覚もあった。

あのミリエル姫、明らかに自分から名乗り出たようには見えない。つまり裏に黒幕がいる。

その黒幕をどうにかしなければならいだろう。

しかし、あのミリエル姫は、おびえきっているゆえに口が堅そうだ。

あの様子では詳しい話をする可能性は低そうだ。

制服を脱ぎ捨てると、ミリエルは、ハンガーに引っ掛け、そのまま毛布に潜り込む。

すべては明日考えよう。

ミリエルの憂鬱

ミリエルはそれでも夜明けとともに目が覚めた。

本当なら今頃は水汲みに言っているはずの時間だが、免除といわれたので、行っても迷惑そうな顔をされるかもしれない。

そう思っ、ミリエルは寝台の上で、起きるべきか逡巡したが結局起きることにした。

髪を梳り、編んで背中にとらすと顔を洗いに出た。

女中の制服を着こんで廊下を歩くと妙に人通りが少ない。

普段ならば清掃や、食材の準備などで使用人たちの何人かは歩いているのだが、今はミリエル一人だ。

昨日の騒ぎのせいだろうと端的に判断すると、ミリエルは、水場へと向かう。

水汲み場にも案の定誰もいない。

しかし、周辺に武装した男達が、たむろしているのが遠目に見えるた。

ミリエルは食材をさして扱わせてもらっていない。しかし、この館にそれほど多くの食料が備蓄されていないことはうすうす察していた。

毎日のように穀類の配達が来る家で大量の備蓄はまずないだろう。それに使われている食材も問題だ。

保存の利く食材がそれほど日々の食事に多くない。

敷地内に畑はあるが、せいぜい数人前、今この館に滞在している人数で食べれば、数日で食べきるだろう。

もちろん、備蓄がまったくないということではないが、ここ数日でミリエルが頭に入れた館の見取り図と、食糧備蓄庫の面積、それを考えると、定期的に新鮮な食材を買い入れているのではないかと思われる。

これは貴族でもかなりの贅沢の部類だ。ましてやこの国は内乱状

態。それでなおかつそういう生活を維持できるとは、この領主相
なやり手か、それとも影であくどい真似をしているのか。

きよるきよるとミリエルは、周囲を見渡す。

そして人目がない場所に向かうと、ゆつくりと腕を上げる。

サン・シモンで覚えた舞踊を一さらい踊ってみる。

ゆつたりと手を広げ、足を大きく上げる動作がある。この踊りを
踊るときは異国の民族衣装を着るのは、スカート姿で踊るのは余り
に危険という識者の声があったからだ。

身体を大きくかしげる動きをしながら、ミリエルは、確かに、め
くれるなど、太腿まで露出したスカートの裾を慌てて直した。

軽く身体を動かして、一息つくと、ミリエルは食堂へ向かった。

これまではよかったかもしれないが、これからは食糧事情がかな
り悪くなる可能性がある。

「こういう時、所属って不便よね」

一人ならば山野に分け入りウサギでも猪でも獲って食べるのだが。
初めて猪を倒した十三のときとは違う。今は塩さえあれば干し肉
も作れるし、捌くこともできる。そう天を仰いで祈るミリエルだが、
残念ながらこのあたりに、猪が取れるような山はなかった。

ふとミリエルは、クライストの姿を見かけた。

「おはようございます」

「さっきお前何してた？」

「体操ですよ、よかつたらクライストさんもどうです？」

「いや、遠慮しておく。それはそうと、昨日姫君の窓から落ちた奴
な、死んだわ」

言われた言葉にミリエルは思わず目を剥いた。

「打ち所が悪くて」

「違う、刺し殺されてた」

ミリエルは悲鳴をかみ殺した。

「ええと、確か昨日聞いた話では、傭兵に成りすまして、ここに潜
り込んで誰かに情報を漏らしてそれでお姫様を狙ったってことでし

よ
」

「ざっくり言えばそうだな、どうやら他にも内通者がいるらしい、そいつに口を塞がれたってことだ。ツエレに伝えておけ、あまり分のいい仕事じゃなさそうだ」

ミリエルはコクコクと頷いた。

顎を碎いたので、口が利けないといわれてミリエルは安心していったのだが、それに、まさか十五の少女に叩きのめされたなんてことが利けたとしても言いたいことではないだろうとも思っていた。

傭兵としての沽券に関わるし、この業界、舐められたら終わりだ。しかし、死んだと訊いて思わず自分が殺したのかと思い心臓を詰めた手で驚づかみにされた気がした。

空腹なのに吐き気がした。もちろん叩き落した時、死ぬかもしれないと思っていたが、殺るか殺られるかの興奮が消えた後の死亡宣告は案外きつかった。

無論ミリエルは刺し殺していないが。確実に人の死に関わったその事実が重かった。

ミリエルの憂鬱 2

マルガリータはミリエルから内通者が殺された話を聞き表情を厳しくした。

傭兵達の数は少ない。その中に更に内通者がいるとなれば、味方はもっと少ないと考えるべきだ。

この館に駐在している兵士も数は知れているし、マルガリータの見たところ錬度も足りていない。

ミリエルも深刻な顔をしている。

「ミリエル、今からでも遅くないかもしれない。今のうちにどこかに逃げる」

ミリエルは首を横に振る。

「ミリエル、私に義理立てしている場合じゃない。それに今の状況ではお前までかばえる自信がないんだ」

「自分の身は自分で守ります」

ミリエルは硬い声で答えた。

ミリエルはミリエルで悩んでいた。ウォーレスあたりに、仲介してもらって自分も傭兵として登録してもらおうかと。

しかしミリエルは自分の見た目をよくわかっていた。

ウォーレスすら傭兵にとっても見えない外見だが、ミリエルは更に上をいく。

ミリエルを見て傭兵だと気付いた人間はいままで誰もいなかった。それがミリエルの強みだと思っていた。

しかし、今ミリエルは目の前のマルガリータを説得するすべはない。だが今危険でもここを離れるわけには行かない。

それはレオナルドを待つため。

決して望んで婚約したわけではない婚約者。会おうと会うまいと何の痛痒も覚えないはず。自分は意地になっっているのだろうか。

一度決めたことだから。一度会ってから戻るかどうか決めると。さつさと決めてしまいたいからだろうが、いつまでも宙ぶらりんなのが気に食わなくて。

「マルガリータ様のためだけではありません、ここにいないければならない理由があるのです」

「その理由とは」

「今は言えません。ですが時がきたら必ずお話いたします」

マルガリータは溜息をついた。

「それなら、私も死ねないな。ぜひともその話を聞きたいから」

マルガリータがまるで冗談のように語った言葉、しかし、今の状況ではそれが冗談で終わる可能性はきわめて低い。

「姫君のところへ行く時間ですね」

ミリエルが時計を指差す。

二人は連れ立って、この館で一番大きな客間に向かう。

コンスタンシアは困惑していた。新たに護衛として傍に仕えることになった女性騎士と、その傍らの少女を前にして。

あの時、とつさに救いを求めたが、今、目の前に控えている少女は、本当に小さな、おそらくコンスタンシアより年下の少女だ。

その傍らに居るのは、黒髪と黒い瞳の騎士。背も高く、肩幅もがつしりとしてとても女性とは思えない。

「マルガリータ・ツエレと申します、この隣に居るのは私のメイドです」

少女はぺこりと頭を下げる。

「ミリエル・モニークと申します」

コンスタンシアは、思わず立ち上がりそうになった。

「畏れ多くもミリエル姫と同名、私のことはミリーとでも及びください」

少女がにつこりと笑う。コンスタンシアは、ベールの奥で震えることしかできなかった。

ウォーレスの驚愕

ウォーレスは、定期報告のため、カティン商会サヴォワ支部へと向かっていった。

今回は馬を走らせて。ウォーレスは、国外では傭兵働きの多いため、他の商工会員はあまりやらない馬術の腕も確かだった。

他の特殊部隊員ですら歩かせるのがやっとと言っていたらくの中、岸波に馬を操ることができた。

ウォーレスは、元々商工会員として商取引のついでに傭兵働きをしているので。商談や仕入れと言えば比較的簡単に館から出入りできた。

それで疑われないのは、やはりサフラン商工会の名前が大きい。サフラン商工会は決して裏切らないをモットーに販路を広げている。

それは黒獅子傭兵団だったときも変わらない。変えられないモットーだ。

広がる農村地帯の一角に、街と、商店の密集した区画がある。

ここが、この界隈の流通拠点だ。

カティン商会の看板をくぐると、馴染みの店員に、仕事がてらの雑談を始めた。

「そつえば、青狼が動いてるらしいぞ」

「聞いていないが」

「でも、ミリエルがいた」

とたんに店員は身を乗り出した。

「どこに」

「俺の雇い主のところまで女中をやっていた」

店員は声を潜めて囁く。

「ここだけの話だが、ミリエルは不名誉除隊処分済みだ。だから商工会は一切関係がない」

言われて一瞬ほうける。

「馬鹿な、ありえない」

ウォーレスは、思わず店員の襟を締め上げた。

「どうしてミリエルが不名誉除隊になるんだ。そんなことはありえないだろう」

「確かにお前はミリエルと親しかったが」

「そんな問題じゃない。ミリエルはまだ十五歳。雑貨屋の店番しかしたことがないんだぞ、そんな奴がしたくても不名誉所帯になるような罪を犯せるはずがないだろう」

まったくその通りだった。不名誉除隊はよっぽどのことをしでかさなければ下されるはずがない処分だ。しかし何事にも例外がある。「ミリエルの父親は、貴族だった。正式に貴族籍に入れられたそうだ」

サフラン商工会構成員は平民のみ、暗黙の了解でそう定められている。

「じゃ、何であいつは女中なんかしていたんだ」

「何でだろう？」

その時、ウォーレスは気付かなかった。

店番のいる奥の部屋で、二人の話に聞き耳を立てている物がいたことを。

彼は、パーシヴァルの部下の一人だった。ミリエルが立ち寄ったときのためとカティン商会の一部に寄宿生活を送っていた。

彼はミリエルの名前にすばやく反応したのだ。

半ば諦めていたミリエルの情報だ。壁に張り付いて一言も聞き漏らすまいとする。

しかしウォーレスの雇い人の名前がなかなか出てこない。じりじりと気持ちばかりが焦る中。無常にもウォーレスは仕事の話を始めてしまった。

商談が終わり、ウォーレスが帰った後やっと店番からウォーレスの雇われ先を聞きだすと、彼はあたふたと、主パーシヴァルのもと

へと馬を進めた。

騒乱前日

自らの砦で、彼は、はるか遠方を眺めていた。

「閣下、出立を早められるとのことですが」

マーズ將軍閣下は。砦の最上階、矢狭間に肘を付いたままの姿勢で頷いた。

「あの領主殿が、王太子殿下に忠誠を誓うと宣言し、傭兵を集めているとか。そして、その場に敵の手から逃れた王太子妃殿下も救いを求めて滞在中とか」

「敵に捕らわれていた王太子妃殿下をお救いしたですか」

副官が皮肉に口をゆがめたのが後ろを向いたままでも彼にはわかった。

随分と胡散臭い話だ。王太子の婚約者ミリエル姫が、何者かに拉致された挙句行方不明。それは、隠されても漏れ出してしまった噂だ。どこの誰ともわからない相手からミリエル姫を救出した。どうやってその情報を得たのか、その辺はまったくわからない。

サザウィー男爵。貴族の中では余り目立たない存在だったが。情法網だけは、相当なものだと言う噂は聞いていた。

その情報網を駆使したと自分で言い張っている。

しかし、そのミリエル姫が、間違いなくミリエル姫だとうやって確かめたというのだ。

マーズ將軍自身、ミリエル姫の顔を知らない。

かろうじてわかっているのは金髪らしいと言う噂だけだ。それで個人照合しろと言うほうが無理だ。

だから先に行って様子を見るべきなのではないかと言う気もあった。

「殿下がその顔を確認すれば話は済みますよね」

副官の正論に、少々焦る。実は野次馬的な好奇心も少し心の底にあったりもした。

「偽者にせよ、本物にせよ、どんな女か楽しみだ」
不謹慎極まりない言葉に副官は溜息をついた。

コンスタンシアは小さくくしゃみをした。

「最近冷え込んできたものね」

そう言って両手を胸で交差させる。扉の向こうでも小さくくしゃみが聞こえた。

「風邪が流行っているのかしら」

扉の前で番をしているマルガリータに、簡単に食べられるようにした軽食を持ってきたミリエルは、口を押さえた。

「もしかして、飛びました」

鼻水が飛ばなかったかと恐る恐る訊いた。

「いや、少し方向がずれていたようだ」

そう言って、パン生地で細かく切った野菜や肉が包み蒸し上げられた料理を口にする。

「変わった料理だな」

「東大陸の料理ですよ、以前食べたあれも東大陸の料理なんですけどね」

ミリエルもマルガリータと並んで立ったまま食事をする。

「わざわざ作ったのか」

「急に暇になったもので」

マルガリータとミリエルだけで食べるものに関しては、調理場で作ることは文句を言われなかった。

しかし、ミリエルの読みどおり、調理場の小麦粉は大分減っているようだった。

「籠城はきつそうですね」

ミリエルの言葉に、マルガリータは眉をしかめる。

どうしてこの少女は、こんな風に、平然と怯えた様子を見せないのだろう。

「怖くないのか」

「この国に来たとき、覚悟は決めたつもりです」

ミリエルは、きっぱりとそう言う。おそらくもうすぐ第二段の攻撃が始まるだろう。

どうやら新たな傭兵を募っているらしいが、それらしい人間が来た様子はない。

「危険は承知で国境を越えましたから」

ミリエルの言葉の意味を考える。そして考えることを放棄した。すべては生き残ってからだ。

マルガリータは自分にそう言い聞かせた。

再びの襲撃

ガラス戸と、その外側にある木戸まで閉めて、昼でも薄暗い中ミリエルが呟いた。

「来ましたね」

マルガリータも答える。

「ああ、来たな」

今現在館の前庭あたりで交戦が始まっていた。

今回は以前のような愚を犯さないため、木戸までぴったりと閉めて、その前に、家具でバリケードを作っていた。

ミリエル姫は、天蓋つきの寝台の中カーテンを下ろした状態で座り込み震えている。

外部の明かりはまったく入らないので、ランプの明かりで二人は話している。

「マルガリータ様、私は、ここでミリエル姫に付いています」

「しかしいいのか、ミリエル姫付きの侍女がいるだろう」

「隣の部屋の隅で放心状態です、しばらく使い物になりませんね」

狭い隅で身を寄せ合って震えている侍女達の姿を思い出しながら

ミリエルは答えた。

「そうか、ミリエルいざという時。決して戦うな」

言われてミリエルは目を瞬かせる。

「うかつに抵抗すれば、殺されるのが早まるだけだ」

ぽりぽりと頬をかきながら、ミリエルはマルガリータの言葉を聞いている。

「一対一なら不意を付けば何とかなと思うんですが」

「それは戦いを知らないからいえることだ」

マルガリータは幼子に言い聞かせるように諭す。

「でも、誰にとっても最初がありますよね」

ミリエルは引く気がないようだ。マルガリータは呆れた。こんな細い華奢な少女に何ができると言うのだ。

「なら好きにしろ」

強情な少女に言い捨ててマルガリータは部屋を出た。

ミリエル姫の護衛。これがマルガリータにあてがわれた仕事だ。

ミリエルという同じ名前の平民の少女ではなく。

適当に返事をして置けばよかったかな。ついムキになってしまったが元々嘘をついていたのは自分だ。それを考えれば悪いのも自分。少々後悔しつつミリエルは、寝台の脇の小卓に添えられた椅子に坐る。

ミリエルの無礼な態度に、寝台の上のミリエル姫は、何も言えない。

「たぶん、食べ物とかとつて来れなくなると思っんですけど、しばらく水だけで耐えられますか」

呑気な言葉に、ミリエル姫ことコンスタンシアは無言を通した。

寝室には二人だけしかない。

侍女達は隣室に隠れている。

「とばつちりを食わないようにはわかるんですけど、決心が早すぎませんか？」

ミリエルが隣室を横目で見ながら呟く。

彼女達の判断は当然だ。彼女達は当然ここにいるのがコンスタンシアだと知っているのだから。

「ここで私が死ねば都合がいいとおもってるんでしょう」

思わず出た本音をミリエルは静かに聞いている。その表情に驚きはない。

「私がリンツァーの血を引いていないとしたらあなたは驚くの」

「いいえ、最初から知っているから」

ミリエルの返事にコンスタンシアは息を呑む。

「何故知っているかは教えない。貴女がそちらの情報を話してくれ

るまでね」

「何故何も言わないの」

「私の都合よ」

ミリエルは笑った。

「誰かに話してもいいよ、私が貴女を偽者だつて知ってるつて」

思わず口に出してしまったことから予想外の返事を聞いてしまい
コンスタンシアの許容量はあっさり振り切ってしまった。

近づく時

あたふたとみんなが走っている。

忙しく立ち働く者達を横目に優雅にお茶を飲んでいる男がいた。

パーシヴァルは、華麗なティーセットを並べたテーブルについていた。

そのまん前に居心地の悪そうに坐っている彼の部下。

「いいんでしょうか、こんなことで」

色々と荷物を運んだり、書類を抱えて駆けずり回る姿を視界の隅に入れながらも優雅な姿勢は変わらない。

「ぜんぜんかまわないよ、所詮僕らは部外者だからね」

茶器を扱うその手も優雅な彼は、三倍目のお茶を飲み干した。

「それじゃ、報告ご苦労」

ミリエルが目撃された場所の情報を持ち帰った彼は当然、レオナルドにもそれを報告すると思い込んでいた。

しかし、パーシヴァルはそのまま動かない。

「この情報は確かなんだね」

「間違いありません。グランデで親しくしていた人間からの情報です」

「もちろん、君の判断は間違っていない。あの子のいる館に乗り込んで、あの子をここに引きずってこようなんて真似したら、君の命がいくつあっても足りないよ」

彼の額に冷や汗が浮かぶ。

「噂では聞いていましたが、そこまで凄いですか」

「もちろんそこまで凄しさ」

きっぱりと断言された。

「それに問題があつてね、その館に、ミリエル姫が滞在しているそうなんだ」

返答までに間があつた。

「すでに入っていた情報だと言うことですか？」

「いいや、君の情報があの子の最新情報だよ」

パーシヴァルは、茶碗を置いて、焼き菓子をつつまんだ。

「ある貴族が、賊にとらわれていたミリエル姫を救出したんだって。それで王太子に味方する貴族の館に匿われるように手配したんだって」

聞いているだけで胡散臭さが漂ってくるような話を滔々と語る。

「そのミリエル姫は」

「もちろんうちのあの子じゃない」

パーシヴァルは皮肉に笑う。

「だから、君の判断を僕は評価するよ」

確かに、そんなところに乗り込んでいったら一騒動だ。

「それに、わざわざ伝える必要はないんだよ、だってレオナルドはミリエル姫を迎えにその館に行くためにこうしてばたばたしてるんだから」

パーシヴァルの話を総合的に考えてみる。

そして出た結論は。

「どの道ミリエル姫をお持ち帰りすることになりますね」

「そのとおり、だからわざわざ言わなくてもいいだろう」

その言い分が正しいような、間違っているようななどちらとも言えず彼はにこやかな上司の顔を見据えていた。

扉の前で、マルガリータは数人の敵と相対していた。

館の中まで攻め込んできた。味方はどれほど生き残っているだろう。

焦燥がマルガリータの胸を焼いた。

部屋の中にまで響く剣戟にコンスタンシアは、頭を抱えて震えている。

ミリエルはすでに自らの武器を手にしていた。

チャリと鎖が鳴る音がした。

足を肩幅に開いて、目に見えない部屋の外の気配を追う。

コンスタンシアは周囲の物騒な気配も恐ろしかったが、目の前の武器を構えた少女もまた恐ろしかった。

怯えてすくんでいるのを見てミリエルはちょうどいいと思っていた。

癇癢を起こして泣き喚かれたら厄介だ。

もっと厄介なのは敵が火責めを考えたときだ。

ミリエル姫に死んでもらいたければ間違いないそうする。

嗅覚も総動員する必要があった。

近づく時（後書き）

久しぶりのパーシヴァルです。

そろそろ危機一髪のお姫様に王子様が駆けつけるといっ話になる
でしょうか。

近づく出会い

「お姫様、走れる？」

ミリエルがそう尋ねた。

コンスタンシアは、何を言っているのかわからない。

「火攻めをしかけて来た」

コンスタンシアは、寝台の上で身じろぎする。

かすかに鼻を突く焦げ臭い匂い。やはり火をかけたか。

それではやはりミリエル姫抹殺が目的と言うことか。

確かに先日襲ってきた一人もあの状態で拉致し連れ去ることは不可能な状況だったと思う。

どんなに華奢でも人間は結構重い。窓から侵入して女一人横抱きにした状況で脱出できるはずがない。

「抹殺か、どんな顔ぶれがあるか聞いてもいい」

「私にだってわかりません。そんな政治の話なんて女子供の聞くことではありませんもの」

ミリエルは溜息をついた。自分のおかれてる状況がわかっているのだろうか。

「ミリエル姫の芝居をするとき、ミリエル姫の敵が自分の敵に回ってこと、わかってなかったんだ」

言われてはじめて、コンスタンシアは自分の立場を正確に理解した。

相手は王太子のみではない。王太子に婚約者の偽者と断罪される前に、リンツァーの王家の姫として命を狙われる可能性をまったく考えていなかった。

「火が回ってくるまでにしばらくかかるかもしれないけど。そのままいたらおしまいだよ、走れる？」

「たぶん」

たぶんね、ミリエルは皮肉に笑う。ミリエルも経験済みだが豪華

な着替えるのに侍女の助けがいるようなドレスはかなり動きにくい。それにつま先が華奢な、かかとの細い靴が重なったら到底走れたものじゃない。

走るときは、それが室内ならミリエルは、靴を脱いで手で持つて走る。

「じゃあ、なるだけかかとの低い靴はある？」

できれば平べったいデザインのものがあればいいのだが、贅沢は言っていられない。

「今私が穿いているのは。全部かかとが低いものよ、本物のミリエル姫はそんなに大きくないらしいから」

ちび。と言外に言われ、ミリエルは胸に押し寄せてくる衝動と戦う羽目になった。

と言うかなんで容姿について、そんな余計な情報をつけるんだろう。

マーズ將軍は、煙の上がっている方向を見て呟く。

「狼煙でも上げているのか」

「そんなはずないでしょう、どうして今頃そんな大時代なことをするんです」

副官の冷酷な突っ込みにマーズ將軍はゴホゴホと咳払いをする。

「襲撃をかけられたようだな」

マーズ將軍は部下に馬を急がせるよう指示を出した。

「たとえ本物だろうが、偽者だろうがミリエル姫を名乗る人間を死なせるわけには行かない。ミリエル姫が偽者だった場合、裁けるのは王太子殿下のみだ。」

その宣誓に副官も頷く。

彼らはいっせいに館のあるほうに馬を走らせた。

王太子の代理人

館の一角に火が放たれていた。もうもうと上がる黒煙。

館の領主の私兵達が消火活動を行おうとしていたが、攻め込んでくる敵の妨害に退行するのが精一杯といった状況だ。

傭兵と思しいもの達も戦っていたが、てんでんばらばらの装束に身を包んでいるので、どれが賊で、どれがこの館に雇われている傭兵なのか、区別が付かない。

「第一隊、消火活動。第二隊は第一隊を妨害しようとしている輩を掃討しろ。俺は領主に話をつけてくる、デニスお前は俺に変わって指揮を取れ」

最後に副官に命じると、マーズ將軍は、護衛官三名を引き連れて、領主のいる辺りへと向かった。

目に入るのは逃げ惑う下級の使用人たち。そして、転がっている領主の私兵の屍。

火矢を使われたのか、今黒煙を上げている場所以外もくすぶっている。

彼はそれらを一瞥すると無表情に館の中に入った。

領主は、頑丈な石造りの部屋にこもっていた。

「何をしている」

マーズ將軍は硬い声で言う。

「お前の私兵たちは前線で戦っている。金で雇われた傭兵達もだ。そしてお前はこんな場所で何をしている」

淡々と続く糾弾の言葉に、彼はそのいかつい顔をこわばらせた。恰幅のいい顔が屈辱に歪む。

「今現在より、我が軍がこの戦いを戦う。すべての指揮は私が取る。反論は認めない」

言うだけ言うと、彼は踵を返した。

マルガリータがようやく今いる分の敵を沈黙させたとき、恐る恐るといった風に扉が開き、ミリエルが顔を出した。

「マルガリータ様、きな臭いです」

その匂いはマルガリータも気付いていた。

「どうします、お姫様を連れて逃げますか」

「いや、どうやら消火と、援軍が来たらしい」

マルガリータは窓を覗きこんで、マーズ將軍の部隊が消火活動を行っているのを確認した。

「援軍？」

「ああ、王太子殿下の軍隊がこちらに向かっているという情報があった。その軍隊が到着したようだな」

その時マルガリータは違和感を感じた。

ミリエルの顔が厳しく引き締まったのだ。この場合、本当ならば安堵で緩むんじゃないだろうか。

しかし、ミリエルは強張った表情のまま、扉の向こうに消えた、お姫様にお知らせしてきますと言い残して。

扉を閉めたミリエルは、完全に動転してしまった自分に気が付いた。

パンと自分の頬を平手打ちし、再び寝室に戻る。

「お姫様、王太子殿下の軍隊が援軍に来たそうです」

この知らせは、自分にとっていささか戸惑うものだが、このお姫様にとっては、敵襲以上に歓迎したくない事態だろう。

ボスっという音がして、天蓋から垂れ下がるカーテンをめくると、寝台に突っ伏して気絶していた。

王太子の代理人 2

マーズ將軍率いる軍勢はあっさりと襲撃してきた敵を蹴散らした。

そして、ミリエル姫にあてがわれた客間に向かう。

ミリエル姫専属の護衛をおおせつかったと言う傭兵が出迎えた。元々は貴族の出だったが、身内の不始末で国にいられなくなったという身の上話を領主がしていた。

長い黒髪を後ろでくつた地味な黒尽くめだが、確かに物腰に育ちのよさがにじみ出ている。

そして足元には五人ほどの切り捨てられた軀が転がっている。

切り捨てた本人は、さしたる深手も負っていない。

軀を見る目も凧いだように静かだ。

これはなかなかの掘り出し物かもしれないとマーズ將軍は心中で呟いた。

中肉中背で、美しくもなく、醜くもない容姿も使えそうだ。

「姫君はこの部屋の中か？」

「はい、この奥の寝室にこもっておられます」

扉をノックしてみる。すると、黒いお仕着せにボンネットとエプロン姿の少女が顔を出した。

「あの、マルガリータ様」

唐突に出た女名前にマーズは辺りを見回した。しかし、自分とその側近。そして傭兵しかいない。

しかし、少女はかまわず傭兵のもとに駆け寄る。

「まさか」

彼は棒を飲んだように固まる。この場合、やはりマルガリータ呼ばわりされているのは目の前の傭兵なのだろうか。

そんな彼とその側近達を無視して、少女はマルガリータに切々と訴える。

「お姫様が気絶してます、どうしましょう」

「気絶？」

「どうやら襲撃の恐怖で、意識を失ってしまったらしい。」

「それならいい、そのまま休ませて差し上げなさい。この家の女中か？」

「いいえ、マルガリータ様のメイドです」

少女はにっこり笑って答えた。

そして少女は視線をさまよわせる、まるで誰かを探すように。

「どうした？」

「王太子殿下はいらっしゃいませんの？」

マーズ將軍は呆れたように、少女の頭を撫でる。

「お嬢ちゃん、気持ちはわかるが、それはもつと後だ。我々は殿下に先行してこちらに来たんだ、ミリエル姫、王太子妃殿下をお守りするためにな」

「あ、そうですか」

少女はどこか気のぬけたような顔をして、再び部屋に舞い戻った。

「ええと、マルガリータ殿？」

「ええ、マルガリータ・ツエレと申します」

あつさりと肯定されて、マーズ將軍は対応に困った。

「あの少女は、貴女のメイドだとか」

「ええ、そうですか」

「お国からつれて来たのか？」

マルガリータは対応に困った。嘘をつくか、それとも本当のことを話すべきか。

あいまいに笑うマルガリータに、マーズ將軍は興味を失ったのか、話題を変える。

「ミリエル姫はお美しい方か？」

「まあ、その範疇には入るでしょう」
「当たり前障りなくそう答えた。」

ミリエルは、気絶したコンスタンシアを強引に叩き起こした。

「王子は来ていないよ」

それだけ伝えると。コンスタンシアを見据える。

「だから来るまでに何とか考えなきゃ」

王太子の代理人 3

コンスタンシアはベールごしに、マーズ將軍と面談した。傍にはマルガリータとミリエルが控えている。

そして元々自分の配下であるはずの侍女達はるか後方に控えている。

そう、こんなこと成功するはずがないのだ。そんなことは侍女達ですらわかっている。コンスタンシア自身が思ったように。

マーズ將軍は表面上は恭しく、コンスタンシアの手をとった。

「お目にかかれて光栄です妃殿下」

コンスタンシアは頷くことで返事として再び椅子に坐る。

その一連の詳細をミリエルは凝視していた。

猶予があるというミリエルの言葉に、コンスタンシアも多少の余裕を見出したようだ。

すべての黒幕はコンスタンシアの父親だという言質はタベ取った。しかしミリエルは納得していない。

もう一つぐらい裏があるかもしれない。

コンスタンシアは、でしゃばらず殿方の言うことに盲従せよと言う貴族のお嬢様教育を何の疑問もなく受けてきた少女だ。

それ以上のことを知っているとは思えない。つまり糸は途切れてしまった。

難しい顔をして考え込むミリエルをマルガリータは横目を使ってちらちらと見ている。

もしかしたら、ミリエルは自分が思っているより、はるかに大きな厄介ごとを抱えているのかもしれない。それはほぼ確信に変わりがけた疑いだ。

面談は肅々と終わり、当たり前障りない会話で終始した。

その日以来、マルガリータが呆れるほど、コンスタンシアは、ミリエルを傍から放そうとしなくなった。

ミリエルも、表面上はにこやかにコンスタンシアに話をあわせている。

どうしてそうなったのかマルガリータはミリエルに問いただしたがミリエルは頑として話そうとしない。

ただミリエルは時が来れば必ず話すとそう言いにつづけるだけだった。

かがいしくミリエルは立ち働き、マーズ將軍にも節度をとってそれでいて親しく接するようになった。

「なんか変ですよ、あのお嬢さん」

副官の言葉をマーズ將軍は不思議そうに聞いた。

「どこが変だ？」

「聞いた話だと、あのお嬢さんはミリエル姫が来る前に、あ的女傭兵とここに来たそうです。ところがいつの間にかミリエル姫の側近の立場をあ的女傭兵と築いている」

「傭兵に女は一人しかいないから選択の余地がなかったんじゃない」

護衛に女が使えるならお姫様に合わせるならそれが一番いいと思つた。

それが領主の言い分だ。

それ自体はそれほど違和感を覚える内容ではなかったのだ。そのまま聞き流していた。

「その話、すべてあのお嬢さんがまとめたそうです」

言われた内容に少々驚く。きよろきよろと王太子の姿を探していたいかにも軽はずみな好奇心いっぱい少女に思っていたのだが。

「そうそうあのお嬢さんの名前も、ミリエルだそうですよ」

「それは単なる偶然だろう」

「そうですね」

ミリエルという名前事態そう珍しいものではない。

リンツァー王家の姫君と金髪、それが彼らの持っているミリエル

姫の情報だ。もっと詳しい情報があったならばその対応も変わった
だろう。

望まれない客。

その日、来客があった。

サザウイー男爵。王太子派を名乗る貴族の仲で中堅くらいに位置する人物だと言う。

ミリエルは部屋の隅でその様子を観察していた。

恰幅のいい中年男。この館の領主もそうだが、この国の男は中年を過ぎるとたんに恰幅がよくなるのだろうか。

日に焼けた赤ら顔に、笑ったような垂れ目。しかし、笑っているように見えるだけで、その細い目の奥に光る目は決して笑わない。

その下膨れの顔も、いかにも福福しいが、ミリエルには先入観のせいか胡散臭く見える。

コンスタンシアの話を信じれば、これがコンスタンシアの父親らしいが似ても似つかない。

どうしてこの強烈な顔から特徴がないのが一番の特徴と言う娘が生まれるのだろうか。

まあ、この強烈な父親にスポイルされてしまったのがコンスタンシアなのだろう。

いかにも自慢たらしく、姫君を救い出した経緯を滔々とまくし立てる。ミリエルからしたら嘖飯ものだ。

コンスタンシアは、ただ無言を通してている。そしてサザウイー男爵はそんな娘を咎めもしない。

或いはうかつに喋ることではるが出るのを恐れているのかもしれないが。

そして胡乱な視線を向けているのはミリエルだけではなかった。

いかにも感心している風を装っているが、マーズ將軍の視線は冷たい。いや將軍のみならずその側近も彼を疑いの眼差しで見ている。

「サザウイー男爵、そちらの女騎士殿に礼を言うべきであろうな、何しろミリエル姫を身を盾にして守ったのだから」

そう言つてマルガリータを指し示す。

女騎士の言葉に一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、瞬時に満面の笑みをこぼれさせる。

その反応の速さにミリエルはますますしらけた気分になった。

作り笑いをするのが習い性になっているのが見え見えだ。

結局恐ろしく身にならない会見が終わつて、ミリエルは疲労を覚えて自室に戻つた。

狭い小さなベッドとそのベッドとどっこいの床しかない小さな物置小屋の成れの果てのような部屋に戻ると、ミリエルは、ぐったりと寝台に横になった。

もつといい加減にしてほしい。

領主や、マーズ將軍に本当のことを言う危険は冒せなかった。

何しろ証拠は、懐の指輪一つ。その指輪を見せたところで、盗んだのと言いがかりを付けられて、取り上げられてしまつてはかわない。

何しろ女中仕事の手際が良すぎた。

日頃母親の手伝いをする良い子だったのが災いした。

コンスタンシアのことを考えると憂鬱になった。

結局背負い込んでしまった。おそらく少々だが自分より年上の女の人生を。

つくづくグランデにいるときは、自分は祖父に甘えていたし、祖父のコネで人生樂してきたんだと思ひ知つた。

ウォーレスには頼れない。今更マルガリータにも本当のことは言えない。

どんどん自分を袋小路に追い込んでいる気がしてきた。

「早く来なさいよ、そしてあたしにけりをつけさせて」

ミリエルは年に似合わない、疲れた表情で、胸に下げた指輪を握り締めた。

望まれない客。（後書き）

今日、実家から40センチの鰯が届きました、三枚におろして醤油に漬けるのが精一杯。焼く気力はありませんでした。台所はスプラッタ。掃除が大変でした。ですので少し短くても仕方ありません。

望まれない客 2（前書き）

お話が停滞しています。次くらいはダイナミックに動かしたいです。

望まれない客 2

庭の裏手に、戦死者を埋めていた。

ミリエルは、庭掃除の手を止めて、それを見ていた。

他に攻めてきた敵の死体もあるが、それはまずマーズ將軍の検分が終わってから葬られる。

罪作りなことをしたものだ、ミリエルは思う。

サザウイー男爵が娘をミリエル姫に仕立てて、こんな騒ぎを起こさなければ敵も味方も出すはずのなかった死者だ。

数秒だけ目を閉じ死者の冥福を祈る。そして再び箒を握って掃除を再開した。

コンスタンシアの傍には、サザウイー男爵が陣取っている。余り傍にいたい人間ではない。それに傍にいれば確実に危険だ。

何しろ本物のミリエル・アレクト・リンツァーが生きていれば確実に抹殺を図るであろう人間だ。

マルガリータのもとに食事の出前に行くたびにベール越しに恨みがましい視線を感じるが、今は我慢してもらうほかない。

それにサザウイー男爵からなにやら嫌な視線を感じる。やはり近寄らないに越したことはない。

そして、コンスタンシアの傍に極力近寄らないようにすれば、結局ミリエルのすることがなくなるということだ。

女中頭に頼み込んで雑用を回してもらう。

サザウイー男爵の連れてきた使用人は、あからさまに、この館の女中を蔑んだ目で見えるが、元々男爵家、この館の領主として身分の差はないはずだ。それなのに何故そのような態度をとるのか。

どうもミリエルの知らない影の人間関係がありそうだ。

マルガリータは暇をもてあましていた。

ミリエル姫についていなければならないので、他の傭兵と剣の稽古もできない。

持ち場を離れられる時間は限られているし、最近はミリエルも必要最低限以外は近寄らないようになって来た。

どうやらサザウィー男爵と、その取り巻きがきに食わないようだ。

あの子は内面を見せないようできて、結構駄々もれなところがある。最近は悩み事があるようだ。表情がさえない。

最初の頃食べ物さえ与えておけば常に満面の笑みを浮かべていたものだが、このごろは食事も進まない様子だ。

サザウィー男爵が嫌いなのは、なんとなく理解できる。

あの人物はどこか胡散臭い。人好きのする笑顔を装っている。そんな気がした。

そして、クライストもそのサザウィー男爵が関わったミリエル姫の真贋を疑っている。

マルガリータ自身も、疑わしいとは思ったが、それはマルガリータが考えることではないと。それ以上考えなかった。

それを考えるべきはレオナルド王太子であるし。もし、そのままあのミリエル姫を彼が受け入れるならそれはそれだろう。

もし受け入れてもらえなかったら気の毒に思うが、マルガリータにできることはまるでない。

最初、ミリエル姫は、ミリエルを恨みがましい顔をして離れていた事を無言で攻めていたが、最近ではその恨みの視線がマルガリータにまで飛び火してきた。

できることなどないというのに。

どっちもどっち

マーズ將軍の軍隊が駐屯し始めてから、王太子に味方を名乗り出る貴族達が続々と館を訪れるようになった。

ミリエル姫はベール越しに、恭しく頭を下げる貴族達を見下ろしている。

ここ数日見慣れた光景だった。

ミリエルは人数あわせに、女中の列に並んでいた。

一番ミリエル姫に近い位置に立っているのがマルガリータだった。直立不動でその光景を眺め続ける。

そして、その光景を薄い笑みを穿いてサザウィー男爵が睥睨している。

ミリエル姫の坐る椅子の後ろに控えている形になっているが、むしろ、ミリエル姫の背後で睨みを聞かせているといった風が強い。

下座でマーズ將軍は見物しているだけだ。

言葉を交わそうと近づいてきたものも無視して、ただ眺めている。そして、最後の貴族が挨拶を行おうとしたその時、思わぬことが起きた。

抜刀し、ミリエル姫に向かって走ったのだ。

とっさにミリエルはその前に立ち塞がった。

「馬鹿！！」

マルガリータの切羽詰った悲鳴が聞こえる。

ミリエルは後方に思いつきりのけぞって剣をかわした。そして一瞬だけブリッジの体勢をとる。

そのまま身体を床に転がして相手の軸足を払った。剣を持ったままミリエルの上に覆いかぶさるように倒れてきた。

ミリエルの顔すれすれに剣が突き刺さっていた。

覆いかぶさっていた男の身体からミリエルは自分の身体を引きずり出す。

「大丈夫か」

蒼白になったマルガリータが慌てて駆け寄ってくる。

「ちよつと怖かったかな」

ミリエルはマルガリータの手を借りて立ち上がりながら苦笑する。
倒れた男はぴくりとも動かない。

「打ち所が悪かったみたいね」

呑気な言葉に、マルガリータの拳骨が落ちた。

「うかつに飛び出すなといったろう」

頭のとっぺんを殴られて、ミリエルは涙目で抗議する。

「だってとっさだったんですよ」

「だってじゃない、危うく串刺しだ」

実際に串刺しになったのは相手の男のほうだった。倒れこんでくるタイミングにあわせてミリエルは、肘を立てていた。

自分の体重をもろに肘でみぞおちで受けてしまった男はしばらく動けそうにない。

マーズ將軍とその部下が男を手際よく縛り上げる。

「驚いたな」

マーズ將軍が副官に呟く。

「ええ」

副官も激しく同意した。

「人間の身体はあんなに曲がるのか」

ミリエルの剣を交わした動きに、思わず二人は感動していた。

「あのお嬢ちゃん、只者じゃねえ」

捕らえられた男は、荒縄で縛り上げられた状態でわめき散らした。

「サヴォワの侵略者の手先め」

彼は血走った目でベールの向こうを睨みすえていた。

「お前がリンツァーを引き入れてサヴォワを侵略しようとしている
ぐらいお見通しだ雌狐」

殴り倒されながらミリエル姫を罵り続ける男をひきずってマーズ

將軍は退出する。

ミリエルは、それを横目で見ながら、誰にも聞こえない呟きを呟いた。

「偉い人は下々を人間だと思ってないというけど、偉い人も実は人間だって下々の人だって思っ
てないんじゃない」

彼は見ていない。いきなり理不尽な運命を突きつけられた、たった十五の少女を。

それは血も涙も流す存在だと理解していない。

どっちもどっち（後書き）

アクションシーンなかなか決まらなかったです。さすがに倒れたところにエルボードロップはばればれでしょう。カウンター肘ならわかりにくいかと。

かみ合わない思い

レオナルドは馬上で思索にふけっていた。

周囲を騎士に取り囲まれ、何も考えなくとも、前に進めば目的地につくと言う状況だからできることだ。

すぐ脇の馬車では、友人が、書類をめくっている。

彼は彼で仕事がある。

色々と情報網を駆使して、今向かっている館の情報を集めていた。サウスバルトの館は、本来ならば、もう少し跡に向かうはずの場所だった。

サヴォワの南端に位置し、首都カラバールから外れた場所にある。無論敵の首魁は首都カラバールに陣取っている。そして、少しでもそれを攻略しやすい場所に本拠を置きたいレオナルドにとって、さして重要視されない土地だった。

しかし、そこにミリエルがいるという。

ミリエルが、行方をくらまして、早一月になろうとしている。

その間情報は一切入ってこなかった。

あの時自分が馬車に乗っていれば、どれほど後悔しても足りない。かなり信憑性が低いとはいえ、ミリエルの行方を指し示す唯一の手がかりだ。逃すわけには行かない。

覚えているミリエルは、人形のような少女だった。

表情が乏しくて、それでいてはつきりと物を言う。

なまじ整った顔をしているが、それ以上の感慨を呼び起こさない顔だと思った。

最初は。

しかし、表情が動かないのは余り物事に動じない肝の据わった少女なのだとわかった。物事に動じることを自分に許さない厳しい考え方をする少女なのだとも。

その精神のありようはどこか悲しいものがあつた。

自分という時は、いつも何かを耐えている。そのことが少し悲しいと思った。

ぐるぐるとミリエルの顔が浮かんでは消えた。

その知らせが、届いたのはその日の早朝だった。ミリエルは、自分にあてがわれた部屋の掃除をしてから朝食をとりに行く予定だった。

王 太子がもうじきこの館に到着する。ミリエルにとって待ち望んでいたのか、それとも先延ばしにしたかったのかわからない知らせ。それを何故か部屋の前に立っていたクライストがこっそり教えてくれた。

クライストに対してミリエルは違和感を覚える。

いままでこんな風にミリエルに話しかけてくることがあっただろうか。クライストの態度の変化にミリエルは薄気味悪いものを感じた。

雑巾を片付けると、ミリエルは手を洗って、食事を調達に調理場へと向かう。

料理を盛ったトレイを二つ持ってまずマルガリータの部屋に向かう。

ドアの前で声をかければマルガリータはすぐに扉を開けてくれる。そしてさっきくらいストが来たと告げると意外そうな顔をした。

「私のところにはまだ来ていないぞ」

トレイを受け取りながら呟く。

「ミリエル、気をつける」

この時、マルガリータは、初心な少女が悪い男に騙されないようにという意味で言っていた。

しかしミリエルはそれを襲撃に気をつけるという意味にとった。

ミリエルは表情を引き締めて頷く。

「もちろんです、マルガリータ様」

やはり、モーニングスターは敵の襲撃がなくとも身近においてお

かなくては。

決意も新たに誓う。

「それで、王太子は、明日この館にたどり着くわけか」

ミリエルからもたらされた情報にマルガリータは、明日の予定を立て始めた。

再会

それは平均的な地方領主の館に見えた。

そしてその周囲をマーズ將軍率いる部隊が駐屯し、周囲に天幕が張られている。

マーズ將軍は恭しく王太子を出迎えた。

「ご苦労だったな」

マーズ將軍はさして体格に恵まれているほうではない。彼は純粋な頭脳派の軍人だ。無論軍人としてのたしなみとして、最低限の武術は身につけているが周囲の軍人達よりこぶしひとつ分くらい小柄だ。

その副官も細身で、さして強そうには見えない。彼の場合は見かけによらずで相当の剣術の達人だ。

王太子レオナルドは長身だが体格は平均といったところ。その三人が、堂々たる以上部に取り囲まれて進んでいく。

その背後では、レオナルド護衛騎士と忠誠を誓った貴族の一部が一行に並ぶ。そして、その最後尾にパーシヴァルとその配下達も付いていつていた。

「まずはミリエル姫のご機嫌を伺うか」

レオナルドは皮肉に唇をゆがめた。

マーズ將軍も苦笑する。何しろ余りにもわかりやすい偽者だったから。

あのわざとらしいベールで疑われないと本気で思っているのだろうか。

「その前にお耳に入れたいことがあります。実は」

そう言つてミリエル姫に面会を申し出た貴族の一部がミリエル姫の暗殺を試みたことを伝えた。

「まあ、それは阻止してもらつてよかったが。何しろミリエル暗殺なんて情報が広がったらそれはそれで厄介だから」

レオナルドはそれは受け流す。しかし、リンツァーがサヴォワ侵略をたくらんでいるという噂が広まっているのはこれからの計画に更なる支障が出そうだ。

そんなことを考えながら、ミリエル姫にあてがわれた部屋に通された。

まず最初に出迎えたのは黒尽くめの騎士だった。

騎士は無愛想に一礼して、扉を開ける。

扉の向こうにいたのは、最初はおそらくこの館の女中達。そしてサザウィー男爵家の女中が二列になっていた。

そして部屋の中央に置かれた椅子にベールを付けた女が坐っていた。

レオナルドは薄く笑ってその椅子に近寄ると手の甲に口づけする。「愛しい人、どれほど久方ぶりでしょう」
情感たつぷりにそう囁いた。

コンスタンシアは、全身冷や汗でびっしょりだった。どうやらいきなり偽者扱いはしないらしいが、いつ気が変わるかわからない。

王太子は、久しぶりに会った恋人に対する睦言を延々と囁いている。自分はただ無言で頷くことしか出来ない。

「あなたのリ्यूトが忘れられなかった。またあの曲を奏でてくださいか」

その言葉に、元々下がっていたコンスタンシアの血の気が一気に引く。

貴族の娘は嗜みとして、楽器の演奏を習う。しかしコンスタンシアが習ったのはフルートだった。リ्यूトは触ったこともない。

ぼろが出るから一言もしゃべれない、というか、婚約者同士なのにベールをとりもしないって普通おかしがるだろう。

その背後、女中達の隙間から、ミリエルが冷ややかな眼差しを送っていた。

間に合わなかった王子様

顔に笑みの仮面を貼り付けて、そのままミリエルは怒り狂っていた。

あの態度は何、誰でもいいって言うの。

もし何か握っていたら確実に跡形もなく砕け散ったであろう力で拳を握り締める。

「王太子様は帰ったそうですね、じゃ、あたし用事があるから」
そう言つて、そのまま庭園まで出て行つた。

庭園といつても美しい花々も趣のある木々もない、ただ広だけの広場に申し訳程度に草木が植えてあるだけの代物だったが。

まさかあんな態度をとるとは思わなかった。当然真贋を確かめると思つていたのに。

やさぐれた気分のままミリエルは庭園をほつつき歩く。

もう秋も深まり、花などほとんど咲いていない。咲いていたとしても今のミリエルの目には入らなかつたろう。

もう決まり破談だ破談。でも、その前にやっぱり殴っておくべきだろうか。

ミリエルは荒んだ目で、上階貴人が泊まる予定の部屋を覗んだ。
その時、唐突にミリエルの肩をつかんだ者がいる。振り返れば見覚えのない顔だ。

以前から雇われていた傭兵なら、ここ最近顔も覚えたが、この顔に見覚えはない。

だとすれば、マーズ將軍が連れてきた一般兵あたりだろうか。
そう当たりをつけたミリエルは、にこやかに笑つて見せる。

「何か御用でしょうか」

しかし相手は無言だ。そして体格のいい男たち三人にミリエルは取り囲まれていた。

「たまにはいいだろう」

「そうですね、女中のつまみ食いぐらい」
その会話を聞いて、ミリエルはようやく状況が飲み込めた。
ポケットの中の手甲をこっそりとスカートの陰に隠れて身につける。

建物の影になる場所に引きずっていく間わざと動かなかった。
建物の死角になるその場所にたどり着いたとき、唐突にミリエルは動いた。

思いっきりわき腹に、手甲で拳を叩きつける。

よろけたところに回し蹴りを叩きつけた。

余りのことに一瞬ほうけた。その隙を狙って懷に飛び込む。

今度はみぞおちに、拳がめり込んだ。

胸を押さえてくず折れる男から飛びのいてはなれ、そしてスカートのめくりあげられた。

腰に巻かれた細い鎖、そして鎖に付けられた鉄球が白いペチコートに映えていた。

軽快な音を立てて、鎖を引き抜く。

ミリエルは自分の身体前方で鉄球をぶんぶんと回す。突っ込んでくれば鉄球の餌食だと威嚇していた。

じりと少しずつ男達は間合いを詰めてくる。ミリエルもまた半眼になって間合いを計る。

一人が射程内に入った。ぶんとうなりを上げて、鉄球が飛んだ。
右半身側にいた一人の大腿骨を砕いた。

ところがその時、もう一人がミリエルを背後から羽交い絞めにした。

そのまま閉め落とそうとしたとき、ミリエルは逆に身体の力を抜いた。

そしてそのまま前方に体を倒す。そして後ろ蹴りで相手の足首を払った。

相手は奇麗に弧を描いて地面に叩きつけられた。

そのまま倒れた相手にかかと落しを叩き込んで止めを刺す。

倒しても念のため止めを刺せと母にしつけられた結果だ。

それでも残る二人は意識を保ったままだ。さてどうしようかと思
ったとき再び、誰かがミリエルの肩を掴んだ。

「お嬢さん、話を聞かせてもらおうか」

掴んでいたのは、確か、マーズ將軍の側近じゃなかったかなとミ
リエルは記憶の底を叩く。

「君は何者でここで何をしている」

デニスは厳しい目でミリエルを睨む。さもあらなん、確かにミ
リエルは怪しすぎた。

「順番を私に回してもらえるかな」

唐突に二人の間に割って入ったものがある。

「私の質問が先だよ、ミリエル・アレクト・リンツァー」

王太子の言葉に死にも似た沈黙が降りた。

間に合わなかった王子様（後書き）

危機一髪を地力で乗り越えたあとにようやく王子様登場。哀れすぎます。

レオナルドが間に合わなかったわけ（前書き）

何故か昨日投稿できませんでした

レオナルドが間に合わなかったわけ

レオナルドは、一度ミリエル姫の部屋を辞去した後、鬱陶しい従兄弟を適当な理由をつけて遠ざけた。

そして、部下の一人に一度ミリエル姫の様子を見に行かせた。しかしその騎士が、そこにたどり着いたときにはミリエルは、庭園に出た後だった。

その知らせを受けて、紋章付きの王太子の上着を脱ぎ捨て、それから部下の上着を強制的に借り庭園に出だ。しかし、その時にはすでにすべてが終わっていた。

ミリエルの危機に間に合わなかったのだ。

ミリエルは、その時すでに実力で、それらを粉碎していた。

もし、自分が駆けつけて、ミリエルを救い出せていたら。

その仮定は、レオナルドのプライドに少々罅を入れた。

ミリエルは大きく目を見開いて、レオナルドを見ている。

そして、そんな二人を、硬直状態でマーズ將軍の部下達が凝視していた。

「ミリエル、どうしてここにいた？」

「ええと、ここが王太子に味方する貴族の館だって聞いたから、そのうちこの館を訪れることもあるかなって思ってた」

ミリエルがたどたどしく答えた。

「何故名乗らなかった？」

「そんなの、信じてもらえないじゃない。証拠は、この指輪だけなんだし」

そう言って首に下げていた指輪を取り出す。

「こんなもの、そうそう証拠として採用されないって、どこから盗んできたって疑われて取り上げられるのが関の山だと思っただし」

そこまで行っただけミリエルはそっぽを向く。

「それにすぐ気が付いてくれなかったみたいだし」

ミリエルが横目でレオナルドを睨んだ。

「それにすぐ気が付いてくれなかったみたいだし」

ミリエルが横目でレオナルドを睨んだ。

「すぐに名乗り出なかったのは貴方でしょう」

「だって気付いてくれなかったじゃない」

「気付いたからここにいるんでしょう」

二人はしばらくにらみ合った。

「それで、戻ってくる気はあるのか」

「あります」

ミリエルは搾り出すように答えた。

「でもあたしじゃなくてもいいじゃない」

「ミリエル、君は何を言っているのかな」

「あつさり信じたよね、あの偽者に随分とお熱だったじゃない」

言われてレオナルドは呆れた。どうやらミリエルは、あのミリエル姫に対する対応が気に食わなかったらしい。

「あれは純粹に、単なる牽制ですよ」

「牽制？」

「向こうも私があるを本物だと信じているとは思ってもないでしょう。あえて本物だという態度を示すことで、尻尾を出すのを待っているんです」

「尻尾って言ったって」

コンスタンシアはもう限界だろう。尻尾を出すも何も、彼女本人の芝居、というか演技というかそれは、ミリエルの見たところとうに破綻している。

「つまり、あの人をミリエル姫に仕立て上げた誰かをあぶりだしたいの？」

ミリエルの答えに、レオナルドは満足げに頷く。

「あれを偽者と断じて裁くのは簡単です。しかし、それでは真の黒幕まで辿り着けない。だからしばらく泳がせます」

ミリエルもすぐに納得した。

コンスタンシアはただ利用されているだけだ。それを立証しなければならぬ。

「わかった、それじゃあたし、しばらくあの人のところで女中として詰めてるね」

「ミリエル、私は貴女にそんな密偵のようなことをさせるわけには行かないですよ」

「急に貴方があたしを引き取るほうが不自然よ、それにね、切り札は隠し持つものよ」

ミリエルは悪戯っぽく笑う。

「わかりました、危険な真似はしないように。それと、定期報告の必要がありますね、適当な理由をでっち上げなければ」

「それはそっちに任すわ」

レオナルドは、ミリエルからデニスと、倒れた兵士達を見据えた。

「今聞いた話は、他言無用だ、それと順番だったな」

デニスは、小さく首を振った。

「聞きたいことは聞いてしまいましたので、ですが、マーズ將軍に報告しないわけにはいきませんが」

「それは私から話しておく」

レオナルドの言葉に、ミリエルもこくこくと頷いた。

「それでは、ミリエルこれから妻として戻ってきてくださるんですよね」

そう言つてミリエルを引き寄せた。

レオナルドは顔を近づけ、唇が触れた。

「これは手付けです」

ミリエルは脱兎と化して逃げさった。

それぞれの憂鬱な時間

マーズ將軍に届いたのは、急な負傷者が出たという知らせだけだった。

救護室代わりに使っていた部屋に着くと、見覚えのある顔が、三人ベッドに並んで寝ていた。

「喧嘩でもしたのか？」

報告してきた部下にそう尋ねてみた。デニスは静かな目でベッドを見下ろしながら、こたえた。

「ええ、一対三で戦ってこのさまです」

「それなら一人足りないようだが」

「相手は無傷でしたから」

それには純粹にマーズ將軍は驚いた。

「まあ、かなり凶悪な凶器使用ですが、そのくらいのハンデはあつてしかるべきでしょう」

その相手に興味が抑えきれない。

「あのお嬢さんです」

あのと云われれば、どのお嬢さんかはすぐにわかる。あの妙技を披露してくれたお嬢さんだ。

「どうやら不埒なことを企んで返り討ちにあつたようです」

「やれやれ、俺も部下の再教育が必要だな」

「むしろ大問題でしょう」

心なしが部下達の顔色が悪い気がする。それは負傷だけが問題ではなく。

「あのお嬢さんの本名は、ミリエル・アレクト・リンツァー。次代のサヴォワ王妃になれる方です」

その時、マーズ將軍が思ったことは、今妙なことを聞いたということだった。

「王太子殿下が送られた、婚約指輪も確認いたしました。王太子妃

殿下はご無事、それは重畳なのですが」

そう言つて、ベッドの上の三人を横目で見る。

「どういふ処分にいたしますか」

そういわれてしばらく考え込む。

王太子妃に妙なまねをしようとしたなら、普通は死罪が適当だ。

しかし、あつさり返り討ちにあつたこの状況を考えれば、それは少し惨い気もする。

「しかし、こちらの面子を考えれば死罪にしないわけにも」

その言葉に覚悟を決めたのか、悄然と全員うな垂れる。

「しかしだ、それは王太子殿下にお詫び申し上げて、それから決めることにしよう」

その言葉に希望を持つものは誰もいなかった。

レオナルドはうんざりと、サザウィー男爵の長々しい自慢話を聞いていた。

あとでミリエルのことをパーシヴァルに伝えたと、彼はここに来る前に、ミリエルがこの館に知っていることを知っていたというのだ。

サヴオワにいる。サフラン商工会の情報網を使ったのだとあつさり言つた。

西大陸の商業血管といわれるサフラン商工会の情報網は、多少時間がかかってもほしい情報は大概手に入るのだと笑つた。

このとき初めて親友をぶん殴りたい衝動に駆られたが、このか弱い親友をぶん殴つた場合のことを考えて押し留まつた。

その際、ミリエルが行方をくらました本当の理由らしきことも教えてくれた。

方向音痴、聞きなれない言葉だつた。なんでも地図を見ても反対方向に進んでしまうという感覚不調のことらしい。

ただそれで、ずっとミリエルがここを動かなかつた理由がわかつた。

一箇所に留まつてひたすら待つ、それも迷子になつたときの対処

法だ。

ミリエルに他意がなかったことを確認して、少し安心した。そんな気分をぶち壊しにしてくれるのが、このサザウィー男爵の自慢話だ。よくまあ見てきたような嘘をつけると感心してしまう。

とつくに本物のミリエルを保護？し、たくらみの底がいまや見えつつあるという状態だと知ったらどんな顔をするだろう。

ベールの女、コンスタンシアと言う人なの。とミリエルが言っていた。

どうやって名前を聞き出したのかそれは問い詰めてみ答えなかった。

鎌をかけたらあっさり白状したと聞いていたが、それなら何でミリエルが無事にいるのかそれが不思議だ。

閑話 レオナルドの奇立ち

レオナルドはいらいらとその様子を見ていた。
ミリエルが黒髪の騎士のもとになにやら料理の載った皿を届けている。

にこやかな笑みを交わす二人を横目に足早に自分にあてがわれた客間に戻る。

「どうしたんだ、王太子殿下は」

「さあ、どうしたんでしょうね？」

ミリエルも不思議そうにして、ほとんどミリエル姫の警護に付きっぱなしのマルガリータに軽食を届けながら。何で睨まれたんだろうと怪訝そうだ。

レオナルドにあてがわれた部屋には、すでにパーシヴァルが入っていて帰ってきたレオナルドに笑いかけた。

「なんかあったの、機嫌が悪そうだけど」

「もしそうなら原因の一端は君にあると思うが」

ミリエルと接触したと伝えたとき、彼は驚かなかった。すでに知っていたと答えられたときの憤りは、今も胸にくすぶっている。

「だってちょうど行き先だったもの」

と答えられたときはどうしてやろうかと思った。

「ミリエルが妙にあの騎士と仲良くしてた」

「ああ、迷子のミリエルを保護してくれた人だろう。僕もあとでお礼を言わなきゃ」

のほほんとパーシヴァルは答える。

「そういえば、なんなんだあの特技は」

ミリエルのモーニングスター捌きを始めてみたレオナルドの感想だった。

あの時は平静を装っていたが、顎が外れるかと思った。

「サン・シモンの伝統技能だよ」

「あんな物騒なもん、伝統で伝えるな」

レオナルドの雄たけびにパーシヴァルは人差し指を口に静かにと諭す。

「仕方ないよ、母上は、リンツァーからサン・シモンの国境を越えるまで何度も刺客に襲われて、それをあの伝統技能で乗り切ったんだから」

そう彼の母アマンダは当時乳飲み子だったミリエルを抱え、幾多の死線を切り抜け、サン・シモンのグランデの実家に辿り着いた。

「そんなお母さんからどうしてお前みたいなのが生まれたんだ」

心底それは疑問に思う。

「氏より育ちつて本当なんだねえ」

細く長い繊細な手を光にかざす。この場合意味が逆な気もしたが、パーシヴァルは平然としている。

「それで、これからどうするの」

「ミリエルが見つかった以上ここに長居する理由があるか」

レオナルドはすでに次の局面を見ている。

「ああ、例の男爵の片を付けたらすぐに戻るわけね」

パーシヴァルもそれは心得ていたのか驚かない。

「あんなもん、これ以上見てられるか」

あんなもんという形容詞に付随する存在の片割れが実は女であることをパーシヴァルはすでに知っていたが。それを今という気はなかった。

そのうちミリエルあたりが自分で伝えるだろう。

「ま、しばらくやきもきさせとくか」

パーシヴァルは含み笑った。

閑話 レオナルドの奇立ち（後書き）

パシヴァル、根性どどめ色です。

再びの姫君

これも久しぶりだなと、ミリエルは思う。今ミリエルが着せられているのは、豪華な錦織のドレス。

見覚えのある女官達が、ミリエルを着付けている。

「あの、どうしてこんな格好を？」

「王太子殿下のご命令です」

女官たちはそれだけを言うと、更に髪を結い上げ、化粧を始めた。刷毛が顔をこする感触がこそばゆい。

確か自分は部屋の掃除を命じられて、この部屋に入ったはずだな。

そう思ったが、見知らぬ少女が部屋の隅で箒を使い掃除を始めていた。

「あの子、誰」

「ただの下働きです、姫が気になさる必要はございません」

言われてミリエルは黙る。そして化粧中なので顔は動かせないの
で視線だけで掃除をする少女の様子を伺う。

背格好はミリエルと同じくらいだろうか。しかし、薄茶の髪と、
雀斑の浮いた顔は健康的に見えるが少女らしい華やかさとは無縁だ。
そして少女も、掃除をしながら、ミリエルの様子を伺っていた。

少女は時々ミリエルのドレスを着させられて、ミリエルの替え玉
を務めていた。生まれて初めて着た豪華なドレスは少女にうっかり
夢を見させてしまった。

さっきまで女中の格好をしていたミリエルが、錦織のドレスを身
につけ化粧を施された様は、少女とミリエルの素材の差をまざまざ
と見せ付けた。

もって生まれたものが違うと、こうも違うのかと世の不公平さを
少女は呪った。

ミリエルは背筋に嫌なものを感じながら、化粧を施されていた。

まるで自分の顔が画布になったような気がする。

ねっとりとした赤で彩られた唇は、素顔よりもぽってりとした印象を与える。

ミリエルの唇は元々小さくて薄い。丸い目以外のパーツはすべて小ぶりだ。

それを大きく書き換えられている気がする。

ミリエルの化粧が終わると、パーシヴァルが入ってきた。

「これから、何があるの」

外見だけは完璧な淑女がぞんざいな言動を取った。

「レオナルドがね、もう嫌になったみたいで」

「嫌について何が？」

「サザウィー男爵の恩着せがましい言葉が」

それにミリエルは沈黙した。無理もないと思う。話を聞かされている対象でないミリエルにとっても弾に流れてくるそれを聞き流すのすら苦痛だったのだ。

「ちゃっちゃとけりをつけてここを離れるって」

パーシヴァルはそう言って、ミリエルを部屋の真ん中のソファに坐らせた。

「君の出番はまだだから、それまでここでお茶でも飲んでてよ」
パーシヴァルはそう言って、笑った。

レオナルドと、その前には、サザウィー男爵。

レオナルドはおもむろに口を開いた。

「男爵、ミリエル姫はいまだに、以前のようにリユートを奏でてくださいらない。何故でしょうか」

サザウィー男爵の横に、ミリエル姫は小さくなって坐っている。

何を言われようと、王太子の前でまともに彼女が口を利いたことはない。

「手を傷めておられるのでは、何しろたいそうな痛手を負われているところを救い出したしましたから」

「そうでしょうか、そのような様子は見られないようですが、むしろ、最初から弾けないのではないですか」
レオナルドが確信を付いた。

化けの皮はがし

レオナルドは一言そういうと、サザウィー男爵の出方を待った。サザウィー男爵はにこやかな仮面を被りレオナルドを凝視している。

「何が言いたいのですか」

「確か、男爵は、少々前にご息女を亡くされたはずだ。確かにご息女は亡くなったのですか」

レオナルドは側近の部下に、密かにサザウィー男爵を探らせていた。

しかし、サザウィー男爵に近づいた物はおらず、ただ、十代半ばの娘の葬式が最近あったということ。それがミリエルを発見したというサザウィー男爵の声明と前後している。そこにかけた。

レオナルドは、密かに、その娘、コンスタンシアの墓を暴くように部下に指示した。

ミリエルも、偽者に仕立てられた娘の名はコンスタンシアだといっていた。

ここにいるのは、サザウィー男爵の次女コンスタンシア。それで間違いないはずだ。

レオナルドは厳しい目で二人を見た。

「サザウィー男爵正直に話せば私としても厳罰に処するつもりはない。数少ない味方を減らしたくはないからな、しかし、あくまでシラをきりとおすならばこちらとしても相応の手段をとらせてもらう」
背後でこの館の領主が、動揺している気配が、見なくても十分にわかった。

丁重にもてなしてきた王太子妃が偽者だといわれればどういう反応をするか、それを知るのにさしたる想像力はいらなかった。

何か言おうとしているのだろうが、喉に張り付いて声にならない

ようだ。

そしてコンスタンシアは何も言う気配もなく微動だになかった。そろそろ頃合だと覚悟を決めていたからだ。

いかにも甘く囁く王太子の目が笑っていないのに気付いたのは何度目の邂逅の時だっただろうか。

いや、即怪しまれると今の状況を読めないほどコンスタンシアは愚かではなかった。

おそらく最初から気付いていた。そしてリユート云々は自分を引っ掛けるためにわざと言っていただけだ。そのくらいの判断はできた。

「偽者ですと、ならば本物はどこにいるというのです。リンツアー国王に、貴方の下された姫君がどこにいるかわからないとおっしゃるおつもりで」

サザウィー男爵が勝ち誇った声音で言った。

「本物のミリエル姫を出すことができない以上、これが本物のミリエル姫なのです」

「なるほど、開き直ったか」

そして背後を振り返る。

「今の言葉、言質として証人になってもらおう」

レオナルドは背後で絶句している領主にそういった。領主はカラクリ人形のように首を前に振ることしかできない。

扉の前でマルガリータは困惑していた。扉の前に立っていると聞く気がなくとも中の話は丸聞こえになるのだ。

聞いてしまった内容はとてもおっぴらに吹聴できるような内容ではなく。うすうす予感したことではあっても。それが真実だと断言されると、また別の感慨を覚える。

今は聞かなかったことにしてほうつかむりを決め込もう。そう決意して、扉の前から少し身を離れた。

その時、ひそやかな衣擦れの音がした。

地味な女官のお仕着せを着た女達、その背後に、煌びやかな衣装をまとった少女が歩いてくる。

その一団が扉の前で止まったとき。一番豪華な衣装を着た少女の顔が見えた。

濃い目の顔料で顔を彩っていても、マルガリータは厚化粧だった姉を見続けたため、どんなに厚化粧をしても、その下の素顔を見通すという特技を持っていた。

元々薄い唇をてらてらと光る紅で塗りつぶしていても。それが誰か容易にわかった。

マルガリータの困惑は先ほどの比ではなかった。

化けの皮はがし2

扉の前で、中の様子を伺う。

「あー、そろそろ佳境だね」

パーシヴァルは、扉に顔を近づけて中の様子を伺う。

「そろそろ出番だけど、いいの、ミリエル」

ミリエルは無言で頷いた。

ふと、扉の前で、物凄く何か言いたそうな顔をしているマルガリータに気付いた。ミリエルはまず人差し指を唇に当ててそれから小さく笑った。

レオナルドはかすかな衣擦れの音を聞き取った。

「どうやら役者がそろったようだ。」

「ではサザウィー男爵、この偽者をミリエルと偽り、娶れとおっしゃる？」

「それが一番状況をまとめられると思われます。それに私少々調べましてね」

サザウィー男爵はニタリと笑う。

「ミリエル姫は、幼少期リンツァーを離れ、それから最近まで隣国さん・シモンでお育ちとのこと。ならばその容姿を知るものも、そして個人的な知り合いもほとんどいない。ならば少々入れ替わったとしても、気付かれる恐れはほとんどありませんぞ」

まくし立てるサザウィー男爵をレオナルドは冷たい目で睨む。

「それで、もし本当のミリエルが見つかったときはどうする、偽者を自分と遇していたと彼女が知ったならどうなると思う」

「小娘一人くらい、どうにでもなるでしょう」

「つまり、本物がいたとしても、あくまでこの偽者を本物として遇せと言ひ張るのだな」

レオナルドはそのままサザウィー男爵を睨む。

「あくまで、自分の娘を王妃として扱えと言い張るのだな」
その言葉に、背後の領主は硬直する。

「サザウィー男爵、それではまるで篡奪ではありませんか」
震える指で、ベールの女を指差す。

「篡奪、何のことですか、王位につくのは正当なる王レオナルド様、ならば王妃の出自など些細なことですよ」

「そして、正当な王の弱みを握るというのが目論見か、サザウィー男爵。本来のサヴォワ王の姪にして養女ミリエル姫の身柄が脅迫内容ということになる」

「しかし要求を呑むしかない、何故ならミリエル姫はもうこの世のものではないのだから」

「ミリエル姫に、何か仕掛けたのか」

「まさか、行方をお探し申し上げただけのこと、しかし、これだけ探してもどこにもいないなら、もはや生きてはおるまいと判断したと手間違っではないでしょう」

「残念ながら、間違っている。ミリエルはすでに私の手に戻っているですよ」

意外な言葉にサザウィー男爵と背後の領主も仰天した。

「どこにいるというのです、そのミリエル姫が」

「今、ここに来ています」

そして、扉が開く。

「お初にお目にかかります。サヴォワ王国王弟、パーシモンの長男、パーシヴァルと申します」

最初に扉を開けたのは、金髪の麗しい貴公子。そしてその背後に女官が立ち並び、その真ん中に金髪の小柄な少女が建っていた。

「ミリエル・アレクト・リンツァーと申します」

そして少女は恭しく、貴婦人の一礼を取った。

「それで、サザウィー男爵、このミリエルをどうするべきかな、それともミリエル、このミリエルを名乗る女性をどうしたい？」

いきなりそれが、とミリエルは息を呑んだが、それでも取り繕っ

て笑みを浮かべる。

「殿下、それは殿下がお決めになることですわ」

しとやかに、ミリエルはレオナルドに寄り添う。

そして、扇で顔を隠しながらそっと、コンスタンシアの方を窺った。

とつくに取り乱して半狂乱になっているかと思ったが、コンスタンシアはいたって静かだ。

あるいは坐ったまま気絶しているのか。

その時、背後から駆け込んできたものがある。

「違います、この女は、さっきメイドの格好をしていたんです」

そうまくし立てたのは、さっき部屋の掃除をしていた。雀斑の少女だった。

化けの皮はがし2（後書き）

74話に痴話げんかと仲直りを挿入しました。

化けの皮はがし3

気まずい沈黙が辺りを包んだ。

ミリエルは、すでにこの館の女中の顔をすべて覚えてしまっている。だから、この雀斑の少女が、レオナルドに随行してきた使用人の一人だということはわかっていた。

その少女が、ミリエルを偽者だという。

このような展開は予想していなかったのかパーシヴァルもしばらく呆けていた。

「とりあえず、この娘を外に」

そう言っただけで外にいたマーズ將軍の部下とマルガリータを呼ぶ。

入ってきたマルガリータは、先ほど、忘れ物を届けたいといって中に強引に入った少女が、ミリエルを指差して、わめき散らしている。

「信じてください、この人はお姫様なんかじゃないんです」

そう言っただけで少女はただ泣き崩れている。

マルガリータは、無言で少女の腕を掴んだ。

「とにかく、後で話を聞く、今はそういつときじゃないだろう」

そう言っただけで少女を宥めようとする。

しかし、背後で更に不穏な言動を取り始めるものがいた。

「ちょっと待て、もしかしてこの娘、お前がメイドだといって連れ込んだ娘じゃないか」

領主が、マルガリータを不穏な目で睨んでいた。

マルガリータの背筋に冷たい汗が伝った。

これはまずい、こちらまで飛び火した。

そう悟ったマルガリータはミリエルを見たが、両手を組んでフルフルと首を振っている。

可愛らしい仕種だが、それに和んでいる暇はない。

王太子を見ると、額を覆って頭を抱えている。そのまま何事か考え込んでいるようだ、いまだ行動を起こさないところを見ると妙案はまだ浮かんではいないようだ。

その時、思いも寄らないところから事態が動いた。

いつの間にか、椅子に坐って微動だにしなかった。今の今まで忘れられていた女が立ち上がった。

そしてゆるりとミリエルのいる場所まで歩いていく。

そしてミリエルの前に跪いた。

「この方が、本物のミリエル姫だと思います」
静かな声だった。

「父から、ミリエル姫に成りすませと命じられたとき、私は窓から飛び降りて自害すべきでした。それを命惜しさに成り行きに任せ、このような事態を引起した罪は償いようのないこと。これより神妙に裁きを受けます」

そう言って両手を組んでうなだれる。

「何を言っている、コンスタンシア、どんな根拠があつて、メイドをしていた女が本物だと」

余りのことに、自分の娘の本名を言ってしまったことにも気付いていない。

コンスタンシアは、途切れ途切れにミリエルに訴える。

「貴女は私がリンツァーの血を受けていないと告白したとき、そんなことは知っていると答えられました。それを確信できるのは誰か、それは本物のミリエル姫だからではないかとようやく今思い当たりました」

ミリエルとしても次の出方がわからない。まさかコンスタンシアがこんな思い切った行動に出るとは完全に予想外だった。

出方がわからず困惑しているのはミリエルだけではなかった。

王太子レオナルドも、パーシヴァルもサザウィー男爵も次の打つ手がない状態だ。

「とりあえず、関係者の証言が出たので、サザウィー男爵を拘束し

ましよう」

結局動いたのは、廊下で様子を伺っていたマーズ將軍の副官、デニスだった。

騎士達がさくさくサザウイー男爵を拘束していくその光景を一同毒気の抜けた顔で見守っていた。

後日談

ミリエルは、ぼんやりと自分の前で平べったくなっている男を見ていた。

「妃殿下とは知らず大変なご無礼を」

この館の領主は、床にはいつくばってミリエルに廊下磨きや雑草むしりをさせたことをひたすら謝っている。

ミリエルの視界からは、後頭部しか見えない。

ミリエルとしても自分が本当のことを言わなかったせいだし、別に女中仕事は苦痛ではなかったのでそれほど気にしていなかった。それはミリエルの背後にいる、パーシヴァルやレオナルドも認めている。

しかし、彼にとってはそうではないらしい。

仮にも王太子妃に対して、洗濯や掃除を命じてしまった。

その自責の念に駆られている。

「ほっといたらこのままずうつとここで土下座しているよ、ミリエル、君が他に行ったほうがいい」

さすがに疲れたのかパーシヴァルがそう提案した。

ミリエルは、女官たちに囲まれて、別室に下がることになる。

そして、その別室に戻るとさくさく女中の制服に着替えた。

「あの、このまま殿下とご一緒するのでは」

女官の一人が怪訝そうに尋ねる。

「あ、自分の部屋に荷物をとってくるだけよ。あの格好で女中部屋に入れないでしょう」

錦織の豪華なドレスで女中部屋に入れば、いらぬ耳目を集める。そして、かさばるあのドレス姿では、膨らんだスカートが引つかり物理的に女中部屋に入れない。

ミリエルは結び上げてあった髪をほどくと無造作にボンネットに押し込む。

そして足早に、自室へと向かった。

何しろあれを置いていくわけには行かない。

母の心づくしだけでなく。大切な暗器もあるのだ。やはり、どうしてもあれが手の届くところがないと落ち着かない。

ミリエルは、最近ではすっかりなじんでしまった小さな自室に戻ると、荷物をまとめ、それから簡単に掃除し始めた。

といつても、小さめの雑巾で床や棚をからぶきするくらいだった。荷物といつても、元々黒鞆に収まる程度、掃除を含めてもかかった時間はせいぜい五分。

ミリエルは、鞆を片手に、その部屋を後にした。

マルガリータは、マーズ將軍の使っている部屋に通された。

マルガリータの部屋よりやや大きいが、この館の内装はどの部屋でもそう変わらないようだ。

「それで、これからどうするつもりだ」
部屋に入ったとたん、率直に聞かれた。

それはマルガリータが聞きたいことあるいは今考え中のことだった。

この館に滞在していた理由はもうない。

王太子は、別の場所に向かうし、領主も、傭兵を雇い続ける気になくなってしまったらしい。

マルガリータは新しい雇い主を探さねばならないだろう。

ミリエルは、王太子と行くことになるのだろう。

ミリエルに今後を頼む気はなかった。

おそらく、頼みさえすれば、ミリエルはいくらでも骨折ってくれらるだろう。その程度にはミリエルのことを理解していると思っている。

頼まないのは、マルガリータの矜持だ。

「実は、妃殿下の護衛官を募集している」

その言葉に、マルガリータは、顔を上げた。

「女性の護衛官がいれば、色々と助かる」

マルガリータは苦笑した。

マルガリータは苦笑した。

「それはミリエル姫のご要望ですか」

「いや、私の判断だ」

咳払いしてマーズ將軍は話を続けた。

「コンスタンシア・ベル・サザウィーの墓を暴いた者達からの報告だ。棺には、腐敗が始まっていたが、若い女と思われる遺体が入っていた」

マルガリータは息を呑んだ。

「いくらサヴォワが荒れていたとしても、果たして若い女の死体がすぐに調達できるものだろうか」

マルガリータは將軍の言外の意味を悟った。

「無論、身寄りのない病死した女の遺体であつてほしいとは思うがな、つまり、妃殿下を取り巻く状況はあらゆる可能性を考えねばならぬほど危険だということだ」

「お話お受けします」

マルガリータはしばらく考えて、そして了承した。

始まるのときから（前書き）

前話でラストをだいぶ書き換えました。

始まるのときから

ミリエルは廊下を走らないぎりぎりのスピードで歩いていた。

その時、ミリエルの前を急に塞いだ者がいた。

「悪いなお嬢ちゃん」

ぶつかると前で止まったミリエルはクライストの顔を見上げた。

「あ、クライストさん、何か御用ですか」

「えらくめかしこんでるな、どこで調達したんだ」

言われて、ミリエルは、化粧を落としていなかったことに気付く。

「え、ええと、お姉さんにしてもらったんです」

適当なでつち上げをほざいてごまかし、その場を離れようとする。

「じゃあ、その指輪は？」

ミリエルの薬指に嵌まった、婚約指輪をさした。

「悪いな、お姫様、黙って付いてきてくれないか」

ミリエルの首筋に短剣が突きつけられた。

ミリエルの頬が引き締まる。

「裏切り？」

「いいや違う、元々お姫様の命が所望でね」

クライストは刃よりも鋭く笑った。

ミリエルがつれてこられたのは、屋敷の隅、灌木が茂って人目を避けられる場所だった。

こっそり賊が潜むにはいい場所だと、ミリエルは人事のように思う。

「まさか女中に化けるとは、たいしたお姫様だな」

クライストはさも楽しそうに笑う。

「ミリエル姫がやってくるっていうからこの屋敷に潜んでたつてのに、やってきたのは偽者、まったく付いてないと思ったら、一緒に

来たのが本物とは」

ミリエルはとっさに鞆を後ろでの持つと、自分の身体で隠しながら、中身を取り出す。

モーニングスターは取り出せなかった。取り出せたのは二つの皮袋。

「もしかして、例の刺し殺されたって言うのは」

「ああ、俺がやった、あんなドジ、生かしておけないだろう、俺まで危くなるからな」

ミリエルは少しでも話を引き伸ばそうとした。

「お姫様、もしかして助けを待ったために引き伸ばそうとしてないか」
クライストは剣を構える。

ミリエルは、右手に二つの皮袋を隠し持ちながら、黒鞆をクライストに向かって叩きつけた。

その勢いのまま、身体を離す。

そして、皮袋の中身、ガラス玉を取り出す。

指弾で打ち出す。鉄でできた玉よりも殺傷力はない、しかし、別の意味でたちが悪い。

罇の入ったガラスでできているので、当たれば砕ける。

ガラスの粉が目に入れば、しばらく視力が効かなくなる。

三発打って当たったのは一発だけ、それも服の上なのでさほどのダメージを負わせられなかった。

「やっぱり、サン・シモンの狂犬上がりか」

クライストが、忌々しげにうなる。

「それは最初から怪しんでいたぜ、お姫様」

ミリエルは無言で、もう一つの袋を開ける。

それは、糸で繋がれたガラス玉に見えた。ミリエルはそれを放った。

クライストが、とっさにかわした時、すぐ傍の枝が断ち切られた。糸は、ただの糸ではなく髪のように細い鋼線。その切れ味は、研ぎ澄まされた剣に勝る。

「サン・シモンの狂犬って言うのは、本当に」

ミリエルは、糸に付随するガラス玉をたぐって糸を操る。

ガラス玉もいとも非常に見分けにくく。またミリエルもすばやい身のこなしで剣の射程には決して入らない。

ついに糸がクライストの首に絡まった。

「これで、俺の首はスプーンと飛ぶわけか」

「それは無理よ、か弱い乙女だから、たぶん骨で止まる」

クライストはいきなり動いた。その状態でクライストが動くなど

ミリエルは予想できず、一瞬動きが止まる。

クライストは鋼線を断ち切った。

また旅に

ミリエルの動きが止まる。

クライストの動きが妙にゆっくりとして見えた。

そのまま剣が喉もとに突きつけられる。そしてそれが喉を切り裂くと思ったその時、クライストは横殴りに吹っ飛んでいった。

「ミリエル。首に糸がかかったらすぐに引け、今度は助けてやるが、次はない」

底に立っていたのは、ウォーレスだった。

「仕事の邪魔をして悪かったが、こいつを見殺しにすれば、俺の命が危ないんでな」

まともに回し蹴りを食らったクライストは、そのまま地面を滑って大分遠い場所に倒れていた。

「やってくれたな、狂犬」

「やったがどうした」

ウォーレスはミリエルを背後にかばう。

「そのお姫様にどんな義理がある」

「サフラン商工会特殊部隊総司令の孫娘だ」

クライストは、さすがに呆れた顔になった。

「サン・シモンの狂犬どもは、随分と根回しに熱心なんだな、よもや隣国の王族にまで手を伸ばしていたとは」

「俺も初耳だった」

そのままウォーレスは間合いを無造作に詰めていく。

「俺はミリエルのような手ぬるいことはしない。留めはさせるときにさしておく主義だ」

まともに食らったはずのクライストは跳ね起きた。

そして、そのまま灌木の中に消えた。

「逃げたか」

ミリエルは、未だに、動けないでいた。

「初めてなら、たまにあることだ」

ミリエルはそのまま涙目で、再び吹っ飛んだ鞆や、その中身を拾い集め始めた。

ミリエルが、ウォーレスに保護された状態で、レオナルドの元に戻ったとき、周囲はいつせいに色めきたった。

ミリエルと、マルガリータの証言で、クライストの似顔絵が作成され、複製が作られ、配られることになった。

奈落の底まで落ち込んだミリエルは、そのまま女官たちに囲まれ再び馬車の中。

隣ではレオナルドが騎馬で付き添っている。

「随分と時間を無駄にした」

そういう言葉をミリエルは無表情に聞き流した。

「あの人はどうなるの」

ミリエルは窓に顔を向けて尋ねる。

「コンスタンシア・ベル・サザウィーのことですか」

今のところ拘束されているが、取調べ等はまったく行われていないとレオナルドは教えてくれた。

「父親に監禁されて、何も見聞きしていないようですので、するだけ無駄です。何でしたら貴女が彼女の行き先を決めたらどうです」

そういわれてミリエルは悩む。ミリエルとしても自分よりも年上の人間の先行きなどどうやって決めたらいいのかわからない。

「それをするのも王妃の仕事ですよ」

「わかりました。では目的地に着いたら面会させて」

馬車がゆっくりと動き出す。ミリエルは、背もたれにもたれて目を閉じた。

「これからまた始まるか」

周囲の馬の足音、そして馬車の車輪の鳴る音。

またリンツァーを離れたあの日の再現のよう。そしてやはり、ミ

リエルの足元には黒い鞆がある。
その中身は大分減ってしまったが。
ミリエルはつかの間眠りに落ちた。

また旅に（後書き）

ここでまた新章を入れるか考え中です。とにかくサヴオワの首都奪還目指してレオナルドはがんばる予定ですが、ミリエルはどういう絡みをするんでしょうね。

騎士と傭兵のパラドックス（前書き）

本当は、マルガリータとミリエルが出会ったときに使いたかったタイトルでした。

騎士と傭兵のパラドックス

ぬけるような青い空、木々の梢に、ややくすんだ灰色の小鳥が遊んでいる。

冬が近づいている季節には珍しく。うららかな日差しが窓から差し込んでいる。

ミリエルは、瀟洒な別荘の一室で、思いっきり暇をもてあましていた。

なんでもここは、サヴォワ王室が平和だった頃、狩猟場だった場所だという。

趣味の狩りのために、山一つ独占し、年に一週間滞在するためだけに結構なお屋敷を建ててしまふ。そういう王族の経済観念には、慣れてきたつもりだったが、所詮はつもりでしかなかったとミリエルは痛感していた。

そしてその瀟洒な別荘で、ミリエルは軟禁生活を送っていた。

ここはサヴォワの南端に位置し、森を抜ければ、サヴォワ随一と呼ばれる港のある街に出る。

そして、国境も近い。いざという時の脱出路に事欠かないということだ。

そこに、ミリエルと、ミリエルの護衛、使用人だけを置いて、レオナルドは別の場所に行ってしまった。

パーシヴァルも随行の一人を連絡係に残して、レオナルドについて行ってしまった。

ミリエルは一人でぽつねんと取り残された。

ミリエルの行動半径は、寝室と、居間、そして応接間の三つで構成された自室のみだった。

外に出ようとすれば、女官たちに止められる。

勢い、居間で窓を見ているぐらいしかすることがない。

寝る前の鍛錬は続けているが、それでも身体がなまりそうで、ミ

リエルはいらいらと爪を噛む。

「妃殿下、爪を噛むと形が悪くなりますよ」

マルガリータがお茶を持ってきた。

ミリエルは慌てて手を下ろす。

最初見たときは何事かと思ったのだ。

ミリエルが最初にこの部屋に通されたとき、頭半分背の高い女官がいた。

確か女官たちの身長は全員そろっていたはずと思い、見てみるとそれはマルガリータだった。

その場でミリエルはどう対応しようか悩むことすらできず、思考停止状態に陥った。

「妃殿下にお使いすることになった。マルガリータ・ツエレでございます」

澄ました顔でそう告げる彼女に、これは報復だろうかとミリエルは本気で疑った。

「だって、暇なんだから」

ミリエルは頬を膨らませる。

「それでしたら、リユートを持って参りましょうか、王太子殿下はたいそう妃殿下のリユートがお気に召していらっしゃいますから」

「何か読むものを持ってきて頂戴」

この別荘、年に一週間しか使わないにもかかわらず、図書室が完備している。

たった一週間なら、読む本だって高が知れているんだから、持って歩けばいいのに、とミリエルは思うが、こういうめったに使わない別荘にも文化的な図書室を完備するのが貴族の慣わしだという。

余りの無駄に頭痛がしてきた。

「どのような書物をご希望ですか」

「そうね、サヴォワの織物に関する文献をお願い」

マルガリータは恭しく一礼してその場を立ち去る。

ミリエルの苛付く原因の一端はこれだ。

マルガリータが女官としてミリエルについでくれるのは少し嬉しかった。しかし、マルガリータはそれ以降ミリエルを妃殿下と呼び、命令とその受諾、それ以外の会話を一切受け答えしなくなっていた。

そういう立場なのだといわれればどうしようもない。

マルガリータは扉を閉じるとミリエルの様子を伺う。

妃殿下と呼ぶたびにどこかミリエルの表情が歪む。

居間は静かにお茶を飲んでいるようだ。

「しょうがないだろう」

ミリエルは一国の王太子妃なのだし、マルガリータはその王太子妃に使える女官だ。

あの旅のようにには行かない。

パタパタと忙しくベッドメイクや服のブラシがけをしていた彼女には何もさせてもらえないのが一番辛いんだろうなとうすうす感じていたが。

それでも、慣れてもらうしかない。だからあえてマルガリータは態度を女官に徹底した。

多少かわいそうだと思ったが。

騎士と傭兵のパラドックス

木々の梢に小鳥が遊び、風はほんのりと冷たい。

この別荘には温泉が付いていて、使う水もほのかに温かい。

水仕事をするときには都合がよいと、使用人たちには好評だ。

マルガリータは、最近では手馴れてきた雑用を黙々とこなしていた。

騎士ではなく、女官としてミリエルに仕えることになったのは、いざというときには盾になれるようにとのことだろう。

騎士では、付いて行ける場所に限界があるから。

図書室に入ると、ミリエルのご要望の書物を探す。

ミリエルは、読書をするときも、恋物語や詩集などは頼んだことがない。いつも実用一点張りの専門書ばかりを読む。

織物図案集と紡績の歴史、どちらを持っていったものかとしばし悩んだが、二冊まとめて持つて行くことにした。

どのみち図書室で読書しようなどと考えるのはミリエルだけだ。それなら二冊持つて行ってもかまわないだろうと。

かなり大判の本を抱えて廊下を歩く。

ここは嘘のように静かだ。

王太子にここに逼塞する際聞いた話だと、この種の別荘は、複数あるし、全て辺鄙な場所にあるので、居所を突き止められる可能性は低いのだとか。

この規模の別荘が複数。

マルガリータはつくづく王室というものの財力に呆れ返った。

使用人といっても、ミリエル一人のことなので、最低限。

すべての部屋が使えるようになっていくわけではなく。ミリエルの使う主賓室以外は、使用人用の大部屋を二つだけ。本来は五つの使用人室がある。客間も、ミリエルの部屋に近い物を数室。高級女

官用に使えるようにしてあるが、他は、埃よけの布がかかったままだ。

ミリエルが別荘入りする二日前に大掃除で、使えるようにしたらしい。

持参してきた食料の量を考えると。あと一月はここで過ごすことになるそうだ。

そんなことを思いながら、マルガリータはミリエルの部屋に戻った。

ミリエルは本を受け取るとタイトルを確かめ、紡績の歴史から読み始めた。

ミリエルのもとに、いまだ王太子からの連絡は来ない。

そして積み重なるミリエルのストレス。

ミリエルは字を追うのに没頭しているように見える。しかし、それでもついに思いつきにはいられないのは、クライストのことだ。

ミリエルを殺そうとしたクライスト。最初から、反王太子派に雇われており、ミリエル姫を暗殺するのが任務だったとあとで聞いた。クライストがマルガリータに声をかけたのは、マルガリータが異国とはいえ男爵令嬢として生まれていたからだだった。

貴族出身というものは、同じ貴族に対して絶大な効果がある。最初からクライストはマルガリータを隠れ蓑に使うつもりだった。その事実気付かなかったことは、マルガリータの誇りを少々傷つけた。

それ以上に、他の傭兵に付き添われて、涙目で送り届けられたミリエルの様子が忘れられない。

今の平和は見せかけ、いずれことが起きる。

平和を教授できるのは今だけかもしれないのだとミリエルに言い聞かせたいが。今のむつつりと黙り込んだミリエルにそれで説得できる自身はない。

騎士と傭兵のパラドックス（後書き）

年内の投稿はたぶんありません。年末年始ですし、パソコンを開く余裕があるか怪しいです。

人生を賭ける節目（前書き）

あけましておめでとございます。

人生を賭ける節目

レオナルドは首都カラバールの隣の地に陣取っていた。

これから、自分のもとに静かに、しかし着々と主と奪還のための軍勢が集まりつつある。

もうじき冬がやってくる。本格的な冬が訪れる前に決着をつけねばならない。

何度も軍隊の長と話をし、また軍勢を養う兵糧や、物資、武器の手配の様子を抜き取りなく確かめていた。

「慎重になるのもわかるけどね」

そう言って、パーシヴァルは書類を睨むレオナルドを諭す。

「確かに、君の幼い頃の後見人が、手柄を焦って無駄な進攻をして大損害を与えた。だから今度は失敗できない、その気持ちはわかるよ。でも、そでががちになったら別の意味で危ないんじゃないか」

レオナルドはパーシヴァルを睨みつけた。

「君も愛しの妹君と一緒にいればよかったんだ」

言われたパーシヴァルは苦笑する。

「僕は別にミリエルといられなくなって拗ねてるわけじゃないよ、純粹に君の余裕のなさを危惧してるだけだ」

それは余計に悪い。そんなことを言いたくなかった。

「それに僕は陛下から君の相手をおおせつかっているし」

「監視の間違いだろう」

パーシヴァルは苦笑した。

「それも事実だけど、でも君との友情も本当のつもりなんだよ」

ふざけた言い様だが、レオナルドもそれは疑っていなかった。サヴォワが監視役をつけるなら友人である彼をというのはある意味気遣いだとも思っていた。

彼ならそれほどレオナルドを不利な立場に追いやりたりはしない。

「でも、どうしてミリエルを置いて行ったりしたんだ」

純粹に疑問に思っていることをパーシヴァルは尋ねた。

か弱いお姫様は足手まといだ。というのは単なる一般論だ。

か弱くないお姫様だということはすでに彼も飲み込んでいるはず。

「彼女がか弱くないということを知っているのはほんの数人だけだ。

だから、か弱いお姫様の存在は士気に関わる」

「でもそれで返って奮い立つケースもあるよね」

パーシヴァルがそう指摘したが、レオナルドは頑として言い切っ

た。

「ミリエルは首都奪還がすんだ後に迎えに行く」

決意のにじんだその表情に、パーシヴァルは説得をひとまず諦めた。

自分の仕事を持って自室に戻ったパーシヴァルは執務机に懷いていた。

「閣下、そのような格好をされては」

古参の部下、確か自分に最初に付いた騎士だった相手がたしなめる。

確かに最初に彼が来たとき自分はまだ十を過ぎたばかりの子供だったが、それでもこういう態度をとらなくてもと思う。

「せっかく妹と睦まじく暮らせると思っただのにな、どうせすぐお嫁に行くんだから今ぐらいって思っても」

うじうじといじける上司に相手は容赦ない。

「ならばあの別邸に残ればよかったのでは」

「だって仕事があったんだよ」

「そう、最初に仕事を選ばれたのは閣下です、男なら自分の選んだことに最後まで責任を持ちなさい」

いわれてますます机に沈み込む。

「あの子だって寂しがったり心細がったりしてるんじゃないかと思うと心が痛む」

「どちらかというと、腕がなまると泣き暮らしているのでは」

自分抜きで最終決戦をやらかそうとしていると知ったら金切り声を上げて泣き叫ぶだろう。

自分にも殺らせろと。

眦を吊り上げて凶器を振り回す姿までありありと想像できる。

「誰か用意しといてよね、鬱憤を溜め込んだあの子のために、適当な生贄を」

パーシヴァルの言葉に不本意ながら頷かずに入られなかった。

薄皮一枚の平穩

白に灰色、斑入りの大理石に飾られた瀟洒な別荘。

深山の奥深くに突如現れる別世界。

その夢のように優美な建物に、かの少女が匿われているという。

彼は、大きく息をついた。

余り使われていない規模の小さな別荘。そうした建物はサヴオワ全土に十数もある。その中の一つを割り出すのに、どれほどの労力と知能を使う羽目になっただろう。

しかし、彼の労力は報われた。

少女はあそこにいる。

ミリエル・アレクト・リンツァー。リンツァー国王の養女。そしてサヴオワ支配の切り札。

護衛の数は少ない。おそらく王太子は短期決戦を狙っているのだろう。

この辺鄙な別荘に少女を隠してそれで安心しているのだろう。その見通しの悪さを彼は笑う。

彼の軍勢は、ゆっくりと別荘を包囲しつつあった。

ミリエルは静かに読書に勤しんでいた。もう道は定まったとミリエルは思っていたので、このまま王妃になっってしまうならなんらかの勉強は必要だったから。

しばらく本を読む暇はなかった。一心勉強に勤しんでおこうとその時は殊勝な決意を固めていた。

もし、首都近くの町で兄の漏らした言葉を聞いたなら、人をなんだと思っているんだとミリエルは怒り狂っただろう。

そんな時間が持てるほど、ここでの暮らしは平穩だった。

食事は間に合わせの料理人らしく。庶民的なもので、それはミリ

エルの助かったと思っていた。

たとえ御付の女官達が不満そうな顔をしていても。

落ち着いてみると、女官たちの間で、マルガリータは少々浮いた存在になっているようだった。

無理もないとミリエルも思う。元々女騎士だったし、遠い異国人であるマルガリータに前々からリンツァー王国の王宮勤めの女官達がなじめるはずもないと思っていた。

どうせなら騎士の格好で勤めていればいいのに。

地味な黒と紺の女官のお仕着せを着ていれば、かろうじて女に見えるマルガリータにどちらかといえば痛ましいものを感じていたミリエルは、何度か話そうと試みたのだが、マルガリータはどうしても私的な話には答えてくれない。

ミリエルは衣装係の女官たちに無理矢理ねじ込んで武器の携帯を許可させたし、母親が用意してくれた、毛織の外套と、私服も手の届くところにおいておくよう指示しておいた。

きちんと洗濯されたそれは、寝室の壁にかけてある。

それが活用されるようなことはないと言いつつ。だけど、それでもあれがいざという時あるというだけで心強いのだとミリエルは言い張った。

おそらく。マルガリータもドレスの下に剣の一本も仕込んでいるのだらうとミリエルは思う。マルガリータの役目は見えない護衛。

随分な貧乏くじを引かされたものだ、思わず同情しそうになった。

ミリエルとしては。未永くマルガリータについてほしかったので、私的な話し合いのできる相手になってほしかったのだが。

そして、レオナルドは、未だにコンスタンシアの状況を知らせてこない。

コンスタンシアの処遇をミリエルに決めるかといっておいて知らせてこないのは少し約束違反だとミリエルは思う。

慣れない生活に少々いらだちながらミリエルは一日一日を過ごし

て
い
た。

めくれた薄皮

最初に、異変を感じ取ったのは、パーシヴァル付きの騎士だった。彼は、パーシヴァル付きの騎士の仲でも古参で幼い頃からパーシヴァルに仕え、その境遇の複雑さに付き合ってきていた。

そのため機を見るに聡く目端が利いた。大きいといっても季節ごとにしか使わない別荘。一回りするくらいならさして時間はとられない。それによって、彼は、今現在取り囲まれていると判断した。

即座にもう一人の騎士に知らせた。

「私はミリエル姫に伝えに行く。お前は何とか脱出してパーシヴァル様のところへ」

最初からいざというときの役割分担は決まっていた。

ミリエルの部屋の前には、最近雇われたばかりの大柄な女官が立っていた。

その女官に手短に事情を話せば女官は無言でその場を譲った。

話を聞いている間、ミリエルは無言だった。

小さく俯いたその顔が、再び上がったとき、ミリエルは、毅然とした表情で、彼に向き直った。

「こちらの兵力はどれくらいなの、それと、装備は？」

その口調はきびきびとしてよどみない。

「騎士は十人、兵士が、二十人ほどですそれぞれ体験しており、弓矢も人数分ございます」

「籠城は、長時間は無理ね」

ミリエルは、そう言うつと、椅子から立ち上がりマルガリータに声をかけた。

「マルガリータ、女官たちにした働きの女達に服を借りさせる。直ちに着替えると、無論お前もその女官のお仕着せから着替える」

断固とした命令者の声音で一息に言った。

マルガリータは即座に身を翻した。

「姫もお召し替えをなさるので」

「私はあとでいい、いざという時、何があるかわからないからな」
そのいざという時って何だと彼は問い返したかったが、ミリエルは再び椅子に坐る。

女官の一人が青ざめた表情で、飛び込んできた。

「ミリエル様、敵襲とは」

「話を聞いたなら私の命令はわかっているはずだ、こんなところでぐずぐずしてないで、さっさと着替える」

腹に響く怒号だった。

風に吹かれたように女官は泡をくって再び駆けさつていく。

「まったく、サヴォワにくると命じられたときにこういう覚悟は決めていたんじゃないのか」

そう愚痴ったがいつまでもそうしてはいない。

「見張りの兵に命じろ、それと、非戦闘員はまとめて置け」

きびきびと動じることなく命じるミリエルに騎士は一礼した。

「かしこまりました」

騎士が出て行ったのを確認して、ミリエルは爪を噛む。

「しくじった。このあたりの見取り図を確認しておくべきだった」

今更言ってもしょうがない。そもそもミリエルを自室に軟禁状態に置いたのは、あの女官たちだが。

「やっぱり、誰がなんと言おうと、外に出て様子を見ておくべきだったか」

その溜息は苦い。

そのミリエルのもとに、騎士の装束をまとったマルガリータが戻ってきた。

譲れない思い

クライストは、うらぶれた酒場で、一人酒を飲んでいた。

「情報は教えた、しかしどれほど効き目があるか」

クライストの雇い主はミリエルを獲得するために、すでに旅立った。

クライストも同行を求められたが断った。サフラン商工会特殊部隊総長の孫娘と係わり合いになりたくなかったからだ。

その肩書きを聞いた段階で、ミリエルは自分の獲物から忌避すべき災いへと換わっていた。

サフラン商工会の名は、冥、闇よりも更に濃い漆黒の闇そのもの。その特殊部隊を統括する男の孫娘、これほど禍々しいものがあるだろうか。

最初にミリエルを見たときの事を思い出す。無言で臓物の煮込みを啜っていたが、サン・シモンの狂犬の言葉を聞いたとき、確かにこめかみが引きつったのを見て取った。

その時から、おそらくサン・シモンでサフラン商工会関係者だというあたりはつけていたのだ。

どちらかというと、ミリエルが、リンツァー国王の養女だということより、特殊部隊総長の孫娘だということのほうがクライストは重きを置いている。

今まさに、サフラン商工会からの刺客が背後に忍び寄っていてもおかしくないのだ。

「案外、殺り損ねたのは運がよかったのかもしれない」
本気で、心からそう思う。

生きている、それこそが一番の成果だ。あの時ミリエルに止めを刺していたら、その直後にウォーレスに今度はクライストのほう氣息の根を止められていただろう。

遠眼鏡越しに、廊下をあわただしく走る女達が映る。
どうやら気取られたようだ。しかしもう遅い。

男は刃物を思わせる笑みを浮かべる。

彼らはもう袋の鼠。すでに取り囲まれているのだ。手勢も少なく、彼らが生きていたければ、あの少女を引き渡すしかない。

少女は今頃震えているだろうか。どれほど恐れようと、少女の運命は決した。もはや生かそうが殺そうが、この手の中。

彼は自分の勝利を疑いもしなかった。

そして手勢に合図を送る。少女を追い詰めるために。

そのとき、件の少女は、マルガリータに叱咤されながら普通の平民が着るような衣服に改めさせられていた。

結い上げられていた髪は、下ろして一本のおさげにまとめられる。ミリエルの周囲は、地味な茶や灰色の衣服を着た使用人に囲まれていた。

「ええと、どうしてこうなってるんだろう」

ミリエルの素朴な疑問に、マルガリータは無表情に答える。

「お前が非戦闘員を一箇所に集めると言ったんだろう」

先ほどまで、妃殿下呼びしていた態度を一変させ、ぞんざいな口の聞き方に、ミリエルは少し嬉しい気がしたが、一つだけ聞き逃せないことがあった。

「誰が非戦闘員だって」

「お前だ、仮にも妃殿下を戦闘要員扱いできると思っているのか？」

マルガリータが噛んで含めるように言う。

無論ミリエルは納得しない。ミリエルは、いざという時戦えるからサヴォワに送り込まれてきたのだ。それなのに、そのいざという時戦うと言われてどうして引き下される。

「それでも全体の指揮はあたしが取るんだから」

「それ俺達の役目なんです」

部屋の隅で物悲しく呟く騎士達^がいた。

破天荒少女

あからさまに間違ったことを言い出さない限り、騎士達はミリエルに従うというところで事態は手打ちになった。

ミリエルは、食料を日持ちがしてすぐ食べられるものは小分けにして、一人一人に配るよう指示を出した。分散して逃げることを考えてのことだ。

その判断に騎士たちは異を示さなかった。基本的にミリエルの言っていることは、事態に即している。

もつとも、何をしていたかわからずおろおろと泣きつくのが普通の姫君なので、こうした常識外れっぷりには戸惑うが。

果たしてどちらがよりましなのだろうと考えてしまう。

ミリエルは遅くとも見ないよりましと、周辺地図を凝視している。「分散して逃げる場合と、集団で中央突破、どちらでもいいように指示を出しているけどどちらが現実的かしら」

ミリエルの問いに騎士達は、それぞれ顔を見合わせる。

「姫君を確実に逃がすならば分散して逃げたほうが得策と存じます」
ミリエルは無言だ。

「姫君、この場合、最悪の事態は姫君が敵の手に落ちることだと考えてください。たとえ何人が逃げられたとしても姫君が逃げられなかったとしたらそれは我々の敗北なのです」

「つまり、敵を殲滅するより、確実な逃亡こそ今求められていることか」

殲滅させるつもりがあつたんだろうか。ちらりと浮かんだその考えを横に追いやり騎士は続けた。

「ですから、分散して、気の毒ですが、何人かは囷となることになります」

囷となった者が捕まれば、命の保障はない、それを込みで彼はミリエルに説いた。

「姫君のお姿が、どこにあるかわからないようにと考えれば、そうするしかありません」

「でも、この場合、有効かしら」

ミリエルが地図の上に指を走らせながら呟く。

「逃亡するとしても、この場所の場合、逃げる方向は決まっているのよ」

ミリエルは、近くの街へと続く一本の道を指先でなぞる。

「私を確実に捕らえたかったならば、たとえここで行方をくらますことができたとしても、道のどこかで待ち伏せしていれば確実に押さえられるということ」

たとえ、別荘から放射状に逃げていったんはまいたとしても、いずれ街道に戻らざるをえない。その街道に待ち伏せを受けたら。

ミリエルの指摘は痛いところを突いた。

元々その場所に逃げ込むことを前提としての布陣だと、見る者が見ればすぐにわかる。

「ならばどうする？」

「私、捕まるわ」

その時ミリエルがにつこりと笑って、そういったその瞬間、その場の全員の意思はまったく同じ言葉を脳裏に浮かべていた。

「さっきまで何を聞いていたんだこの娘は」

ニコニコと笑いながらミリエルは言った。

「たとえ私を捕まえても、私を人質として活用できなければ同じことでしょう？」

誰もミリエルの言っている意味を理解できなかった。というよりしたくなかった。

ミリエルとマルガリータは夜の闇に紛れて、別荘を出た。同じように、騎士と、女官たち、そして使用人達が少し筒、周辺の茂みに潜り込んでいく。

「ミリエル、そううまくいくだろうか」

マルガリータにミリエルは笑って答えた。

「うまくいかせるの、他に方法はないと思うし」

たとえあってもこの少女は一番過激な方法を迷わず選ぶのではないだろうか。

遅ればせながら、マルガリータはようやくミリエルの性格を掴み始めていた。

ミリエルは、騎士の衣装からもう一度下級女官の衣服に着替えさせられたマルガリータに進むよう促す。

二人は足音を殺しながら歩き始めた。

破天荒少女（後書き）

ミリエル力技で押し切りました。次はレオナルドたちのほうも出てくるんじゃないかなと思います。

破天荒少女2

兵士は物陰に蹲り、小刻みに震えている少女と、それに立つよう小声で叱咤している大柄な女の二人連れを見つけた。

着ているものは二人とも粗末だが、少女の年齢は、件の姫君と一致する。

背後にいた仲間に出し、二人の身柄を押さえさせた。

大柄な女が短剣を持ち出し、抵抗の様子を見せたが、軽くはたき倒した。

二人の女を連行して、自分達の主のところに連れて行く。

すでに何人かの女が、主のところに連れられていた。その傍に縛られた騎士らしいものも蹲っている。

ほとんどが怯え、すすり泣いている。

主は大柄な女はさつさと無視した。歳も合わず、さして美しくなかったからだ。

そして、少女の顔を見たたん歓喜にのぼせ上がった。

「この少女だ、間違いない、ミリエルだ」

おさげに余れた髪は淡い金色。翡翠のように美しい緑の瞳。整った目鼻立ち。

それをつぶさに観察し、嬉々とし手少女の腕を掴む。

「ついに手に入れたぞ、切り札を」

その瞬間まで、彼は自分の勝利を疑いはしなかっただろう。

「私を捕らえた貴方のお名前を聞いてよろしくて」

少女が、不意に口を開いた。

やや甲高い、しかし不快ではない声。

壮年の、やや恰幅のいい男は、年齢のわりにふさふさとした黒髪を気取ったしぐさで書き上げた。

「私は、ラキスタン大公だ。そしてそなたを娶り、この国の王になる」

はたして、この男の言い分をリンツァー国王は認めるだろうか
とミリエルは思った。

そもそもレオナルドに肩入れしたのだってレオナルドが、リンツ
ァー国王と血のつながりがあるからだ。血のつながりがあっても、
リンツァーで育ったわけではないミリエルとの縁組が、リンツァー
国王にどの程度影響力があるか。

しかし、考えるのはここまで、ミリエルは、男に抱き寄せられる
ままその胸に飛び込み。そしてするりと抜け出した。

脇から背後に回ったミリエルはその太い首に手を回し、一気に締
め上げた。

頸動脈を狙えば、ものの数秒で落とすことが可能だ。

一人を除いて、何が起こったか理解できないでいた。

その一人は、スカートの下から自分の愛用の剣を抜くと、ミリエ
ルの腕の中でくずおれた男の首に突きつける。

「全員、動くな」

マルガリータの声があたりに響いた。

ミリエルが一人の女を睨むと、その女は慌てて騎士の拘束を解き
始めた。

ミリエルがポケットから針金を取り出すと、男、ラキスタン大公
の両の親指を後ろ手に束ねて拘束する。

そして腰の剣を奪うと、拘束を解かれた騎士の一人に投げてやつ
た。

剣を取った男は、適当なところにいる兵士をなぎ倒して武器を奪
う。

それを仲間に渡し、その場にいた騎士はすべて武装した。

「では、脱出しましょうか」

ミリエルの手から、ラキスタン大公の身柄を受け取った騎士に、

ミリエルは笑って語りかけた。

「御意」

ミリエルに一礼すると、騎士は、ミリエルと、女官達をまとめて、

周囲を仲間の騎士で囲んだ。

「動けば、ラキスタン大公の命はない」

その言葉に、周囲の兵達は金縛りにあつたように動かない。

主を死なせれば責任問題だ。そのため誰もその大一步を進めることができないでいた。

矢を射掛けようにも、大公の大柄な身体を盾にして、死ぬ時は道連れにする気満々だ。

なすすべもなく、進んでいくその姿を見送るしかできなかった。

破天荒少女3

あらかじめ捕まる者と逃げ延びて待ち伏せする者とに分かれての作戦だった。

待ち伏せ班は、貴市ではなく兵達で組織され、騎士が、一人その指揮を取っていた。

拘束されたラキスタン大公を掲げて合流してきた仲間に密やかな歓声と、そして呆れの混じった声が交錯した。

ミリエルは、それらを横目に見ながら、へたり込んでいる女官に話しかけていた。

「姫、これどうします」

そう言って騎士の一人がラキスタン大公を指差す。

「そうね、とりあえず、いざという時のためにとっておきましょう、もし役に立たないなら適当な川にでも放り込んで厄介払いすればいいわ」

面倒くさそうにそう言っていると、ミリエルはラキスタン大公をつくづくと見る。

「そうだわ、ズボンを剥ぎ取って適当な布を腰に捲かせなさいよ、だって御不浄を使いたいつて言われても、拘束を解くわけには行かないし、それなら最初から穿かせなきゃいいのよ」

「ええと、それはちよつと非道では」

マルガリータが思いつきりひいた顔でたしなめようとする。

「でも、それじゃ、そのたびにズボンの上げ下ろしをしたいの?」

そう言って騎士たちの顔を見た。

全員顔を横に振った。

「じゃ、決まりね」

ミリエルは朗らかに笑う。

世にも情けない顔をしているラキスタン大公を見てマルガリータは思わず顔を背けた。

恨むなら、お姫様という固有名詞だけでミリエルという少女を判断した己の愚かさを恨んでくれと心の中で祈りながら。

そうこうしているうちにもう一段落あった。

騎士の一人は、深い森を掻き分けて、レオナルドの待つ首都カラバールへと向かう。

そこで事情を話し、港町の隠れ家に潜伏するミリエルへ迎えを出す算段をする。

ミリエルたちはその気氏の後姿を手を振って見送った。

あの騎士の道行きは、相当厳しいだろうし、ラキスタン大公の私兵達の残党もかわさねばならない。

その背中を見送って、ミリエルたちも進み始めた。

レオナルドは首都カラバールへと向かう準備に忙しかった。しかし、早馬の知らせを耳にすると、眉間にしわが寄った。

今まで動かなかったラキスタン大公が、今所有する土地を離れているというのだ。

ラキスタン大公がこの十年動いたことはない。常に中立の立場に立っていた。しかし、中立ということはいつどちらに転ぶかわからないということでもある。

ラキスタン大公が、どちらかの勝者に付こうと考えているならよし、しかし両者共倒れを狙って打って出てくる可能性も否定できない。

レオナルドは報告書を握りつぶしながら、その可能性を探った。

「まさか、ミリエルを狙ってるってことはないよね」

脇からパーシヴァルがそんなことを言い出した。

「どうも妙なデマが飛び交っているらしいんだ。ミリエルを得ればサヴォワの王座に近づけるって言う。いくらなんでもそんな筈無いんだけどねえ」

パーシヴァルは最初その話を聞いたとき、笑ってしまった。

ミリエル自身はサヴォワ王家の血を一滴も受け継いでいない。

ミリエルに流れているのは、主にリンツァー王家と、サン・シモン王家が少々。お姫様なら何だっていい訳じゃないのにねと。

しかし、それなりに根拠があつてそんな噂が流れているのだとすれば。

レオナルドの血の気が引いていった。

破天荒少女3（後書き）

レオナルドは書くたびに可哀相になっていきます。

マルガリータの諦念（前書き）

このところ更新が滞りがちです。続きがなかなか浮かばなくなってきています。

気長にお待ちください。

マルガリータの諦念

幌付きの馬車に乗ってミリエルは、港町へと進んでいた。

あらかじめ逃亡用に、道の途中に馬車を隠してあったらしい。最初にのせられた護送車に似ているが、窓を大きくとっており、開口部も大きい。少々寒いが、その場合、フェルトの布の天幕を馬車の中に吊るし、その中で寒さをしのげるようになっていた。

すでに季節は冬に近づいていて吹きっ晒しの幌付き馬車はかなり辛い。

ミリエルは歩いていくつもりだったが、馬車のほうが早くつく周囲に言われそのまま馬車の上のクッションに坐っている。ミリエルは、マルガリータと同じく髪を暗い色に染められていた。

マルガリータの黒髪を、ミリエルのような淡い金髪に染めることは不可能だがその逆は簡単だという理由だ。

ミリエルとマルガリータは姉妹を名乗ることになっている。

たとえ髪の色を似せてもミリエルとマルガリータの顔立ち自体が違うのでかなり無理のある設定打破内科とミリエルは思っていた。

馬車の中でぼうつと風景を眺めるだけの時間は再び暇という拷問がミリエルを襲った。

今は図書室という暇を潰すアイテムもない。

そういえばあの別荘どうなったんだろう。

今頃は、あのラダスタン大公とやらの部下が略奪しているのではとふと思った。

馬車にはマルガリータも乗っていたが、仲良くおしゃべりという気分ではなかった。

そのまましばらく沈黙していたがとうとう耐え切れず、ミリエルはマルガリータに話しかけた。

「そういえば、荷物はどうしたの」

「最低限のものは持ってきたが」

気のない様子で、マルガリータは答える。

その様子にミリエルは少しじれたが、続けて尋ねる。

「あの荷物、どうしたの？」

ミリエルが何を尋ねているのか察したのか、マルガリータは苦笑しながら答えた。

「あれなら、置いてきた」

あっさり言われてミリエルは仰天した。マルガリータの荷物、それは背負うくらいの袋に詰め込まれた宝石類だ。

総額はざっと見た限りでも、ちよつとした家を買える。それもそこそこの人数が住める家が。

「ど、どうして置いてきたの、今頃はあの別荘は襲撃されて略奪されているはずよ、あの宝石もつとくに盗まれているんじゃない」

「ああ、だろうな」

マルガリータはまったく気のない顔でそう答える。

「略奪し甲斐があるほうが足止めできていいんじゃないか」

ミリエルは頭を抱えた。マルガリータの経済観念は、サフラン商工会で鍛え上げられたミリエルの経済観念と決定的に相容れない。

「あれは、嫌な思い出の塊だからな」

その言葉にのたうつていたミリエルは我に返る。

「路銀は豊富なほうがいいから持ち歩いていたが、最終的に落ち着き先が決まれば、処分するつもりだった、ちよつどいいだろう」

マルガリータは妙に晴れ晴れとした顔で、笑った。

「落ち着き先は決まったの？」

ミリエルは狼狽したのをごまかすように聞く。

「ああ、次代の王妃付きに是非と、マーズ將軍から申し込まれた」

「そっか、よかったね」

ミリエルは緩んだ口元を隠すように顔を背け、他人事のようにそう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1538x/>

暁の星とともに

2012年1月10日23時48分発行